

庄内

創刊号

庄内の昔を語る会

創刊のことば



「庄内の昔を語る会」会長 野海 正治

日に月に移り変りはげしいいまの社会で、山や川など自然の変貌と同時に、祖先が築きあげた尊い遺産も、忘れ去られるような気がします。

この先人の残してくれた文化遺産ともいうべき尊い足跡をさぐり、古老の記憶にある歴史を、苦難の話を、今、とどめて子や孫に伝えるのは私たちの責任だと思います。

「庄内の昔を語る会」は、その名の通り、お互いがざっくばらんに庄内の昔を語り、先人の足跡をしのび、現在を考える会です。

昭和六十二年の五月三十日、会員34名で発足、現在は58名の会員を数えます。

爾来、早くも二年余り、その間、講演会には著名な郷土史家の先生方をお招きし、会員相互の発表会も活発で、それこそざっくばらんに、ゲナ話も豊富にだしました。

更に、自分たちの郷土を直接歩いて、自分の足で確かめる史跡探訪をおこないました。関之尾地区を皮切りに、城山を中心とする中央区は二回にわけ、平田、乙房地区、菓子野地区を最後に庄内地区を一巡しました。

各探訪箇所における説明など、それぞれの地区の会員を中心に話し合いましたが、各地区とも古老の方々ですすんで話題を提供し、史跡にまつわる貴重なお話があり、更に家宝ともいふべき品々を披露していただくなど、望外の喜びでした。

永年庄内に住んでいながら、中々くわしく知ることのできない、遺跡の由来、先人の足跡を自分の足で確かめること

ができ、郷土の再発見と喜ぶことでした。

発足以来二年余り、この際せっかく蒐集した資料、記録の保存、発表を冊子にまとめすることにいたしました。そして子や孫に語り伝えたい話をと、広くお願いしたところ、戦争中の苦難の思い出の数々、吾が青春の記、更に祖父母から伝え聞いた話など、貴重な記録をたくさん寄せられました。

冊子「庄内」には、それが拙ない表現であり、おかしな言葉であっても、庄内の発展を願いながら、故郷を思い、祖先の苦勞をしのび、それを子孫に伝えたいという、熱意があふれています。

本号を創刊号として、まだまだかくされた先人の足跡をさぐり、伝説、民話などの発掘に努め、次号は、更に充実したものを、と期しています。

「語る会」の発足、「庄内」誌の発刊に当たっては、当地とも縁の深い、郷土史家瀬戸山計佐儀先生の一方ならぬご助言、ご指導をいただいたことを付記し、先生への謝意とします。



創刊を祝して



「庄内の昔を語る会」顧問 瀬戸山 計佐儀

人のよく知る「温故知新」（古きをたずねて新しきを知る）という言葉は、大聖孔子の語として『論語』の「為政第二」に見え、「既に習得したところに依って更に工夫を凝らせば、新たに悟るところがある」の意に解釈されますが、われわれの豊かな生活の現在があるのも、父祖たちの孜孜営々として精励された物心両面に亘る累積の結果であって、将来（新）は現在に拠って立ち、現在は過去（故）に拠って立つものであるから、より良い将来を創成するには過去（故、歴史）に鑑み、父祖に感謝するところがなければならぬ、という訓戒とも受け取れます。

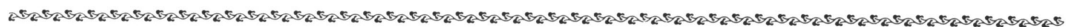
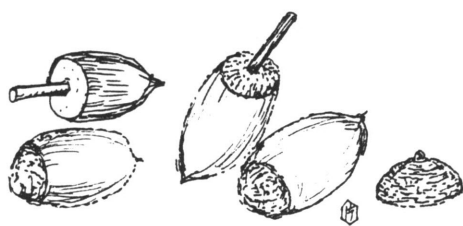
論語には「子曰、温故知新」の次に「可以為師矣」とあり、これは、過去に依って新たに悟るところを得れば「人の師となれる」とも解釈できようが、過去（歴史）の学習が将来を創成する「師（資）となる」意とも考えられます。

昭和二十五年に結婚した山妻は庄内の生まれですので、私は庄内の歴史にも関心を持っており、各町村にはそれぞれ町村史があるのに「庄内町（村）史」のないのをかねて遺憾に思い、自分で余暇に調査し編集してみようかと考えたこともありました。が、錚々たる人物が沢山おられるのだから潜越の誹りを受けることを恐れて躊躇し、僅かに数年前「庄内の観瀾舎」について調査し、都城史談会で発表して機関誌に掲載して貰ったに過ぎませんでした。

そして、その後、史談会の新年宴会の場で庄内出身の会員方に対して、例を三股にとつて庄内地区の史談会結成を極力慫慂した結果かどうか、遂に「庄内を語る会」が誕生した上、この度、機関誌が創刊される運びとなったことは、誠に喜ばしい限りであります。

祖先の事蹟を調査・記録して子孫に残すことは、庄内現住者の責務でもあります。この機関誌は正に「温故知新」の最

大ともいえる好きヨスガとなるものと確信されます。今後一層の会の発展を祈念し、また期待して、創刊お祝いの辞に代えさせていただきます。



目次

詩・短歌

過去二年間の歩み	一	庄内の乱行 <small>うた</small>	八
庄内の歴史年表	三	史跡探訪他	三
特別寄稿		子や孫に語り伝える話	三
鬼島令三島通庸	二	宮之原家言い伝え	九
研究		菅原神社由来記	九
庄内史跡探訪	七	川底の土器	九
庄内の石仏、石碑、講について	七	首なし地蔵	九
樹齡四百年	四	かくれ念仏洞覚書き	九
昔の庄内行政		先輩から聞いた話	九
歴代の町村長、助役、収入役一覧	五	オミケン坂	九
講演のあらまし	五	火の神の話	九
「交流」 植木町 中村稲男氏より	五	里寺仏壇の話	九
追憶		一門講の話	九
我れ満州に生きて	五	三体の田の神さあ	九
心のふるさと	五	田原坂で戦死した孝之丞のこと	一〇〇
平和を誓う	七	塚野孝之丞の墓詣りのこと	一〇一
太陽に向って生きた人生	七	孝之丞の墓詣り	一〇三
		塚野孝之丞の墓詣り	一〇三
		父より聞いた昔の歌	一〇四

火事場の腰巻き	一〇五
桜会のこと	一〇六
年寄りの知恵	一〇八
乙房剣友少年団設立当時の思い出	一〇九
神田川堤防決壊のこと	一一〇
旧制女学校時代の思い出	一一一
ボランティア、昔と今	一一三
ひとつぶの飯	一一四
廟巷鎮の話	一二六
支那大陸五千杆を歩く	一二七
昭和の初め頃の婦人活動	一二九
朝鮮からの引き揚げ	一三二
とても恐ろしかったこと	一三三
終戦前後の思い出	一三四
編集後記	一三六
会 則	一三七
会員名簿	一三六

〔表紙題字 願心寺住職 大河内 浩 爾〕
 イラスト 片ノ坂 登

過去二年間の歩み

庄内の昔を語る会

昭和六十二年正月、市史談会の新年会の席上、郷土史家の瀬戸山先生より「古い歴史と伝統ある庄内を顕彰するのは庄内町民であり、あなた方にはこれを子や孫に語り伝える責務があるのです。」と懇切な指導助言を頂きました。

同席の木幡氏と相談し、まず同窓の清水氏にこの趣旨の賛同を得、西区の先輩野海氏の参加を願って四名で会合したのが始まりで、順調に準備委員の選考ができたのが一月末でした。

たまたま西区の菓子野氏、東区片ノ坂氏の間にもその動向があり「善は急げ」と第一回準備委員会開催の運びとなった次第です。

第一回総会（発会式）は34名の同好者の参集のもとに「郷土資料の発掘と史跡、文化財の探訪、顕彰及び保存」を主な目的とすることを満場一致で賛同頂き、新会則を制定しました。

会長、野海正治氏（西区）副会長、福崎孝臣氏（町区）、同馬龍良孝氏（乙房）の立派なスタッフのもとに今後の会の発展

を祈りながら盛会裡に幕を閉じました。

昭和62年度は、まず庄内の歴史と伝統を理解することを第一に、講演と研究発表等を主な事業として五回の定例会を開催しました。

昭和63年度は会員数も発会当時の49名から58名に増加し、特に40代の若い層の入会は、会の進展の為にも心強い限りです。今年度は史跡探訪に重点を置き、関之尾、庄内地区の古老、有識者の協力、援助を得、有意義な探訪計画ができたことを会員一同喜んでいる所です。

特に、毎回、事前調査と資料提供の労をとって頂いた坂元徳郎氏に厚く御礼申し述べる次第です。

（編集部）

年月日	諸行事、事業	内 容	出席者
昭和62 2 14	準備委員会	会の結成について	7
3・28	準備委員会	会則案審議、発会準備	8
5・7	庄内地区公民館長会へ出会	協力方要請	2
5・9	準備委員会	発会準備	5
5・30	総会行事	発会式他（会員49名）	34

年月日	諸行事、事業	内 容	出会者
昭和62 5・30	講演会	司会者 東区木幡敏正氏 庄内の歴史と伝説 郷土史家瀬戸山計佐儀氏	
	理事会	会の反省、年間の展望	8
6・30	理事会	昭和62年度、事業計画、 予算について審議	7
8・1	研究発表会	三島通庸の庄内づくり、 安永城の話 東区 坂元徳郎氏	24
	理事会	会の反省、次会計画	7
9・21	講演会	庄内の歴史と伝説	23
	会後理事会	郷土史家瀬戸山計佐儀氏	
11・21	座談会	昔を語る	22
	会後理事会	司会者 町区山元昭平氏	
63 3・19	座談会	昔を語る 司会者 東区片ノ坂登氏	28
	会後懇親会	於帖荘園	
3・20	市役所へ陳情	郵便局跡、資料館活用	4
3・23	視察	霧島町郷土資料館	3
4・24	整地作業	城山、相久廟跡	5

年月日	諸行事、事業	内 容	出会者
昭和63 4・28	理事会	総会準備	7
5・28	総会行事 講演会	第二回（会員57名） 司会者 東区萩原忠子氏 庄内けどと安永城の話 郷土史家、児玉三郎氏	34
7・23	理事会	今年度の探訪計画	12
7・31	関之尾探訪	坂元源兵衛陶像、用水路 川上神社他	18
9・11	講演会	ミタママツリと民族芸能 郷土史家、鳥集忠男氏	24
10・8	理事会	庄内地区探訪計画	5
11・2	庄内地区探訪 第一回	古江さつま迫、稚児桜、 金石城、資忠公館跡	20
平成13 3・18	理事会	庄内地区探訪計画	5
3・26	庄内地区探訪 第二回	願心寺、釣璜院、山久院 飯屋跡、南州神社、安永 城址	19

庄内の歴史年表

時代	西暦	年号	郷土史
繩文石器	〓四〇〇		丸山遺跡 古代人の堅穴住居跡
弥生	四〇〇〓五〇〇		庄内バラ踊りの起源(伝説)
古墳	七〇二		日向、薩摩の国が置かれる
大和	一〇二六	大宝二	平季基 梅北益貫に館を構え水俣院島津荘を拓く
鎌倉	一一九六	建久三	惟宗忠久、日薩隅の守護職となり祝吉に役館を構える
南北朝	一三五二	正平七	地名にちなんで島津姓を名乗る 鹿兒島島津氏の祖 島津資忠、北郷三〇〇町を領し山田の古江薩摩迫に入り、 北郷姓を名乗る 都城島津氏の起り 資忠薩摩迫で没す 墓は山久院にある
〓	一三五五	〓二〇	資忠、諏訪神社を庄内に勧請、今日に至る
〓	一三七五	天授元	二代義久、宮丸藏人から居城を譲られ改築して 都之城と称した 現在の城山都城の地名の起り
室町	一四六八	応仁二	五代持久、安永城を築く 内城 新城 今城 金石城 鶴翼城とも言う 持久安永城で没す 墓は釣璜院にある
〓	一四七六	文明八	六代敏久、安永城から都之城に移る
〓	一五〇〇	明応九	七代数久 豊幡神社を野々美谷城から庄内に移す
安土桃山	一五七八	天正七	北郷相久 跡目争いで讒を受け金石城で自刃 墓は釣璜院

安土桃山	一五九五	文祿 四	伊集院忠棟 都城を領す 北郷氏祁答院へ転封される
〃	一五九七	慶長 二	鹿兒島島津一七代義弘、一向宗禁止の掟を発令 隠れ念仏起る
〃	一五九九	慶長 四	忠棟殺され、その子忠真都城で反す 庄内の乱起る
〃	一六〇〇	慶長 五	庄内の乱鎮定 一二代忠能 祁答院より都城に復帰
江戸	一六一五	元和 元	一國一城令により安永城も廃城となる
〃	一六六三	寛文 三	一七代忠長、島津姓を名乗る (現久厚氏は二八代目)
〃	一六八五	貞享 二	一八代島津久理、家老川上久隆に命じ南前用水路を開削
〃	一八六七	慶応 三	川上神社の祭神 島津久理、前田正名 坂元源兵衛
〃	〃	〃	戊辰の役 都城隊出陣
明治	一八六八	明治 元	安永川の大氾濫 大飢饉襲う
〃	一八六九	〃 二	廃仏毀釈の断行 庄内のお寺は総て取り壊しに遭う
〃	〃	〃	版籍奉還 二六代元丸(久寛) 家格を返上鹿兒島へ移る
〃	〃	〃	三島通庸、都城地頭として来郷 庄内に役館を構える
〃	一八七〇	〃 三	三郷分割、大支配を断行し庄内の町造りを精力的に行う
〃	一八七一	〃 四	三原叢五先生を招聘し寺小屋を開設 庄内小学校の前身
〃	〃	〃	都城県がおかれる
〃	一八七二	〃 五	三島地頭庄内を去り東京へ
〃	一八七三	〃 六	学制制定 庄内小学校開校
			都城県が廃止され宮崎県に編入される

時代	西暦	年号	郷土史
明治	一八七三	明治 六	乙房小学校開校
"	一八七六	"	宮崎県が廃され鹿児島県に編入される
"	一八七七	"	西南の役起る 庄内郷から出陣二四四人 戦死五六人
"	"	"	菓子野分教場(小学校の前身)設立
"	一八八三	"	鹿児島県からの分県運動が実り現在の宮崎県が出来る
"	一八八四	"	願心寺の寺号公称と大河内彰然の住職辞令が下附される
"	一八八六	"	坂元源兵衛、関之尾用水路開削に着手
"	一八八九	"	町村制公布 庄内郷の中の安永の地域が庄内村となる
"	一八九四	"	日清戦争起る
"	一八九九	"	前田正名、坂元源兵衛の用水路を引き継ぐ
"	一九〇二	"	坂元英俊を国会議員に選出 四期
"	一九〇三	"	前田用水路開通 庄内、志和池の水田に灌水
"	一九〇四	"	日露戦争起る
"	一九〇六	"	願心寺の本堂建築完成現在に至る
"	一九〇八	"	歩兵六四連隊、葦原に設置
大正	一九一三	大正 二	国鉄吉都線都城から乙房を通り小林まで開通
"	一九一四	"	桜島大爆発 避難者庄内にも移住
"	"	"	第一次世界大戦起る

昭和	大正	昭和	大正	庄内小学校火災に遭い全焼 翌年新校舎落成
〃	〃	〃	〃	宮田孝之助、乙房小学校に校舎一棟を寄贈
一九二八	一九二一	〃 三	〃 〇	庄内町制施行 都城市制施行
一九二九	一九二四	〃 三	〃 三	関之尾のおう穴群 国の天然記念物に指定される
一九三一	一九二八	〃 四	〃 四	鹿児島南州神社に分霊を請願し庄内南州神社を創建
一九三七	一九二四	〃 六	〃 六	満州事変勃発
一九四一	一九二四	〃 三	〃 三	日支事変勃発
一九四五	一九四七	〃 六	〃 六	太平洋戦争勃発
一九四七	一九四七	〃 〇	〃 〇	庄内空襲 小学校一帯焼失 終戦
一九五二	一九五二	〃 三	〃 三	新制庄内中学校発足する
〃	〃	〃 七	〃 七	国鉄日向庄内駅が出来る
一九五六	〃	〃 〇	〃 〇	持永義夫を国会議員に選出 二期
一九六五	一九五六	〃 三	〃 三	庄内町、西岳村と合併、庄内町となる
〃	一九六五	〃 四	〃 四	庄内町都城市に編入合併

特
別
寄
稿

鬼県令・三島通庸

― 福島事件 ―

瀬戸山 計佐儀

幕末の志士で、のち明治の内務官僚であった三島通庸（みちつね）は、天保六年（一八三五）六月、鹿児島城下の上之園で生れ、はじめ弥五郎のち弥兵衛と称し、十六歳の時同輩と争って四年間、隈之城の寺院に幽閉を命ぜられた。文久二年（一八六三）に寺田屋事件に参加して謹慎となり、戊辰戦争では山陰や東北に転戦し、明治二年（一八六九）には西郷の推薦で都城地頭に抜擢されて手腕を揮った。同四年に東京府権参事、翌年は教部大丞、同七年には酒田（山形県内）県令となったが、その時は数え年三九才であった。そして西南戦争の時は庄内藩士族対策を実施して未発に終らせ、同十五年には福島県令を兼ね、更に翌年は栃木県令も兼ねた。

およそ、どんな人物でもその立場によって仏にもなれば鬼にもなる。いわゆる「福島事件」を起した当時の自由党员で三島県令から強い弾圧を受けた人々からは、彼はまさに鬼県令であ

り、藩閥政府からみれば能吏であり、辣腕家で有能官吏の典型であった。剛腹専制の振舞いはまさに藩閥政治の縮図であり、それ故にこそ彼は福島県の自由党撲滅の任務をおびて着任したのであった。

この自由党の撲滅と帝政党の育成・三方道路の開サクの三つの内命を受けた彼は、着任早々、今まで部民に親しまれていた部長を多数罷免して、郷里の人物を招いてそのあとにすえたが、それは定員の三分の二に当り、在任二年間でその数は十七人も上ったが、あとの三分の一は殆んど会津士族で占られた。

彼は先ず町村戸長を招集して民権自由の説を唱えることを叱責し、かかる理想の人物を排斥、小学校教員をも罷免して、上は書記官や郡長より、下は巡査や看守に至るまで自己の息のかかった者で固め、更に旧会津藩の士族と結んで山林を払下げ、士族授産金の下附などで士族保護の政策をとり、若松に帝政党を組織させた。

そして彼は会津三方間の道路開サクに没頭して県会などは歯牙にもかけず、再三出席を要求されても臨時県会にも通常県会にも一度も顔を見せないで、ついに議長の河野広中は自席において弾劾演説を行った。県会は更に交渉委員を選んで県令と折衝したが頑として応ぜず、公用と称して突然若松に出張してし

まったので、民意を無視し事を専断するものとして河野以下の自由党員は全議案を否決する動議を提出し、反対の帝政党と論戦の結果、二三票対二一票という票差で全議案を否決した。議案総否決の決議書を飯坂温泉で受取った県令は、直ちに内務、大蔵の両卿に対し原案執行を申請して許可を得、予算を執行した。そして、議案総否決に賛成した二三人の議員全員を投獄した。

そもそもわが国の政党のはじまりは明治十四年結成の自由党であるが、これより先、全国の各地に政治結社が生れて活発な運動をしており、これらが次第に組織化されて政党となったものであったが、明治八年から十一年にかけて福島県下でも政治結社が次第に誕生して、板垣退助を総裁とする自由党が中央に生れた二ヶ月後に、福島支部が誕生したのである。

福島県で新聞の名のつくものは既に明治五年から発行され、様ざまな小新聞が生れ、そして潰れていった。そして「福島新聞」を改題して十五年七月に創刊した「福島毎日新聞」は、紙面を専ら自由民権の論説で埋め、同県最初の政治啓蒙の新聞であったが、三島県令の圧迫や資金の欠乏、創立委員の投獄などで、七号で崩壊してしまった。

福島県会事件は、地方自由党と三島県令の衝突が原因とされ

ているが、その直接のきっかけは、会津地方の道路工事が火付けで、苛酷な条件で工事の出夫を強要された農民が会津自由党の指導下に結集して、果敢な、そして広汎な不服従運動を展開したのであったが、これに対して官憲は利を与えて帝政党を育成し、反対運動の切崩しと抑圧に務めて暴行や脅迫が公然と行なわれ、「清水屋事件」などを引き起した。

清水屋事件とは、三方道路起工式強行の翌くる八月十七日の夜、福島毎日新聞の株金募集を兼ねて会津に応援に行った福島支部自由党員の田母野秀頭と小島忠八が若松の清水屋に投宿したところ、夜の十一時ごろ帝政党の辰野守治県議が県土木課員ら七、八名と共にこれを襲って叩きすえ、彼らに自由党を離れること、会津地方道路開サクには賛成する旨の誓書を書かせた事件であった。

さて話はさかのぼるが、三島県令は廃藩置県の際、明治二年九月二日に都城地頭として着任したのであったが、都城私領の旧家臣たちが旧領主を地頭に任ずべきであるとして若僧の彼を排斥したので、己むなく彼は都城を三郷に分割して反対派の多い地区を下荘内郷として開発を放置し、役所を置いた安永村を上荘内郷、他を三股郷として後の二郷だけの開発にのみ力を注いだのであったが、大御支配（今の農地改革）だけは下荘内郷

にも実施して上級士族たちの所有地も全部取上げて、均等に宅地や耕地を配分したので、一部の者には怨まれたが、一般の下級士族や農民たちには大いに喜ばれた。

そして在任わずか二年の間に、二郷の開発に大いに力を尽し、住宅街を造成して禄を離れた士族たちを招いて宅地、住宅、耕地を与え、道路を四方に開サクし、堤防の修復、神社の建立や改修、養蚕や養鶏、製茶などの産業奨励、鹿児島から学者の三原宗吾を招いての教育の振興などを図ったので、地方発展の確固たる基盤ができ多くの人材も輩出するに至った。彼の行政は独断専行、極めて強引なやり方で事をすすめ苦役を強いたが、郷民はよくそれに堪えて従ったので、後年に受けた恩恵は莫大なものがあり、旧二郷には彼の頌徳碑が夫ぞれ建てられ、今に住民の欽慕するところである。

彼は福島県令に着任の翌年栃木県令をも兼ね、ついで内務省の土木局長や警視総監を歴任し、その功績により明治二十年には子爵を授けられて華族に列し、翌二十一年に逝去、享年は五四才であった。

長男の弥太郎は米国に留学して農政学を専攻し、農商務省や通信省を経て浜正金銀行の頭取、日本銀行の総裁（第八代。六年間）となり、現職のまま病歿した。享年五三才。なお彼は徳

富蘆花の小説「不如帰」の武男のモデルで、浪子のモデルは大元帥の息女だったといわれている。

後妻（？）の子弥七は東大の法科を卒業、四十五年のオリンピック選手として、百、四百、八百の三種の選手として出場し、必ずしも良成績ではなかったが、日本国際スポーツ進出への足がかりを作った人物であった。

参考文献

「福島事件」高橋哲夫

「鹿児島県百科大辞典」

「都城市史」



研

究

庄内史跡探訪（その一）

東 区 坂 元 徳 郎

はじめに

近年私達の生活意識は、〝ものの豊かさから心の豊かさ〟を
求める方向に変化をしております。

このような時代的流れの中で我が庄内におきましても「むら
おこし、或は地域文化の高揚」ということが盛んに言われるよ
うになり色々な団体による色々な文化活動が意欲的に展開され
ています。

その一翼を担った私達「庄内の昔を語る会」も、発足して既
に二カ年を経過しました。会を重ねる毎に会員も増加し会の運
営につきましても野海会長、臼杵事務局長を中心に少しずつ充
実して参りました。誠に喜ばしいことであります。

ご承知の通り庄内は歴史の古い町です。庄内にはこれらを物
語る貴重な史跡や文化財が数多く残っています。私達はともす
るところを見過ごしがちであります。これらは私達の祖先が
生きてきた時代の生活や文化等を伝える貴重な財産であると思

います。

今日私達の生活は大変豊かになって参りましたし庄内の町も
大変立派になって参りました。しかしこの繁栄の陰には私達の
祖先のひたすらな郷土愛と郷土建設の努力、そしてまたその陰
には尊い犠牲があったことを決して忘れてはならないと思いま
す。

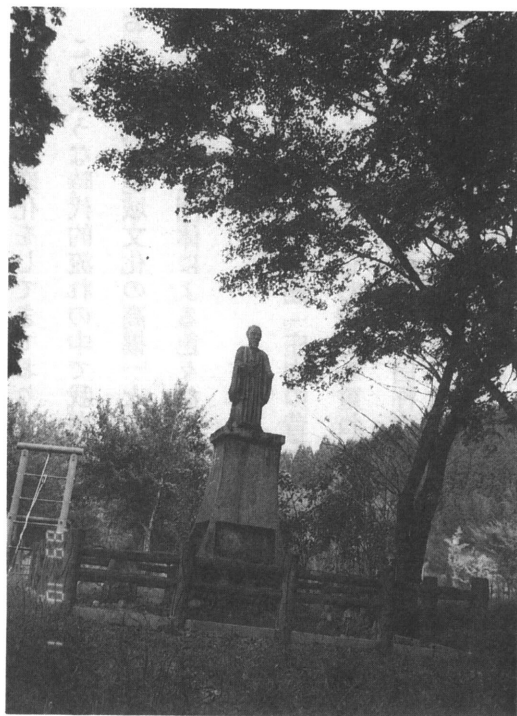
私達はこのような先人の残した庄内の史跡、史実、文化財を
しっかり顕彰して、その貴い歴史のうえに立った新しい郷土造
りを目指さなければならぬと思います。

今回は、そのような意味も含めまして会が実施しました史跡
探訪の成果について中間的にまとめってみました。

史実については主に都城島津家史料、先輩諸先生方の調査さ
れた文献や古老の話などを参考にして簡単にまとめたものであ
りますが、今後はこれを叩き台にして庄内に住む我々の手によっ
て探求を重ね立派な庄内の歴史として顕彰していきたいと思
います。

第一回探訪 昭和六十三年七月三十一日

◎坂元源兵衛翁の陶像



坂元源兵衛翁の陶像

関之尾の滝上、県道を隔てた西側の丘、運動公園の一隅に高さ二メートル位の台座に乗った等身大位の質素な陶像があります。これが「庄内開田の父」と称えられている坂元源兵衛翁の陶像であります。

今は周辺の樹木が生い茂りあまり眺望がききませんが建設当時は関之尾地区の田んぼを一望のもとに見渡す恰好の場所だったに違いありません。

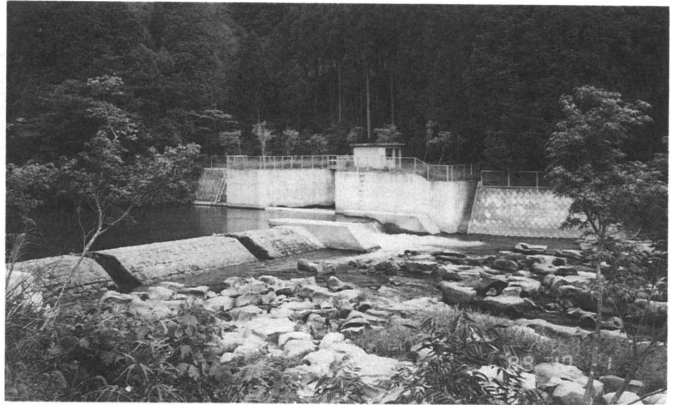
翁は東区カクン馬場の人、明治十九年、当時田んぼの無かった関之尾地区の人達（代表迫田兵右衛門、迫田貞助）から要請を受けて用水路の開削に着手、関之尾の滝上流からトンネルを掘って水を引き、関之尾二十町歩の開田に成功しました。時を経て、この事業に携わった石工黒田甚蔵と言う人が、翁の遺徳を偲び、その偉業を称えてこの陶像建立を思いました。都城の瓦工場で焼き上げました。これに共鳴した関之尾地区の青年達が総動員で協力して都城の瓦工場から荷車でここまで運び上げ建立したものです。

尚、翁はこの用水路を谷頭原まで延長して六百町歩の開田を計画、工事を続けましたが途中から前田正名翁の手の移り明治三十六年に完成しました。

また坂元源兵衛翁は関之尾の滝展望所脇の川上神社の祭神として都城島津家第十八代久理公、男爵前田正名翁と共に祀られています。

◎前田用水路取り入れ口

滝の上流三百五十メートル位の左岸、坂元源兵衛翁が「岩が硬いか人間の意志が堅いか」とトンネル掘削に挑み丸九年の歳月を費やして貫通したその用水路取り入れ口がここです。



前田用水路取入口

その後幾度かの改修により今は昔の面影はありませんが、この硬い岩をノミと槌でよくも掘り抜いたものです。昔の人達の執念と根気強さに頭の下がる思いがします。
現在は、コンクリートの頭首工や流量調節機器等を備え付けた近代的施設となり下流八百町歩の水田に絶やす事なく水を送り続けています。

◎関之尾馬頭観音

公民館の庭に二体の石像がヒソソリと座しておられます。その中の一つが馬頭観音像であります。

今はもう見られなくなりましたが昭和三十年代頃までは馬は農家にとって絶対欠かすことの出来ない貴重なものでありました。この貴重な馬が死んだ時農家ではこれを丁重に葬り馬頭

観音様を通じて供養する習わしが昔から続いてきました。

この観音様は以前集落北側の山の上になつたものを近年になつてここに移し関之尾区の鎮守様としてみんなで大切にまつり夏の六月灯も盛んに行っています。



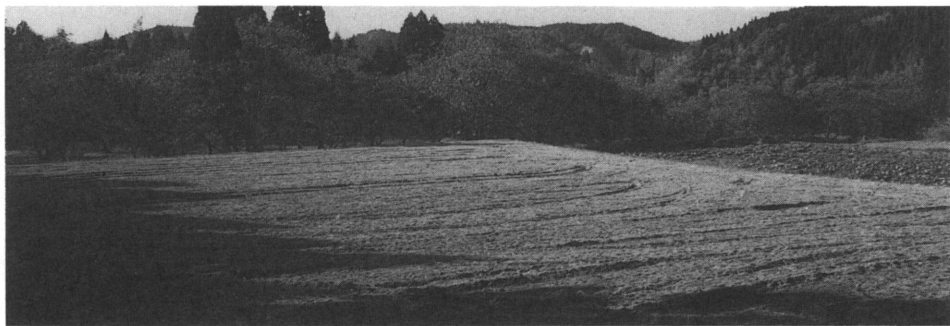
関之尾馬頭観音

第二回探訪 昭和六十三年十一月六日

◎北郷資忠の館跡

都城地域の歴史をたどる場合、山田町古江の「薩摩迫」を省く訳には参りません。

島津資忠は鹿兒島宗家四代忠宗公の七男ですが、筑前金隅の戦いに戦功があり時の將軍足利義詮から島津莊北郷三〇〇町を与えられました。



古江 北郷 資忠 館跡

資忠は正平七年（一二五一年）鹿兒島から家臣十六名を引き連れて山田町古江に入部、北郷の地名にちなんで北郷姓を名乗りこの地を治めました。これが都城島津家の元祖であります。

館跡は古江川の北岸に沿い、山の八合目のところから南に開け上段は面積一町一反歩、下段は約七反歩、上段の奥部は三尺程高くなっており領主の館、手前が重臣の住宅、下段に一般の家臣が住みました。そして本丸や二の丸、大手、搦手、馬乗馬場、空堀などがあったと言われています。

今は畑や杉山になっていますが段々になったかなりの平地は六百三十年前の館跡を彷彿とさせてくれます。

北郷の地は一時幕府から取り上げられ相良定頼領になりましたが、この館は天授元年（一三七五年）二代義久が都城を築城してそこに移るまで二十三年間の居城でした。

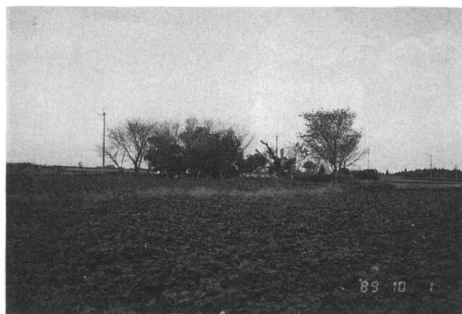
尚、北郷三〇〇町とは、前川内村（庄内）、中霧島村、西岳村、山田村、志和池村の一部、野々美谷村、上金田村、川東村の一部、宮丸村の一部、横市村の一部とされています。

またこの館には義昭事件に縁座した五代持久がその子敏久と共に都城を逐われて高城に住んで後寛正六年（一四六五）この館に移り住みました。この時は六代敏久が庄内の安永城を築つき移りすむまで三年間の居住でした。

◎稚児桜

慶長四年（一五九九年）都城領主伊集院忠真と鹿兒島宗家島津忠恒との内紛、いわゆる「庄内の乱」の時、庄内安永の城を攻める忠恒軍とこれを迎え撃つ知将白石永仙軍とがこの辺りで大激戦を展開しました。

島津軍の若武者富山次十郎は



稚児桜遠望



往時の稚児桜

十二月八日、風呂

谷に於いて華々しく戦場を馳駆して
おりましたが、敢え無くも敵弾に倒れました。年僅かに十六才の美少年でした。

彼の亡きがらは敵味方から惜しまれながらここに葬られました。ここを通り掛かった島津軍の武将新納忠元はその死を悼み次のような歌を寄せました。

昨日まで誰が手枕に乱れけん 蓬がもとにかかる黒髪

当時供養の為に植えられたという桜の木は三百年を経たこの前まで爛漫と咲き匂い当時を偲ばせてくれたものでしたが、昭和四十八年老齢の為枯死し今は二代目が元気に育っています。

いつの頃からでしょうか、ここを稚児桜と言うようになりました。

◎金石城址

一般に安永城と言われています庄内小学校西のお城は一名鶴翼城（ツルバネジョウ）とも言い内城、新城、今城、金石城の四つの砦からなっています。

金石城は地区の人達がオカニシ或はオカネシと言っている高い丘ですがいずれも「おかねいし」が訛ったもの。現在西区の池田さんの所有地になっていますが、丘のうえにはその昔ここに砦があったであろうと思われる平坦な場所があります。

終戦後は開墾されて畑になっていましたが今は杉山になっています。

一段下がった所に、廃壊した石囲いが在り、中の石柱は榭の木の幹に巻き込まれてその古さを物語っていますが、ここは天正七年（一五七八）城主北郷相久（すけひさ）が都城本家の跡目相続問題がこじれて、父十代時久から攻められ無念の自刃をした場所です。



金石城址



この石囲いは、竹やぶに覆われ正に埋没寸前であったものを、昨年「庄内の昔を語る会」会員の手により碑掘り起こしを行いました。石の後も機会ある毎に周囲金の刈り払いや花香等を行っています。

またここは慶長四年（一五九九年）庄内の乱の時、伊集院方の知将白石永仙が立て籠もった砦で、攻める島津忠恒の軍を戦場原において散々打ち負かしたことは有名な史実です。

第三回 平成元年三月二十六日

◎願心寺

庄内願心寺は明治十七年に創立されたお寺で今年で百五年目を迎えます。

お寺について触れる前にあの廃仏毀釈を振り返ってみたいと



庄内願心寺

思います。
江戸幕府は仏教を国教的な位置において保護して来ましたが明治新政府は神道を国教として祭政一致の布告を出し続いていわゆる神仏分離の令を発しました。

我が島津藩ではこれが徹底した仏教排斥と化し、庄内においても明治元年十月役人が来て、お寺の財産を総て没収し、寺院の取り壊し、仏像仏具の焼却、石仏石像の打ち壊しが徹底的に行われました。

島津家史料によりますと、それまで庄内には、既に廃壊しているものを含めて十三のお寺がありました。これが一挙に壊されたり焼かれたりしてタタタ一つのお寺も残り

ませんでした。中には文化財として貴重なものも相当あった筈ですが誠に惜しいことをしたものです。

もっともこの行き過ぎた施策は時をへずして改められ各地で仏教の布教が盛んに行われるようになりました。

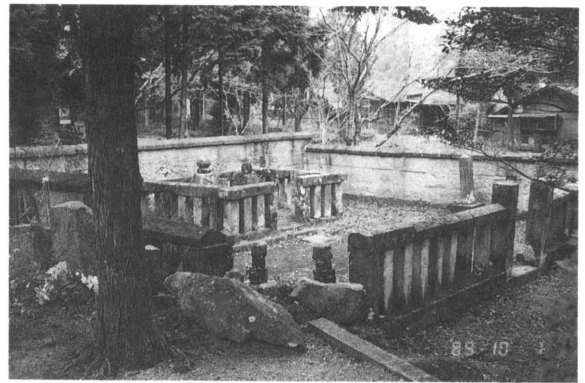
庄内においても明治十一年、現在のお寺の所に仮説教所が設置され布教が始まりました。その後明治十六年、初代大河内彰然師が本願寺の特命を受けて庄内の駐在主任として着任され、翌十七年本山より清涼山願心寺の寺号公称と住職辞令が下付されました。

現在の本堂は明治三十九年、六年の歳月をかけて完成したもので用材は霧島官有林のケヤキの払い下げを受け門徒が総出で引き出してきたものです。現今では珍しい「総ケヤキ造り」の本堂であります。

また大正九年山門が落成、続いて大正十三年鐘楼堂が落成し現在の威容を備えるに至りましたが願心寺の存在は私達の心のより所であると同時に庄内の誇りでもあります。

◎山久院（オサンキン）跡

東区北郷馬場（ホンゴババ）の北突き当たりに豊幡神社があります。この豊幡神社は明応九年（一五〇〇年）野々美谷城内



山久院跡

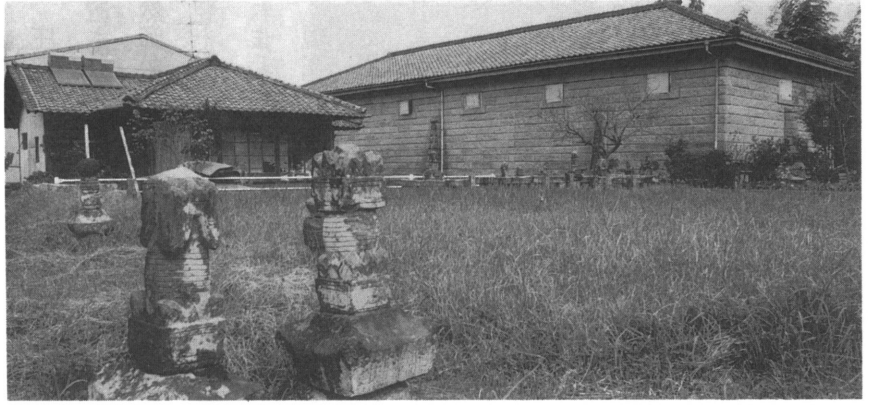
にあった八幡神社を宮原に移したもので、それから後明治三年（一八七〇年）現在地に移して都城島津家初代資忠の霊と合し豊幡神社と称したものです。

それより前にここに山久院というお寺がありました。島津家史料によりますとこのお寺は「創建年代不詳、資忠菩提の為に建立」となっています。寺院の見取り図も残っていますが約三十坪位はあります。ましようか割合大きなお寺のようです。

◎釣環院跡

庄内地区公民館前、道路を隔てた農協倉庫の裏側に百坪位の広場があります。ここが都城島津家第七代領主北郷数久の創建になる島津家の菩提寺釣環院跡です。

終戦の頃までこの付近にはたくさん古い墓石が林立していましたがいまは整地されて農協敷地になっています。



とあります。

一般に墓と言われているものの中には、この御魂だけを祭りたいいわゆる御石塔が数多く存在しますから要注意です。

現在、残っている苔蒸

釣 璜 院 跡

した数基の墓の主なものは、都城島津家第二代領主北郷義久、第四代領主北郷知久、第五代領主北郷持久、第七代領主北郷数久、それに庄内金石城で父時久から攻められて自害した北郷相久とその乳母のもの等です。

※島津家史料によりますと、

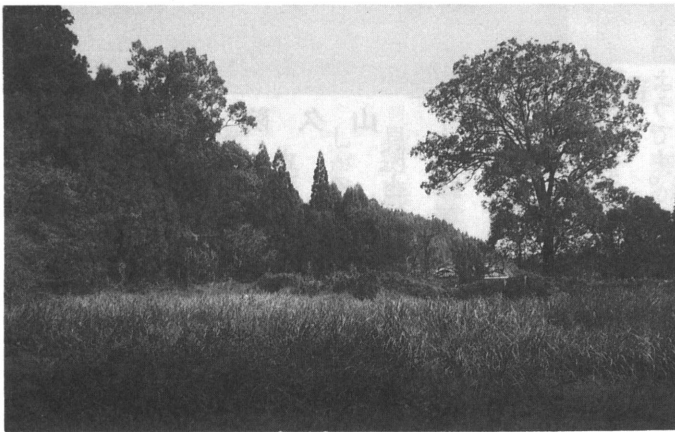
- 一、御廟
但御遺骸を納所
- 一、御石塔
但御魂を祭所
- 一、御位牌
但所所に御安置

◎ 仮屋跡

庄内小学校の西側、安永城入り口の左手、一段高いところは一反歩位の広場があります。今は前田家の所有地になっており、荒地地になっていますが、ここに島津藩の仮屋がおかれており、その建物は明治の終わり頃まで残っていました。

仮屋とは藩の行政を行う所で、言うならば市役所の支所みたいな所だったようです。役人がいつも詰めていたかどうか分かりませんが、役人の宿泊所になったり会合の場所になったりしていたようです。このほか仮屋跡と言われる所があちこちありますが、言うならば、それは今の公民館みたいな所で、庄内の仮屋と言った場合はこのことです。

明治二年、三島通庸が庄内の開発を行ったときの役館にもなり、



仮 屋 跡 (一歩園)

通庸公を始めたたくさんの人達がここを利用しました。西南戦争の後、寺小屋としても利用され、たくさんの人達がここで勉強をしました。

また明治三〇年、用水路開削の為庄内にみえた前田正名翁はここを事務所として事業を行いました。そしてここを「一步園」と称しました。

この仮屋がいつ壊されたか分かりませんが、昭和の始めごろは上の城跡と共に梨園になっていました。

◎南洲神社



南 洲 神 社

西郷南洲翁の御霊と、明治十年の西南の役に出陣した庄内郷出身者二百十三名の内戦死した人五十六名の御霊を祀った神社です。

昭和四年、鹿児島島の南洲神社に分霊を請願しここに祀ったものですが神社創建に当たっては西区有志の方々の大変な努力と御苦労がありました。現在は西区の鎮守様として管理されていますが、地区の人達から深く崇敬され夏祭りも大変盛んに行われています。

なお、当初の社殿は、たまたま改築のあった諏訪神社の古い社殿を移したものでしたが、昭和五十三年不慮の出火により全焼しました。現在の社殿は昭和五十五年十二月再建したものです。

◎安永城址

都城島津家の二代領主北郷義久は都之城を築城して古江の薩摩迫から移り住みましたが、五代領主北郷持久は、足利義昭事件に連座して、享徳二年（一四五三年）都城を逐われて高城へ、そして古江の薩摩迫へと引き移りました。

都城退去から十五年目、応仁二年（一四六八年）持久は庄内に城を築きその子敏久と共にここに移り住みました。これが安



安永城址

永城であります。

安永城は一名鶴

翼城ばねとも言い内城

(本丸)、新城(二

の丸)、今城、金

石城の四つの砦か

らなっています。

現在忠霊塔のある

城山公園広場の所

が本丸跡と思われ

ますが、新城と今

城は一体とでしょ

う。手持ちの図面

でははっきりしま

せん。

持久は文明二年

二月十一日(一四

あとにしました。

その後は代々北郷方の居城でしたが、文禄四年(一五九五年)

伊集院領となり慶長四年(一五九九年)の庄内の乱では、都城

十二砦の一つとして伊集院五兵衛、中山平太夫、白石永仙らが

立て籠もり、島津軍を散々苦しめたことは有名な史実でありま

す。

乱の終わった後はまた北郷方の城となりましたが、元和元年

(一六一五年)の一国一城令で廃城になりました。

安永城が機能していたころの庄内の町の姿はどんなものだった

のでしょうか、興味の尽きないところです。

あとがき

紙面の都合で今回は第三回探訪までの分を整理してみました。

今後はこれの一つずつ研究し検証していきたいと思っておりますので

皆さんのご指導やご意見を頂戴したいと思いますし、又これに

ついての文献や参考資料、地域に残る語り伝えなど、ご提示頂

ければ有り難いと思います。

七〇年)この城で逝去、六十二才、法名 福持庵殿無極道悦居

士 墓は庄内釣璜院にあります。跡目を継いだ敏久は文明八年

(一四七六年)都城に帰ることを許され八年間住んだ安永城を

庄内の石仏、石碑

講について

町区 山元 昭平

其の一、田の神サー

古来農耕の人々にとって、作物の豊凶は、生活していく為には最も重要な課題で、その成否で一年の暮らしが定まっていたのです。特に日本人の主食は、古来米穀が大切な役割をなしていました。山間部等に於いては稗、粟、蕎麦を作ってその足たしにしていたが、時代が進むにつれて米穀が主要な役割を果たして来た様です。それで田地を護る為に、又自然の災害等を厄やく除する為、神仏を崇あがめて一年の豊饒を願う意味に於いて各地域の部落の方々が話し合って田ノ神サーを祀り、年々期日を定めて祭りをしていたらしいのですが、近年その習慣が薄れてきた事は何かしら寂しさを感じます。

小職もそれ等の石仏類を探訪して、地域の方々の御協力に依り、現在七体の「田の神サー」の存在を確かめる事が出来まし

た。一つ一つ形は違いますが、地域の方々が大切に花香をとって祭られているのに深く感銘し、それにまつわる種々なユーモラスなエピソードをお聞きして、忘れられつつある姿とお話等を記録しておくのも後世の一石になろうかと考えているところです。

又都城地方には、現在二十数体しか残存していないのでは、ともお聞きしています。

ちなみに体型は神官型、地藏混合型、農民型、仏像混合型、菩薩座像型等がある様です。

今屋の「田ノ神サー」

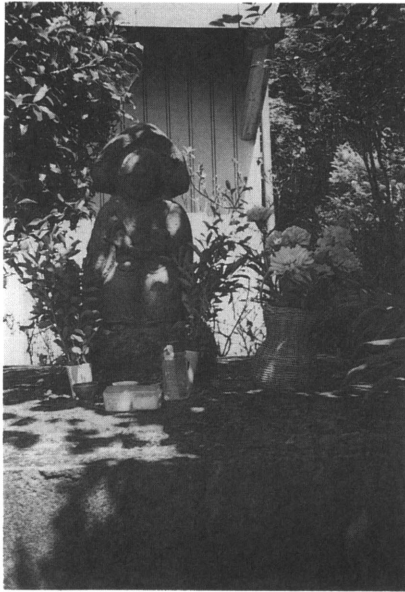
場所 一、田村静男屋敷東南隅



長男利光さんの奥さんが嫁に来られた頃、畑中万助さん達が花盛林さん宅附近にあったのを持って来られて、その日は附近の人達と一緒に太鼓三味線で酒宴を催して賑わったという事です。その後台座を設けて花香をとって大事に祀っておられるそうです。

背面に「奉建立田ノ御神」と刻んであります。「菩薩座像型」のようです。
(田村静雄さんの話から)

場所 二、中村利国さん屋敷内



昔しや「田ノ神サー」はチョット盗んで(借りて)持って行って、自分達の「田ノ神サー」にしても良かち云う風習があつた。或る時平田ん若ヶ衆が、今屋さん「田ノ神サー」を連れ行つたッ

そいが後かい、なくなつちよッ事が判ッ、調べッ見もしたら平田ん処にあいげなちゅこッで、今屋さん衆が談判に掛けおッ、取り戻して来たちゅもす。そして平田ん衆が返しに来た時には「車刀」(運搬車)に「田ノ神サー」と米俵二俵ばかり積んでハヤシユ掛け乍ら戻しけ来て、コトワル云うたチ云う話も聞いちよいもす。
(田村寅男さん談)

※今は静かなたはずまいをした「田ノ神サー」で花香が絶えた事がなく、家族の温かい思いやりがしのべれます。南の田づらを見て御座って、ジーツと見守って居られる姿はユーモラスさを感じます。

※今屋に、もう一体あるそうです。

平田の「田ノ神サー」

場所 続山千盛さん屋敷内 続山修理工場斜前

続山千盛さんの祖先が国分から移住の際一緒に連れて来られたということ。台座に二体の跡がありますが、現在は一体しかありません。

話によりますと、一体は家に居ったニセどん(若衆)が横手に持ち去ったということ。今はありません。この神サーも昭和

の初頃、財部へ持って行かれたそうですが、そこで災害が相つぎ、不作が続いたので占をしてもらった所、「田ノ神サー」が庄内に帰りがたがって居られるとの事で終戦後、財部の衆が、「田ノ神サー」を荷馬車に乗せ、たくさん土産を添えて返しに来たとの事です。そこで、公民館では歓迎会を催してお迎えし現在は中平田の「田ノ神サー」として管理されています。

(続山千盛さん(七才)の話から)



関ノ尾の「田ノ神サー」

場所 関ノ尾公民館敷地東南隅 馬頭観音と一緒に鎮座

特徴は乙房の「田ノ神サー」と同じ様に右手にシャモジを持っておられ、特にシャモジが大きく造られていて大豊作を願って

居られるのやも。又他の像と比して新しさを感じますが、みるからに清々しさと心を洗われる様な気持ちにさせられ、静かなたたずまいが関ノ尾川崎一帯の豊作を念じて居られる様で、心地よい清楚な「田ノ神サー」でもある。



※長友さん宅にも「田ノ神サー」が祀っております。

乙房の「田ノ神サー」

場所 一、乙房神社境内東南隅

もとは吉川藤吾次(アキエ)さん宅の西にありましたが、妙見神社に移され、更に現在の乙房神社内に移されたと云う事です。

この「田ノ神サー」は由緒深い「田ノ神サー」で都城地方を

代表する「田ノ神サー」です。

背面に「文政九年丙辰庚戌十月二十二日と刻銘されています。文政九年と云えば一八二六年ですから一六三年前から乙房に居られる訳です。

右手にシャモジ、左手に茶碗をもって、口もとには笑みを浮かべ、藁帽子のかげから人なつこい顔を見る事が出来ます。

又吉川藤信さんのお話によりますと、文政九年丙辰庚戌の中の『応』の意、「神仏が、迷っている人々を救わんが為に姿を変えて顕われる」の意味であるとの事です。心すべき事だと思えます。

(吉川藤信さんの話から)

場所 二、月野毅さん敷地内

大淀川沿いの森の中、東南に向座



いつの頃からあったかは定かではありませんが、昔ヒッツの徳丸さん近くの藪の中に盗借してあるのを知って、立野紀夫さん外六人で持って来られたとの事です。

もとは溝の上に橋がかかっていたが、橋がなくなってからは雷が頻繁に落ちて困ったとの事です。昭和十八年四月、現在の処に祀られ祈念の祭がなされています。

(マッさん八十七才の話から)

其の二、首なし地蔵さん

いつの頃からあったのかははっきりしませんが、相当古い地蔵さんらしいです。

東区福留フミさん方横の三叉路角にあります。そして側面に梵字が刻まれています。他の字は判読できません。

いつの頃から首が欠けていたのか、如何にも哀れを催します。しかし、いつも花香がとってあって道行く人を慰めてくれます。



南崎家の六地藏

昭和二十三年の頃、下財部の人が見えて、うちの裏家敷のたんに「眼の地蔵さん」があるので買ってくれないかと、相談

があり、祖父常太郎がいろいろ話を聞いて、ゆずってもらう事になり、今村、岩切のお二人が牛車をひいて迎えに行きました。それはまぎれもない六地藏であり早速土蔵の裏側にお祀りしましたが、その後庭園が造られ、現在の所に移されました。今から約四〇年前のことです。

そして、四、五年前、財部の願成寺の藤本高明住職がみえられた時、この六地藏の話をしましたところ、大変感動されて帰られました。

後日財部の教育課の先生方が来訪され、是非ゆずってくれないかとの事でしたが、いろいろの事情で、そのままになっています。その後財部より、よくお詣りに来られます。

六地藏とは

- 一、壇蛇地蔵 —— 地獄道よりの救い
- 二、宝珠地蔵 —— 餓鬼道よりの救い
- 三、宝印地蔵 —— 畜生道よりの救い
- 四、特地地蔵 —— 阿修羅よりの救い
- 五、除蓋地蔵 —— 人間道よりの救い
- 六、日光地蔵 —— 天道よりの救い

以上の衆生の苦しみを救うて下さる六種の地蔵菩薩の事です。なお、祖父南崎常太郎は歴史を好み、石器古陶器類に興味があ

りました。

(南崎喜美さんにお聞きした話)

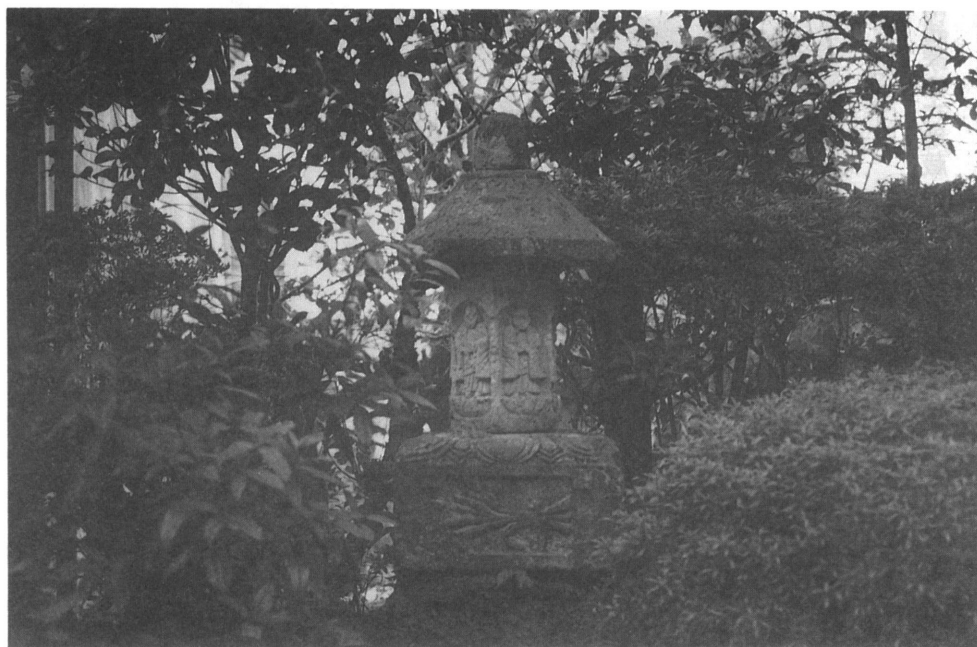
其の三、イボ神サー

東区のイボ神サー

豊幡神社境内入口の土壇の上に在ります。

大小二基ありますが、話によりますと自分の年令と同数の大豆を御供えして祈願すれば靈驗あらたかで、快癒するとの事です。しかし、祈る時に人に見られると治らないと云う話です。

又別説には「火ノ神サー」ではないかと云う説も聞いています。



南崎喜美さん宅の庭にある六地藏菩薩

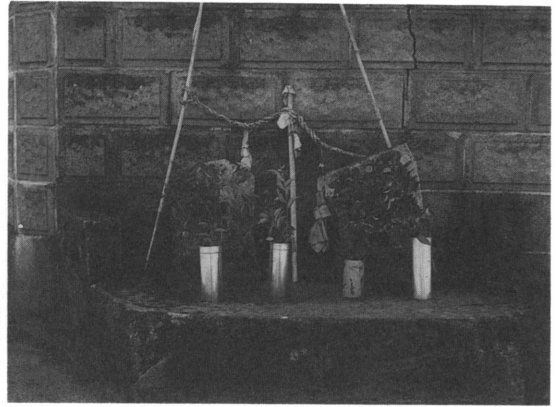


西区のイボ神様

清水省三さん屋敷角東北、ブロック壁角にひっそりと静かに

祀っております。

地元の人々には餘り縁が無い様ですが、遠方の岩川、末吉あたりから拝願されている様で靈驗あらたかであると云う事です。現在池田バチ講の方々が花香をとっておられるとの事です。



其の四、馬頭観音

農耕牛馬を労使した慰労と疫病死亡した霊を祀り、又繁殖を願う意味も含め季節的に休耕し、併わせて婦女子の労をねぎらう意も含め、野菜薬草等の食草ダンゴ等を作り慰労の祭をしていたと云う事です。本音は男族の酒宴にあったものでは？ 馬正月とも云います。

一、関之尾馬頭観音 公民館敷地田の神サー左隣

二、平田馬頭観音 公民館敷地内

三、乙房馬頭観音 乙房神社境内

四、宮島馬頭観音 中央権現と一緒に祀る。

五、今屋馬頭観音 上ノ原台地(オガミグイ)（拜台跡、オタコ様を拜んでいた処）

六、東区馬頭観音 オミケン坂上と稚児桜敷地内

七、西区馬頭観音 汾陽どん池の南側 毎年七月十八日祭典

まだその外にもあると思いますが、又の折に探訪致したいと思っております。

其の五、石碑

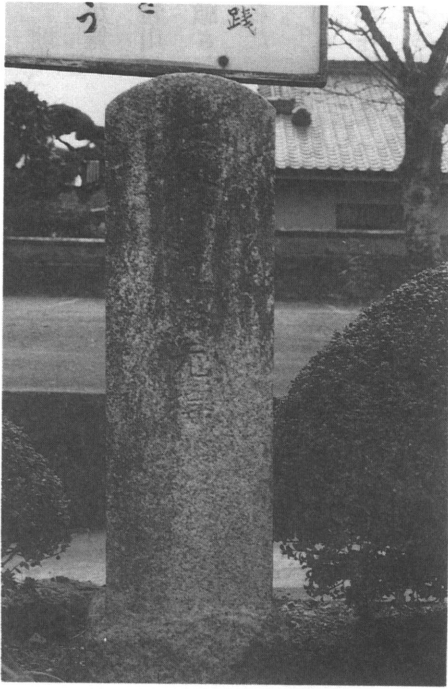
古来その土地の地理歴史等を知ろうとすれば、先ず「石、木、水、山(坂、峠)、塚、祠、堂等の六つに分けて調べると、その土地柄が判明して来るのではないかと考えられます。それで庄内地方も遠く藤原時代から、島津荘園時代を経て、これを荘内と称していた様です。

それから三島通庸が来られた明治二年から三年にかけてあらゆる分野に事業が起こされて、各所に石碑等を見る事が出来ます。それでその石碑等を通じて当時の文化的事業の跡を偲び、昔の

治績を訪ね歩き、新しい知識を求める事も「昔を語る会」の楽しい探訪ではないかと思えます。

一、庄内村道路元標ノ碑

現在市役所庄内支所の敷地南側駐車場の処に在ります。道路の起点になった処に建てられていたのではないかと思われます。私の記憶では後記しますが、この道路改修碑と一緒に一里塚の小さい石碑が熊原曾平氏宅角（現町区中央通り交差点角）に「都城迄一里」を刻した石碑があったかと記憶しますが定かではありません。



二、水分神



西区、清水経民さん宅石垣下の改修された泉水源より水が湧出しています。そして、その前の島田塗装店北横の処に「水分神」の石碑が建てられて居ます。高さ一メートル二、三〇センチメートルの石碑に明治四年、その下に『民事〇〇徳田習作、小頭肥後俊夫、右同吉川〇〇辛〇六日両所石落成』と刻んであります。三島通庸の水利事業の一つとして興されたものではないかと考えられます。

三、道路改修碑

場所 町区八坂神社境内敷地内

昭和六十二年八月盛夏、片ノ坂先生と一緒に探訪して道路里程碑ではないかと興味深々、物具一式持参して調査にかかりました。手始めに払拭して字句を確かめました、意に反して里程碑でなく「道路改修碑」の刻字が浮かんで参り当時を偲ぶよすがにもなる事だと語らい丹念に一字一句記銘しました。



道路改修碑

本村ハ地理人情共ニ鹿兒島ト密接ノ関係ヲ有シ日常百般ノ貨物一トシテ之を鹿兒島ニ仰ガザルモノナク又本村ノ物産之を全地ニ輸送セザルナシ然ルニ従来彼我ノ間通路ノ貫通セザル為運輸送交通ノ便ヲ欠キ殖産事業ノ發達ヲ阻碍スル鮮少ナラズ於是乎本村有志深ク之ヲ遺憾トシ西ハ鹿兒島県財部村ヲ經テ國道ニ通

シ北ハ本郡山田高崎ノ両村ヲ經テ北方ニ聯絡スル完全ナル道路ノ貫通ヲ企画スルコト一朝ニシテ止マズ遂ニ沿道各村ト聯合起立ノ約成リ工費ノ幾分ハ県統ノ補助ヲ仰ギ餘ハ悉ク村統ヲ以テ之ヲ支弁シ遂ニ明治二十九年五月一日ヲ以テ之ヲ起シ全三十一年三月ヲ以テ工ヲ竣フ其更正スル所或ハ道ニ依リ新路ヲ開キ橋梁ヲ築シ暗渠ヲ埋メ全ク従来ノ面目ヲ一新ス是レ誠ニ本村多年ノ宿望ヲ達シタリト謂フベキナリ滋ニ……以テ記念トナスト云爾

裏面の碑文

明治三十一年三月

庄内村長丸目建蔵 杉村実徳 桂木良雄 木下武助 全村助役
 土木担任長峰通悠 清水彦四郎 迫田善四郎 海田善太郎
 庄内村会議員宮田孝之助 池辺傳十郎 野崎甚助 定益喜次郎
 全土木委員坂元米助 小林新九郎 宮島傳四郎 長岡嘉助 全
 ○○○○介 熊原曾兵衛 長友蔵右衛門 花村助兵衛

現在此の碑は八坂神社境内に横倒しにして置かれ、刻りが欠けて全く読めない文字、一部が欠けて正確に判読出来ない文字もあります。

四、三島通庸頌徳碑

明治二年八月廢藩置県によって、都城領主島津久寛は鹿児島に移住された九月に三島通庸が都城地頭として着任され、広小路の商屋濟陽宅を役宅とされましたが、都城士民は旧主を慕って喜びば公を排斥しました。公は一旦鹿児島に帰られたが再び来られ、安永村を上荘内と称してここに役宅を構えられ、上荘内郷及び下三俣郷の経営に力を尽くされました。

すなわち住宅街地の建設、士民の糾合、道路の築造、堤防構築、母智丘神社の建立、産業奨励、教育の振興、兵制の整備等、僅か二ケ年で大いなる治績をあげられ、今日の庄内町及び三股町の繁栄の基礎をつくられたので、庄内町では明治四十二年に庄内小学校のお軍神の場所に徳を頌える碑を建立しました。

通庸はその後、山形、福島、栃木の各県令、内務省土木局長、警視総監として敏腕を揮い明治二〇年には子爵を受け翌年五四才で死亡されました。

其の六、哺育の神様

場所 町区釣璜院墓地内にあります。

参拝してお願いすればお乳がよく出て子供が元気に育つとい

う墓があつて、昔からお参りする人が少なく無かつた様です。しかし、今はうらぶれて訪れる人も少なくなり忘れかけられて居ます。

昔悪臣のざん言より第十代都城領主の時久が当時金石城主の相久すけひさを三百の兵で包囲したので相久は抵抗する事なく矢をつがえて大声で「此の矢は父に向けるものではない、又汝等を射るものでもない。私に奸曲なければ何んで矢を恐れるものか、この矢はおのづから当る所があるであろう」と天に向けて矢を放ち割腹し果てました。それで父時久が哀れんで釣璜院住職大年和尚の引導により納棺の儀がなされました。その時相久の乳母が懐剣で自分の乳房を切つて相久の棺に納めて殉死したと伝えられています。



乳母は中尾出身の乙守某と云われています。そのなきがらは共に相久公の近くに葬られています。すなわち「お乳の神様」のいわれです。

(日向諸島の伝記より)

其の七、坂元源兵衛翁の陶像

庄内「開田の主」であります。

関ノ尾澗のかみ手より前田用水が豊かな水をたたえ、谷頭方面まで広大な水田を潤していますが、これは翁の業績によるものです。工事は途中から（明治三〇年頃）前田正名翁にゆずられました。が、「水流し法」の土木工法によって水路を造り上げましたので、地域住民より大変よろこばれました。

後に、黒田甚蔵なる奇特な石工があり、翁の偉業を称えて陶像の建立に取りかかり、それに地元青年男女の協力で完成を見ました。（大正10年）



其の八、石敢当（石当散）



月野宅当の石堂散

沖縄や九州南部で道路のつき当りや門、橋等の悪魔除けに建てられています。東西町及び平田区を調べました処、現在十三基が判りました。

大島和義宅角。島田正一宅角。宮ノ原重忠宅角。七牟礼正雄宅当。今村商店前当。崎山ナミ宅前当。曾我厚宅当。野村商店横当。月野宅当。蔵満定夫宅当。齊藤ナミ宅当。元長谷商店当（溝下忠男当）。又庚申塔も三叉路突当りにありますが、これは道案内、又は悪魔の侵入を防ぐものと云われています。

其の九、稚児桜の碑

昨日まで誰が手枕でみだれけん

よもぎがもとにかかる黒髪

知将新納忠元が齡十六才にして容姿佳麗紅顔の若武者富山次十郎が風呂谷で激戦の末戦死したのを悼んで詠んだ歌が刻まれています。

慶長四、五年、島津忠恒と伊集院忠真が争ったいわゆる「庄内の乱」の時の話です。其の時安永城は伊集院方で謀将白石永仙が守っていましたが、戦雲急を告げる十二月八日奇策を廻らした永仙は自から安永城に火を放ち落城したかに見せかけて敵を誘い出しました。そして風呂谷^{ゲスカケニ}枳谷におりた伏勢が打って出て島津方を散々打ち負かしました。その時の次十郎の若武者振りは敵味方知らざるはなく、その死を深く悼み、なきがらを葬る時炊かれた香気が馥郁としてただよい続けて失せなかつたと云われています。

それで此の地になきがらと一緒に桜を植えて供養したのがその由来です。

此の桜は惜しくも昭和四十八年に枯死しましたが、二代桜と

して昭和四十九年一月二十七日二年生苗が植樹され現在も元気に育っています。植えた人は北原町の柿木司という人だそうです。

又過日紫藤ヒロさんが稚児桜の下で野だてをされて詠歌等読まれて故人をしのげられました。

其の十、稲荷石

母智丘の頂上に巨岩が横たわっていて稲荷石と呼ばれています。巨石の上に畳一枚程の凹みがあっていつも雨水が溜まっていますが、これが乾くと直ぐ雨が降り出すと云われています。昔はその上で神樂が舞われたと云う事です。岩の下には白狐赤狐白蛇が棲息していると云われて祀ってあります。これは三島通庸が改築されたともお聞きしています。今は観光参拝の目玉として巨石の穴に女陰男根の標示もあり、目を引きそうです。

其の十一、講

古来人々には何等かのかかわりあいがあって、共に生存して行く為には族、類、隣、知の人々と交わりをもって共存して来

た様です。

生きて行く為の知恵でしょうか。良い事、悪い事、たのしい事、悲しい事等喜怒哀楽のたびに何等かの行事をして来た様です。その中の一つが此の「講」と云う「場」と云いますか「集り」を設けて共存共栄の道を作り辿って来たのではないでしようか。

此処に記します諸講を通じて深く感じます事は、当時の人々が他人を通じて人間の情と哀れさと、又親族類家の結束を計り知人隣人との融和を密にして、生活の範囲を広く求めて来た事を知る事が出来ます。この意味からして各家庭の囲炉裡から（今はキッチンルーム）から忘れかけている諸々の話を通じ、又現代迄大事に受け継いでこられた方々に対してもこれを後世に広く伝える為にもと思い、浅学非才ながら余暇を通じて調べ、不文をも省みず記録に止め置いたものです。

専門家は歯牙にもかけず一笑に付されるかとも思いましたが、無いよりは良からうと考え江湖の一読に供したいと思った次第です。

一、オケサ講

初講は定かではありませんが東区の池田義幸、ミチ子夫妻の

お話によれば祖父以前から催されてあったとの事です。

その由来は、彼岸の頃の話です。現在坂元卯一氏宅横を流れている小川でオケサと云う女性が野菜やイモノコ類を洗っていて、何かのイサカイで切られて殺されたそうです。あまりにも悲しく哀れであったので周囲の人々が墓を建て、霊を慰めたとの事。以前は、高橋ハツさんの処の墓所でお祭りを続けて来ましたが、現在は話し合いによって、山久院納骨堂横に移し、「御池様」の墓碑を建て、祭っております。祭は九月彼岸内に神官を招いて祈念をされています。現在は池田義幸、赤池俊治、西俣優、西俣安美の四家で順講として賑やかにソーメン、煮び、神供ダンゴ等を揃えて家族団欒の場をつくっておられます。

（池田義幸ご夫妻の話より）



二、シンジ（親類）講

開講ははつきりしませんが古くからあった様です。
黒く塗った竹筒の中に巻紙の一卷が収められています。

内容は、「親類講順番帳講社中」とあり、椎屋伝吾、秋永秀彦、山元才助、長峯通悠、坂元直記、坂元正、大神兼盛、荒川内直四郎、池田繁、明治四十三年五月再、期日旧正月、旧五月、旧九月（現在は九月一日に催されています）

一、焼酎壺盃宛

二、白米式合五勺

三、祭主は花房兼平氏に依頼する。

但し、謝礼金五錢、一金五拾錢持参ノ事、右大正十五年旧五月十五日決議スル。と記されています。

この講も前記の方々のある家で、女中としてやとわれていた女の方が何かの事にてツリン（井戸）に身投げされたらしくそれで不浄を祓い祭る為神官をお招きして祈念されたのが始まりらしいとの事でした。（秋永辰郎さんの話より）

三、池田バチ講

相当古くからあるらしくやはり順番講であります。古い竹筒の中に収められた「バチ講順番帳」なる巻紙があります。明治

七年八月十六日改めと記してあります。

（旧）未原東一、未原利夫、池田伝助、池田仲助、池田利平、池田仲右エ門、長峯通悠、坂元紋右エ門、乙守善兵衛、（新）昭和四十四年九月、池田平八郎、池田クニ、乙守善長、未原照臣、大神勉、池田哲也、池田正巳、池田東、池田正秀
家内頭壺人宛 飯一通 右者親類罰講ニ付、家内不残参り申候。
相究メ置度尤座元ヨリ金八錢宛 御酒上ニ御願御礼致度事。

一、真米壺枘

一、白米式合五勺

一、金壺錢

右ハ各所ヨリ持参ノコト。

※いぼ神様も此の池田バチ講の方が花香をとって居られます。

（池田正巳、池田哲也さんの話から）



樹齡四百余年

東 区 片ノ坂 登

庄内町字内城の一角に由緒あるイチイガシ二本が古い歴史を語り伝えるかのようにがちりした姿で根づいている。その西

方に内城・新城・今城・金石城からなる安永城址があるが、別名を「鶴翼城」ともよんでいる。このような歴史を秘めた土地

に私⁽¹⁾のように住みつく者にとっては、イチイガシを見上げるたびにこの村の歴史を探訪したくなる。それぞれの時代にどんなことがおこり、どんなものが残され、どんなことが語り継がれているのかを知りたくなって、あれこれと想像したり、予想したり、推理したくなる。このように自分勝手に想像・予想・推理することは楽しいものではあるが他方「庄内平治記」等のような文献にたよることも大切なことである。今では史跡探訪を楽しむながら庄内の昔を語り合いやがては史実に近づくよう専門家の指導を得ながら確かなものにしていかねばならない。

(一) イチイガシ

前述したイチイガシは誰が、いつ、どんな願いをこめて植えたのか明らかなものはないが、同じ樹齡と推察できるイチイガシが諏訪神社境内にもある。このような樹木についての歴史的な記述は極めて少ないが、「庄内地理志（都城市図書館所蔵）」に次のようなものがある。

諏訪山

- 一、慶長四年伊集院源次郎忠真籠城庄内一乱之節十二月八日白石永仙謀斗を以安永城二火之手相立 太守忠恒公を偽引出廻を打越堀涯を御責入之處五本松之方二當相図之具をあくるに諏訪山風呂谷之伏兵五百人枳ヶ谷之伏兵五百人一同二起而公御難儀二及委者大廻に記入
- 一、諏訪山杉松之大木多鹿兒島御足立山御私領里山九ツノ一ツ也材木薪取所に制札有り

このような記述から諏訪山の様子を偲ぶことはできるが、イチイガシの由来と結びつけるものは何もない。それではお軍神のイチイガシの由来はどうなのかとなるとこれまたたよれるものはなく想像の域を脱することはできない。

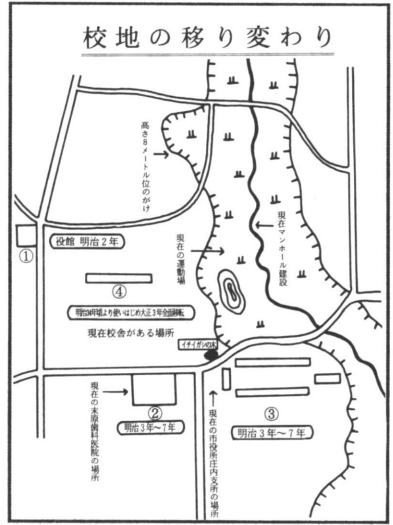
「庄内平治記」によれば、安永城は北郷持久（五代）が應仁二年に築いているが、北郷家にかかわる「島津久家々傳」によ

れば、永正十四年七代數久老を告げ、家を長男忠相に譲った。

數久は大永元年に死し釣璜院ちようこういんに葬った。天正七年八月晦日金石城で自刃した相久も釣璜院に葬ってある。この釣璜院の北方の小高い丘にあたるところにイチイガシ二本があるわけだが、現在はお軍神のイチイガシとして庄内地区民のシンボルともなっている。この釣璜院とイチイガシとを関係づけてみると、この一帯を二ノ丸城趾と推理してみたくなる。そしてこのイチイガシが原生林の名残りともみることがは無理で、やはり北郷家の氏神の神木として植え込まれたものではないのか考えてみたくなるのである。この一帯を二ノ丸城とみたてたのは、現在の庄内小学校の運動場は大正三年（一九一四年）に埋めたたえたもので、それ以前は堀切りになっており、その崖は数間もあり川が流れていたことから察して、安永城の築城にあたっては地形上からみても谷深い要害堅固とみたてたものと想像される。

前述した慶長四年（一五九九年）・應仁二年（一四六八年）・大永元年（一五二一年）・天正七年（一五七九年）は今から四百余年ということになるが、これ等と結びつけて樹齢四百余年とみたてることには何の根拠もないわけである。いずれにしても歴史を秘めた名木であることにはかわりはない。

庄内小学校校地支遷図



旧運動場は現在の庄内支所や農協が建っている場所にあったが、大正3年、谷を埋めて、現運動場ができた。

お軍神のイチイガシのところに社があったことは、

明治四十二年四月に三島通庸頌徳碑建立時の写真からも確かめられる。この由緒

あるところに頌徳碑文が建立されたことは住民の心あたたまる自然な感情の結晶であり、建立時の記録写真を見ながら藤かずら等で石碑をしっかりとからめて傷



(明治42年4月)
三島通庸頌徳碑建立の時

つけないようにして建てられていった工程を当時を偲んでま
めてみたいものである。(この記念碑建立事業に参加された方
もいらっしやると思いますので是非資料をおよせください。)

先にイチイガシのはえている附近のことを述べたが、大正十
三年二月に前田政右衛門が「庄内新郷立由緒」に書きとめてい
る内容を引用することによりこの一帯の地形などを知ることが
でき、また、想像をかきたててもらえる。

(前略) 小学校門前ヨリ南一帯ノ地ニハ其当時一軒ノ人家ナシ
巡查駐在所ノ下ヨリ町ノ入口ニ亘リ昼尚ホ暗キ一條ノ深谷アリ
都城ニ通スル旧道ナリ島津家ノ墓地ノ地勢ハ南ニ向ヒ傾斜地ヲ
ナシ全面唐笹藪茂リ狸狸ノ巢窟ナリシ

白熊原別荘ノ泉水池ノ南一帯ハ俗ニ山久院ムタト称シ地盤ナキ
深キ泥濘地ニシテ安永城ノ守将白石永仙ハシラスヲ蒔散ラシ詭
計ヲ以テ山田城兵ヲ導キ其ムタニ排陥鑿殺シタト聞ク

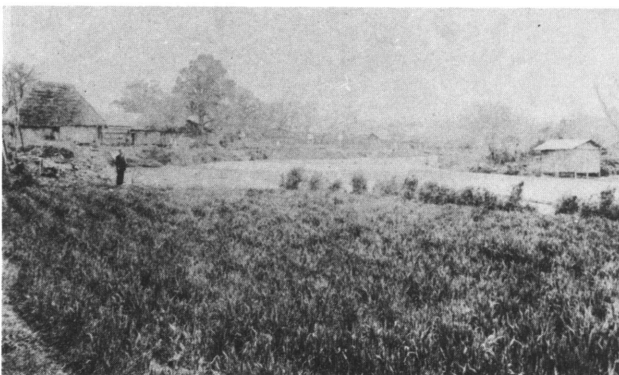
新古戦場而モ狐狸ノ巢窟ナル寂莫ナル界限今ハ変シテ光り輝ク
庄内ノ表玄関トナル誰レカ其変遷ノ甚シキニ驚カサルモノアラ
ンヤ

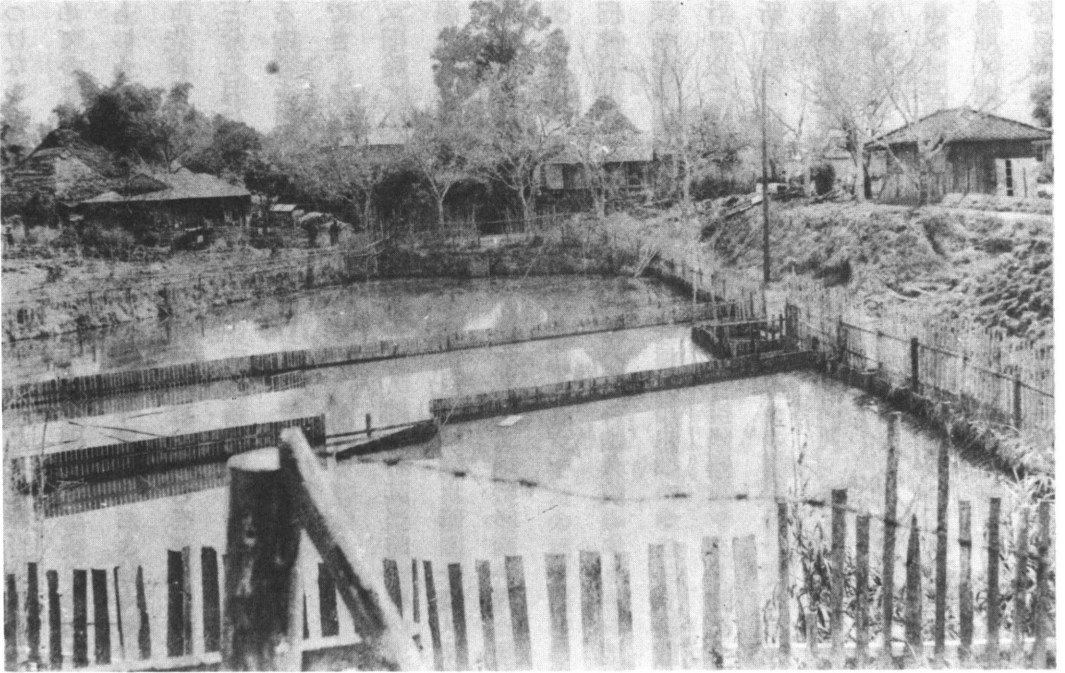
ムタノ基礎工事大勢掛リテ材木を引込或ハ石ヲ投込一方ニハ傾
斜地ノ地均深谷ノ埋建工事ノ至難ナル殆ソト言外ニアル公ハ雄
姿ヲ陣頭ニ顯ハシ幾百ノ人夫ヲ叱咤呼令シテ男ニハ算盤形女ニ

ハ赤キ花染ノ手拭ヲ渡シ各之レヲ打冠リ土ヲ運ンテ行クモノ帰
ルモノ入レ乱レテ恰モ千軍万馬ノ馳駆スル大戦場ノ如シ又火事
場ニ似タリ時々人夫ヲ稿フ慰安會アリ四斗樽ノ鏡ヲ打抜キ酒池
肉林太鼓三味線手踊歎声ハ天地ヲ覆サン計ノ盛況ナリ

(以下省略)

現在の庄内小学校の運動場が埋立て以前にはどんな地形であつ
たかについては、この記録からおしはかることができる。運動
場の埋立て工事は、坂元源兵衛の創案計画によって前田用水路
の築堤工事にいかされた水流
し工法によるものと聞してい
る。大正三年の埋立て工事も
水流し工法によるものである
が、このことについて今後詳
細にまとめることが望まれる
ところである。現在の学校の
プール附近は、池を埋立てた
ものであり、昭和十年三月当
時の池の様子とそれを埋立て
た水流し工法を写真によって
推察することができる。





(昭和10年3月28日撮影)
この池を埋立てて運動場の一部とした。



(昭和10年3月28日)
城山の一角から見下した当時の校舎全景

(二) 字名と石碑

昔の出来事や史跡を尋ねたり、研究のよりどころとなるものに字地名が必要になってくるが、字地名集によれば庄内町は次のようなものが挙げられている。

木ノ下 沖田 沖谷 下原 今平(いまでら) 廣峯 鰐頭
後原 小松ケ尾 乙房 橋之元 満水 廣坪 下月野原 大久保
上和田 中水流 中月野原 岩坪 中牟田 水久保 上月野原
引土川原 新町 竹ノ下 平原 引土(ひきつち) 王子川原
雲雀田 前原 野間 正牟田 谷ノ口 前畑 新町寺 牧跡
鶴崎 島廻 下鶴 中牧 橋ノ口 續山 曲橋 上牧 中次
次牟田 西ノ切 多羅木 梅木川原 川崎 池ノ尾 丸山
石町 餅田 伊勢谷 佐土平 笠木原 石踊 萩之尾 城 頼
関之尾 上ノ段 大坪川原 新開 前田 峯元 川原 松川原
神田 外川原 町ノ下 町下 上桑原 出水ノ元 豆田 石原
岡元 長岡 川原 長岡 鈴川 宮島川原 鶴島川原 東牟田
東原 茶尾原 西原 菓子野原 畑中 野首 今屋 今屋原
諏訪原 東脇 西脇 中尾原 内城 宮原 戦場原 花立原

以上のような字地名をみると当地方の地形の特徴をそのまま字名にしたものと考えられるものが多い。○○原(ばる)とい

うのは山の裾野に広がる丘陵地域によく名付けられるもので、○○川原も庄内川の蛇行の流れを特色づけている。

長岡水路変更記念碑文にも昔の字名が記述してあるので、当時の庄内川の流れや字名を知るのにふさわしいものである。

長岡水路変更記念碑

本水路ハ今ヲ去ル二百余年前大淀川上流庄内川字宮島川原ヨリ引水シ庄内村ノ一部志和池村大字野々美谷上水流及沖水村ノ一部ヲ湿ホス灌漑水路ニシテ延長二里ニ亘リ灌漑反別三百町歩ニ垂タトスル一大水路ナリ然ルニ年々水量ニ欠 ヲ告グル折柄明治三十三年前田正名氏庄内村字関之尾ヨリ灌漑水路ヲ分岐シテ庄内山田志和池村ニ亘リ畑地ノ開田ヲ経営セラルルニ当リ上水流地凡二百三十町歩ニ灌漑スル水量ハ大淀川支流丸谷川字瀧頭ヨリ交換水路ヲ開發シテ充分の水量ヲ得タリ然レ共庄内村宮島志和池村大字野々美谷ノ田地凡六十余町ハ従前通り宮島川原ヨリ引水セリ然ルニ該個所ハ長サ六十余〇〇ニケ所ヲ設ケテ引水セザルベカラザルニヨリ其ノ費用多大ニシテ僅少ノ反別ニテハ其ノ経費ニ困難ヲ訴ヘツツアル折柄偶々庄内村ニ川身変更耕地整理ノ事業アルヲ聞キ其ノ悪水路百余間ヲ字岡元ヨリ長岡川原延長シ全所ヨリ更ニ従前ノ水路ニ接続スル水路二百余間ヲ開發スル希望ヲ庄内村ニ交渉シタルニ石造堰維持等へ金壹千円悪水

路敷地代ノ内へ金五百円ノ寄附ヲ□洋水利組合ヨリ提供スル事
ニテ交渉成立シタリ故ニ大正四年三月二十八日工ヲ起シ工費壹
千四百余円ヲ要シ今五年四月廿日竣工ヲ遂ゲ水量充分ニシテ將
来安全ナル水路ヲ得タリ依テ本水路ノ歴史ヲシテ碑文トス財部
繁作選

このように碑文や古文書には字地名が出てくることが多い。

例えば、①諏訪神社は、庄内町大字安永字諏訪原に鎮座す ②
前田用水の水源は、庄内町字石踊 ③願心寺の所在地は、大字
安永字東脇 ④中央権現の石碑は、安政四年に東原に建立され
た。(原文には安永北前川内村東原……とある)

前述した小字名の外に新しい小字の由来を前田政右衛門は
「庄内新郷立由緒」で次のようにまとめている。

第七章 小字の由来

麓部落ハ学校下ノ谷ニ依リ両断セラレ南ヲ二本松ト惣称シ北ヲ
向ヒ馬場ト唱ヘ居ツタ二本松トハ西俣八百 及七牟礼清ノ宅地
附近ニ雲突ク計ノ巨松アリ即チ二本松ナリ向ヒ馬場トハ二本松
ノ向ニアル馬場ト言フ對照字ナリ

長倉製糸場ノアル北ニ菅原道真ヲ祠ル堂宇アリ天神馬場(土着

戸数六軒)ト名ノリ宮路馬場(土着戸数六軒)トハ東ニ諏訪社
アリ西ニ妙見神社(豊幡神社ノアル西)アリ宮ト宮ト三通ズル
道ナリ安永馬場(土着戸数六軒)トハ之ト安永村ト称スル時代
中霧山田ニ通ズル本街道ナルニ依元町馬場(土着戸数三軒)ト
ハ入来虎四郎ノ所ニ魚ヤ豆腐ヲ賣ル商家アリシニ依ル

北郷馬場(土着戸数十二軒)トハ新穂氏ト村田氏ノ宅地ノアル
所ニ空キ屋敷アリ安永村ヲ支配スル北郷家ノ遺跡

囲馬場(土着戸数八軒)トハ城下ノ囲ヒ地ナル意味ナリ

村役場通(土着戸数十二・三軒)八元ト稲荷馬場ト称シ学校境

内イチノキノ下ニ稲荷大明神アリ其稲荷様ハ元ト金石城ニアリ

シモノヲ三島公茲ニ移シ軍神トナス故又軍人馬場トモ唱フ

下馬場通(土着戸数十七・八軒)ハ今村トモ称シ神田トモ言フ

(以下省略)

このような先人の記録に出あうことによって、先に私の推理
したイチイガシと社のことは明確になったわけであるが、依然
としてイチイガシがいつのころ、だれによって、何のために植
えたのか、たとえ原生林を残したとしても何のために残したの
か不明のままということになる。

(三) 用水路と石

さて、石を基にして想をひろげていくと関之尾の甌穴の亀甲岩のことや前田用水路に使用された岩石のことを究めたくなる。安永城址に礎石を見出し出すことのできないのは不思議なことの一つであるが、山城ときめつけてしまえばそれまでのことである。何とも不思議な城である。また庄内川の石を活用した田畑の土手の積み石、屋敷の土手の積み石をあまりみかけない。それよりも切り石を家の塀や門柱に使用されているところがあちこちに見られる。この切り石は、霜に強いので霜くずれしないので塀などによく使用されているということである。ところが水には弱いと聞いたことがある。そうなると関之尾一帯の岩石を切りきざんで前田用水路のトンネルに使用したかどうかとなると疑問をいだかずにはおれない。きっと堅固な水路・トンネル工事にふさわしい岩石を求めていたことは推察できるわけであるが、この岩石を現在の轟ダムのところのものを使用したと聞いたとき、昔の人達の知恵のかしこさに敬服した。しかも、前田用水の水路はしらす土壌を貫いているので、水にもろいしらす土壌をくいとめるのに切り石がどんな役割を果たしているかを確かめるため水枯れした冬期にトンネルにもぐって調べたこともある。このとき支え合うことの大事さを知らされた。敷

きつめられた切り石のすき間は小さな切り石がしっかりと詰め込まれこと細やかに気くばりした石工の手柄や職人はだを感じとりもした。

水路の水位のとり方、切り石の運搬方法、石工の氏名を明確にするなど資料を確かなものにしていく必要がある。

今回は郷土の歴史にまず関心をもつことが何よりも大事ではないかということを書いてペンをおきたい。

(注)

(1)筆者は小林市大字南西方四〇二五番地の出身である。

(2)平成元年度読売新聞社主催の「みやざき名木十選」に選ばれる。

(3)「昭和六年三月 宮崎県史蹟調査第八輯 北諸縣郡及都城
市附録北諸縣郡及都城市字地名集」より。

昔の庄内行政

歴代村・町長、助役、収入役一覽

年代	町・村長	助役	収入役
明治22	初代村長 清水彦四郎(宮島)	溝木藤蔵	長峰通悠
明治24	二代 杉村実徳(東区)		
明治26		蒲生才蔵	
明治28	三代 前田政右衛門(東区)	堀 愿	
明治29	四代 丸目健蔵(東区)	長峰通悠	福留弥七
明治32	五代 蒲生才蔵(西区)	塚野伝之進	
明治36	六代 蒲生才蔵(西区)		
明治38		福留弥七	持永善市
明治40	七代 福留弥七(東区)	佐藤俊健	亀沢新吾
		島田丑弥太	

年代	町・村長	助役	収入役
明治43	八代 蒲生才蔵		
明治44		清水清次	塚野伝之進
大正2	九代 坂元英俊(東区)		
大正4			東条正左衛門
大正5		財部繁作	
大正6	十代 坂元英俊(東区)		
大正7		秋永秀彦	
大正10	十一代 坂元英俊(東区)		
大正11	十二代 池田 募(千草)	前田政治	
大正13	初代町長 池田 募(千草)		
	町制施行(5月15日)		
昭和5	二代 清水清次(西区)	木之下信夫	前田政治

昭和35	昭和31	昭和28	昭和24	昭和22	昭和21	昭和20	昭和19	昭和18	昭和16	昭和14	昭和11	年代
十代		有田三義(東区)	七代	八代行	田崎藤雄(西区)			五代		四代	三代	町・村長
	東清文(西区)		末原利夫	東清文	吉川重一	南崎吉二		有田三義(東区)	前田政治	齊藤助作	坂元英俊(東区)	助役
	大重勝哉			臼杵義美			持永優				宮田敬一(乙房)	収入役
	西岳と合併荘内町となる。(7月15日)	佐土平寅男		佐土平寅男	田川正江					荻原義武		

昭和39	年代
十一代	町・村長
横山新一(関之尾)	助役
	収入役

(註) 昭和40年4月1日 都城市に合併。
資料提供…西区 田中弥十郎氏

講演のあらまし

「庄内の歴史と伝説」その一

郷土史家 瀬戸山計佐儀氏

日本の国造り、国土の形成を、高天原の天孫降臨の神話、国生みの神話伝説等をまじえ、数々の地名、地形などから実証的にお話し、古墳の多い諸県地方は早くから土地の開拓がすすみ、農耕文化発祥の地ともいえよう。神話伝説即歴史ではないが、何れの国においても、その国の成立発展には重要な役割を果たしているもので、代々大事に伝承されているものである。

(昭和六十二年五月三十日)

「庄内の歴史と伝説」その二

郷土史家 瀬戸山計佐儀氏

藤原氏全盛の頃、一〇二六年太宰大監の平季基は、この地方の莊園を治め島津莊と号し、その範圍を庄内といった。頼朝の命により惟宗忠久島津莊の地頭となり、島津忠久と稱す。子孫の島津資忠一三三二年薩摩迫に入り北郷三百町を領し、北郷氏の始祖となる。(山久院に葬る)安永城は五代持久一四六八年

の築城。第十代時久の嫡男相久は、相続争いから金石城に自刃する。その折乳母の乙守某は殉死。子育ての神と伝えられる。共に釣璜院墓地に眠る。更に伊集院忠真と島津宗家との間で都城地方を中心に一年余戦乱がつづくこととなる。(一五九九—一六〇〇)庄内の乱である。伝説は非科学的というが、真実も含まれている。

(昭和六十二年八月十二日)

「けごと安永城の話」

郷土史家 児玉三郎氏

古来交通の要地としての都城は、特に江戸のはじめから、各地への街道が発達した。街には宿場があり、馬継所も設けられていた。今町・寺柱街道は幕府巡検使の通道として、福山、高木街道は島津藩主の道筋として、ともに松並木をつくり一里塚を設けていた。今町街道に残る一里塚は九州で唯一の国指定の貴重な史跡である。寺柱、山之口、去川にはそれぞれ閑所がおかれ、藩内への出入国はきびしく取り締まられていた。安永街道の西岳には公認の牧場、野牧が設けられ、まわりには柵、堀、又狼垣まで一里余にわたって築かれていた。尚牧原坂の途中には刑場も設けられていた。

安永城は一四六八年第五代北郷持久の築城で、代々北郷氏の治めるところであつたが、一五九五年伊集院忠棟の領するところとなり、北郷時久は祁答院へ移される。一五九九年、忠棟誅され、島津本家との間に争いとなり、一年にわたつて都城地方は戦乱の地となつてしまつた。庄内の乱という。桜田門外の變に薩摩から一人参加した有村次左衛門は横市出身といわれている。

(昭和六十三年五月二十八日)

「ミタママツリと民族芸能」

郷土史家 鳥集忠男氏

座産について串間の大平地方の例によると、シメナワを張つた部屋を使い(結界)、子供が生まれると助産婦さんの合図で、父親がワラツゴロで三回たたく。又夏尾では子供が生まれると、大声でガグレ、ガグレと叫ぶ。父親が板をたたき、ガグレを呼ぶ、これは魂を呼ぶ儀式である。又四ツ身の着物の背中に縫い目をいれるのも、魂のぬけないようにとの祈りである。

民族芸能とは、荒魂アラクマを和魂ニホクマに鎮めうつつ呪術、歌は呪文で、現在でも古代の呪いが生活の中に残っている。神主の祝詞の数字をとなえるのは心を鎮める呪文である。「だらけぶし」はミタママツリをよく表している。

冬山(ミタママカエ)冬の山中心。春山(ミタマフルイ)山王をおろす。穴信仰に通じる。夏海(ミタマシズメ)春から夏、海辺主体、祖先の魂をかえす七夕盆。秋川(ミタマオクリ)先祖様をおくる秋の踊りは鐘太鼓が主役、熊襲踊りの例がある。

(昭和六十三年九月十一日)

「苗字の話」

郷土史家 川越明氏

名字がととのつてきたのは、大化の改新の折の戸籍簿の作成と思われる。荘園時代名主は、自分の所有田に自分の名をつけて呼ぶ名田の権利を認められた。江戸時代、薩摩独特の門割制がおこなわれるなど地名も多く、名字も広く定着してくる。

その種類もいろいろで、官職名からとつたもの(税所・大蔵など)。歴史にちなむもの(三宅・国分など)。班田收授、荘園制からの上條、中條、郡司、院、園田など。地形など自然現象から考えられるもの(曾根など)。更に帰化人の姓、中央とのつながりを保つたための姓(藤原、佐藤など)は広く全国的に広がっている。尚、律令制下の氏・姓は同族意識を強固にし、その勢力を広め、誇示するため地方豪族との結びつきを強調したことも考えられる。

(平成元年五月二十日)

植木町郷土史家中村稲男氏より

編集部

明治十年、西南の役の激戦地となった熊本県植木町田原坂には、官軍、薩軍の墓が整えられ、資料館には数々の遺品、地図、統計など当時をしのぶ資料が展示されています。

植木町萩迫柿木台場に、東野孝之丞戦没の碑があります。その碑には陸軍大臣荒木貞夫書の碑文が刻されています。

「君ハ日州庄内ノ人西南役僅十五才ニシテ薩軍ニ投ジ奮戦此地ニ没ス時ニ明治十年二月廿八日義軍遂ニ敗レシモ君カ英靈ハ永ク此地ニ眠ラン」 昭和七年七月盡再建

海軍大佐 丹生猛彦 櫻井青年會と。

植木町郷土史家中村稲男氏から、この孝之丞のことについてお手紙を本会の編集部にいただいたのは、昭和六十三年の正月でした。「まだ薩軍兵の墓なるものがあちこち散在しているので、今回これらの墓石記念碑を一ヶ所に整理し、公園化して永世に伝えたい。孝之丞については、陸軍大臣の讃辞あり、民

謡「田原坂」のモデルともいわれている。その碑は、東野孝之丞になっっているが、遺族の方は塚野姓なので、その使いわけはどうか。」というような内容です。遺族は庄内町西区塚野民衛さんです。民衛さんは九〇才を越して、尚かくしゃくとして祖父・父から聞かされた孝之丞のことを話してくれます。

姓のことについては、坂元徳郎氏所蔵の西南の役関係書類等にも、二通り使われていますし、遺族の方も、そんなにこだわっていられるようではありません。

西南の役には、旧庄内郷から五十六名もの戦死者がいました。西区の南洲神社はその霊を祭っています。

平成元年四月二十四日、植木町老人クラブ連合会会長木村、司馬夫氏からお手紙をいただきました。

「ご案内、……このたび、町おこし運動の一つとして、薩軍墓地の一部を整備いたしましたので、下記により落成式を執り行いますので……。日時、平成元年四月二十六（水）午前十時。場所 萩迫地内 柿木台場。」

何しろ期日がないので、前述の中村稲男氏と連絡し、今回はまだ一部の整備がすんだところなので、次の機会を持つことにして祝電をうっておきました。植木町の方々のご行為には有難く感謝の外ありません。

追

憶

我れ満州に生きて

東 区 黒 木 聖

一、召集と終戦

警察官を父にもつ私は、二男として朝鮮で生まれ五才の頃から厳しく剣道を教えこまれた。「君に忠、親に孝」と教育され、小学校読本まで「負けた事なく月日と共に国の光りは輝いている」と教えられた。また他国の土足で踏まれた事のない日本であつた。昭和十九年九月十日朝鮮全羅南道松汀里東洋拓殖株式会社勤務中召集礼状を受取る。

国の為に一命を捧げる待望の日が遂に來た。その喜びを押さえる事が出来ず只嬉しさで一杯であつた。十月二十日父から頂いた日本刀と寄書の旗を握りしめ、千人針の晒を腹に巻いて日の丸の小旗振る多数の方々の見送りを受け私は勇躍南原という駅から出征した。全年十月二十一日京城駅で下車、竜山の歩兵第二十三聯隊二十二部隊第二中隊に配属された。(中隊長、深見中尉、軍医、千田准尉、班長、田中軍曹)内務班には、兵長一名、上等兵二名、一等兵四名、そこへ私達初年兵七名が配置

された。

入隊してからの三日間は正に天国であつた。だが四日目からは軍隊内部の規律どころか地獄のような日々が待っていることを知つた。朝六時起床喇叭を合図に私達初年兵は、床あげ、飯しあげ、銃の手入れ、内務班の掃除、点呼準備などなど、体が幾つあつても足りない日々が続いた。況してや自分の事以外に古年兵(一等兵以上の階級者)の総べての面倒も見なくてはならなかつた。私達は文句一つ言う事も出来ず只黙って九時から演習に出てゆく毎日であつた。演習は苦にならないが内務班に帰ってからの事を考えるとゾーッとした。

この制裁はいつたい何を意味するものなのか。ただ古年兵の慰めの余興なのか。その例を次に掲げてみよう。

ウグイスの谷渡り(内務班の机、腰掛をばらばらに積み上げた中を一人宛潜つて空間を「チツチツ」と鳴き乍ら上の方へ攀じ上り一番上の隙間から頭を出して四方を見渡し「ホーホケキョ」と鳴く。)

せみ(燃え滾っている暖房用ペーチカの輪に両手両足を懸けて抱きつき、蟬の鳴き声を出す。手や足からジュースと煙りが出る。皮が剥げ肉がザクロのように裂けて血の出ている者は合格)

捧げ銃（両腕を真すぐ前に伸ばし捧げ銃をする。十分もする

と身体全体が震え脂汗が出てくる。失神して倒れる者もいた。）

帯革ビンタ（弾倉を着ける帯革のビジョーが飛んできて顔に巻きつく。激痛が走る。赤く腫れて水膨れが出来る。）

同僚ビンタ（仲のよい初年兵同志を組合せて拳で殴り合う。

手加減でもするとこれが見本だと古年兵から思いつき殴られる。お互い泣き乍ら力をこめて交代に殴り合う。）

編上靴口上（両方の靴紐を縛り首にぶら下げて四つの内務班

を回り手入が悪かった謝罪の口上を述べるとその内務班の古年兵全部から交代で殴られる。四つの内務班から帰れば、又、わ

が内務班の恥だとして古年兵から殴られ顔は変形した。）

床なめ（中隊の廊下約六十米の拭き掃除の後乾いた雑巾で水気をとり、ビール瓶の底で丹念に廊下を擦るとピカピカに光る。

掃除終了の報告の後四人宛四つ這いになって廊下を嘗めてゆく。

舌が切れる。）

演習から帰ると、整理整頓の少しでも悪い者の整理棚は古年兵がひっくり返しているので、その整頓をする。

因みに私達は一人に対し六枚の毛布が支給された。この六枚の毛布を一枚宛八ツ折に畳んで箱のように折目をつけ、重箱の

ように重ねて更に整理棚の蓋で何回も擦って寸分狂わないよう

に真直にして置く。

これらはほんの一例にすぎない。そのあと銃の手入れ、編上靴の手入れ、飯し上げ、食後の片づけ、点呼前の掃除準備などをする。軍人勅諭、戦陣訓、歩兵操典などは全部暗記しておくなくてはならない。しかしこれらの中で必ず失敗がある。

点呼がすむと待っていたかの如く古年兵から殴られ、木銃で叩かれ、眼や顔は腫れあがりドス黒くなった。眼も紫に浮腫れあがっていても、将校は何も言わない。初年兵の期間中辛い毎日が続いた。

午後十時消灯喇叭と共に一斉に就寝しなければならないが、寝つけるものではなかった。私達初年兵は皆顔を腫らして毛布を頭から被り声をあげずに泣く毎日であった。若し、誰かの泣き声でも聞こえたら初年兵は全員起こされて、それでも帝国軍人かと同様に古年兵から叩かれた。古年兵の寝静まるのを確かめて、コソコソと起き、軍服、シャツ、編上靴を持って不寝番に見つからぬよう注意しながら洗濯場にゆく。水道管が水っているので初年兵同志で交代に水が出るまで水道管に抱きつき、水が出だすと水道の蛇口を少し開け、水音がしない様に気を配りながら洗濯をする。指先が痺れて感覚がなくなる。後からは痛くなってくる。冬の水は出せばなしにして置かないと凍っ

てしまう。石鹸の泡は出ず一向に汚れは落ちない。横の方に絞って置いておくとカチカチに凍ってしまう。それを濯ぐのに一苦労、二人で肩を組み乍ら足で踏む。手も足も凍傷と輝で腫れあがり血が出て、手はグローブの様になった。二人で軍服は捻じるように絞る。顔を見合せると腫れあがった顔と涙とが交錯する。洗濯がすむと靴の手入れだ。靴底のビジョーの周りの土を綺麗に落とし、刷毛でビジョーが光るまで磨く。表の方は靴紐の穴掛がりから縫い目に沿って刷毛で芥を落とし、そのあと保革油を塗って磨きあげる。最夜中の月は本当に美しい。母の顔が浮かんできて元気をつけてくれる。洗濯物を干し終えてから不寝番に見つからぬ様コッソリと室に戻り就寝する。この様な日々が毎日続く。

昼の演習も辛い。完全軍装(約六〇kg)をしての甫腹前進、長距離駆け足、防毒マスクをつけての駆け足は死ぬ程辛い。対戦車攻撃、渡河訓練、藁人形にむかっつての銃剣術など、すべて第一線に出てからの実務訓練なのだ。

昭和二十年三月一日幹部候補生を志願無事合格三月十日上等兵に昇進、五月一日兵長に昇進した。更に甲幹乙幹の再試験で甲幹に合格六月一日伍長に昇進、数日経って全羅南道光洲に分遣を命ぜらる。やっと長靴を履くことが出来、帯刀するように

なった。乗馬して街に出る、兵隊の敬礼に答礼、最高に気持ちよかった。光洲は私が召集令状を受けとった松汀里の隣りだった。

あの忌まわしいかった内務班の事が走馬灯のように頭の中を駆けめぐる。それも束の間、半月足らず光洲に居て同年六月十七日幹部候補生教育隊(平壤第二〇六部隊)へ集合せよとの命を受ける。六月十八日光洲から車中の人となり一路平壤まで。

六月二十一日平壤に着くと各部隊から集まった候補生と一緒にになった。迎える車で第二〇六部隊へ直行。私達の部隊名は砲兵隊で大隊砲が真鍋大尉、連隊砲が古田大尉、私は連射砲に配置された。中隊長は中川喜太郎中尉、小隊長が柳橋見習士官であった。入隊後七月一日付で軍曹に昇進した。桜の花をあしらったバッヂは幹部候補生のしるしでもあった。訓練は厳しかったが夢があつて、楽しい日々の連続であつた。乗馬訓練も最初は馬の手入れが主で馬小舎で馬と起居を共にした。そのうち、衛庭一ぱいに裸馬に鞭をいれて走らせ、その後を追いかけて、馬に追いつき鬣を左手の薬指と小指に巻きつけて、飛び乗る練習、馬の横腹に伏せる練習が幾日か続いた。尻の皮が剥けて風呂に入ると飛びあがる程痛かった。そのうち鞍を乗せて並足、早足、駆け足の練習だった。特に対戦車攻撃は実践そのものの訓練で

あったが、その指揮官は私達候補生が交代に自分の判断で指揮をとり、悪かった所を夕食後の反省会で交換意見する毎日であり指揮官としての実務訓練でもあった。また充実した日々でもあった。

ところが十二月の見習士官となる卒業を目前にして、昭和二十年八月十五日、天皇陛下の玉音放送「堪え難きを堪え忍び難きを忍び、以て万世の為に太平を開かむと欲す」と完全軍装をして衛庭に整列のうちに耳にした。この放送こそ一億特攻の大号令だと信じていた。しかるにその日その時、国歌吹奏に次いで流れた電波が伝えた内容は、全く思いもよらぬポツダム宣言受諾に関する詔書であり、私達はただ無念の涙に溢れながら、これを拝聴したのである。思いもよらぬ無条件降伏の事態に直面、しばし茫然として不動の姿勢のまま、時の過ぎるのを忘れていた。

八月八日ソ連の無警告攻撃によって、遂に神国日本は負けたのだ。しかも無条件降伏である。神国不滅を信じてきた私達にとって、突然の玉音放送で引導をわたされた敗戦のショックは痛烈であった。その後におこる不安、とに角自決しようと私達は策を労したが上官の見張りが厳しく、その機も逸した。

八月八日ソ連軍宣戦布告満州侵入により、牡丹江方面よりの

避難民は通化へ殺到してきた。わが子を殺して逃げて来た悲惨な話も耳に入り機関車の蒸気の雫をすくって飲む有様だった。

居留民を護らねばならぬ軍隊が何一つ保護の手を施すことなく、特に居留民三千三百人が全員虐殺された通化事件は余りにも有名である。そして八月二十二日遂にソ連軍による武装解除が我々にも言い渡され、銃も大砲も、戦車も馬も、総べて隣の砲兵隊の衛庭に纏めさせられた。だが日本刀だけは手離す気になれなかった。兵舎の床下を掘って埋めた。いざと言うとき自決さえ出来なくなるからだ。

ところがその夜思いもよらぬことが起こった。武装解除を知った村人が大集団で銃、剣、鎌などを持って教育隊を襲撃してきたのである。私達は全員青くなった。一瞬戸惑った。誰かが床下から日本刀を取り出した。私達は一斉に床下の軍刀をわれ先にと取り出した。教育隊の兵舎を固くしめ、椅子、机などで内側からバリケードを築き、抜刀した。そのうち扉も破られ雪崩こんできた。一瞬のうちに室内は血が飛び散り、大きな喚き声に変わった。私はその時足を銃剣で刺され、鎌らしきもので左手甲を負傷したが、幸いに生命に別状なかった。医務室で直ちに縫合して貰い治療を受けたが歩く事が出来ず、遂に入院する羽目になった。この怨みと憎しみは、恐らく永遠に消えさらな

いだろう。

八月二十三日戦車を先頭にソ連軍が進駐してきた。教育隊長が抜刀して教育隊内の進入を阻み、巨大なソ連軍戦車に轢かれ壮烈な最後を遂げられた事を病室で知った。

私も死を選びたかった。生きて汚名を残すより、自決した方が国家の為だと思ひ、軍医殿に幾度か手榴弾を下さいと頼んだが、チャンスがくる迄、お互いに生き延びようと励ましてくれた。

そのうち捕虜の身となって、八月二十四日松葉杖をつきながら、三合里收容所に移された。秋乙台にある三合里は私達が教育隊訓練の演習場であったが、何時の間にか鉄条網が張り巡らされ、高い監視台が数ヶ所に作られて、ソ連兵士が自動小銃（マンドリン）を構えて狙っていた。

ソ連軍の兵士は、今の今迄シベリアの流刑者だったのではないかと思わせる手首に入れ墨をした者や、未だ幼な顔の残る少年兵が数多く混じる中に、婦人将校が沢山いるのも物珍しかった。兵の素質が悪いのか、婦女子とみれば昼間でも私達の目の前で押し倒し、暴行凌辱した。婦女子が狙われるので阻止しようとした男達は容赦なく射殺された。

その為に、女は皆丸坊主になり、兵服を纏い、顔に土や鍋墨

などを塗り、男の如く装って、私達男性の中に混じって、一緒のベットで起居を共にし、必死に難を避けていた。そのうち、毎夜の如く、女を物色しに懐中電燈をつけて兵士が入ってくる様になったが、既に暴行された若い女達は進んで飛び出して行き、他の婦女子を護るようになった。またソ連の婦人将校は若い男を物色しに收容所内には男を連れ出したりもした。

收容所での食事は、高粱が飯盒の蓋に一杯でおカズは何もない調味料もない、それが一日分の食糧だった。高粱は脂肪も蛋白質も何も含まれていない。スカスカして食べられるものではなかった。塩も野菜も支給されず栄養失調になる人が目に見えて増えてきた。捕虜の身がこれ程までに惨めで、哀れなものとは思っても見なかった。下着も着がえが無いので、虱が湧いて、昼夜をとわず体中をムズムズと這うのがわかった。

脱いでみると、縫目に沿ってギッシリと卵を産みつけ、成虫がゾロゾロ這いまわっていた。その数も無数で到底数えられるものではなかった。天気の良い日は、皆下着を脱いで、虱をプツプツ殺す毎日であった。風呂がないので、雨が降るとフンドシひとつになって、手で体の汚れを落とした。補充兵の人達は、次々に栄養失調と虱に血を吸われ、発疹チブスになって、揚げ句の果は、骨と皮になり死んで行った。夜になると南京虫の襲

撃であった。かゆいかゆいその痒さは物凄^{かみ}い。真の闇でどうにもならぬ。南京虫は首と手首に集中して刺す。赤く腫れあがる。灯りをつけると素早く逃げ去る。

そのうち、私は軍曹の階級章をつけたままだったので、薪とりの使役引率者として、収容所の外に出されるようになった。山に着くと、朝鮮の人たちが群がっていて、餅や飴を売っていた。お金が無いので、私達は一人が前の方から買うふりをして値段の交渉をしている間に、後方から今一人の者が丸太をふりあげておどし、おびえているすきに餅や飴をかっぱらって帰った。持ち帰った餅や飴は、病人から、婦女子へと分け与え、早く元気になるよう励ました。

この頃、十日位ソ連軍兵士と共に外泊、寝泊まりも一緒に、鉄道線路を貨車に積み込む使役に出された。二人で一本の線路を担ぎ、貨車に積み込んだ。ホームには到る所にソ連軍兵士が自動小銃を構えて警戒をしていた。積み込みがすむと、その貨車は一路モスクワへ向けて出発した。この様にソ連は日清戦争以来築いた日本の領土、財宝を掠奪^{りやくだつ}し、在満同胞に飽^あくなき暴行を加え飢餓と重労働で数知れない同胞は虐殺されたのである。

ソ連の言葉

ダバイ（早くという意味、いろいろの場面で使う）

ハラシヨ（良いという意味）
スパシーボ（有難うの意味）
オーチンハラシヨ（非常に、とても良いという意味）

（つづく）



心のふるさと（庄内小の思い出）

南鷹尾町 岩 佐 フヂ

四年生、花咲じいさん（前編） 主役のよいじいさん。
五年生、花咲じいさん（後編）

あの頃、仮設の舞台で大きな声で唱い続けた中学年時代を思い出す。

庄内橋を過ぎて町の十字路から前方に高くそびえる茂った大木が視界に広がる。

そこには、私達の母校庄内小がある。思い出を辿れば枚挙にいとまがない。

学齢期に達してはじめて遠い道を通うた。

一年生担任	阿久井 マ サ先生
二年生担任	秋 永 ウ タ先生
三年生担任	佐 藤 ト シ先生
四年生担任	串 間 キ ン先生
五年生担任	
六年生担任	男女綴 山 内 栄先生

昔ながらの良い先生に恵まれて、幸せな小学時代を過ごすことが出来た。学年毎にさまざまなお出が、今尚彷彿として、ただなつかしさ一ぱいだ。

三年生の時「うさぎとかめ」歌劇でうさぎ役。

六年生の時、十二月二十五日大正天皇崩御。翌昭和二年二月上旬、大正天皇ご大葬の日、夜間、お軍神の大木の近くに（上の運動場）全校生徒、整列し、東方を遙拝し、黙禱を捧げ、（………きざらな如月の空、お寒い………）と、哀悼歌を合唱したことを想う。

その頃、お軍神は、日清・日露の戦没者の大きな慰霊碑があり、大木で守られた境内は、高く積まれた石垣塀に囲まれて、神聖な場所であった。

この大木は、明治・大正・昭和と永年に亘り学童を守り、育み、あまたの卒業生を送り、そして数多い町住民と心のふれあいを持っている大切な大切なシンボルだと信じている。あの大木を仰ぐ時、様々な変遷をジーンと見つめ、一人一人の喜怒哀楽と共に、いつまでもいつまでも末長く心の安らぎを覚えるように、見守って欲しいと祈願する次第である。

昭和九年四月、乙房小より母校庄内小へ転勤、専科を命じられた。勿論、当時は和服、袴、着用の服装である。六年、七年、八年の頃、不況時代。米一升二十一銭、初任給は二十八円の時代だった。

実社会に出て一年半目、全く未知の人に嫁ぎ、家へ入れば老齡の姑に仕え、昔ながらの家庭生活に努めながら、母校成るが故に恩師の姿を学びつつ、喜びと不安の明け暮れであった。

時の学校長は西諸出身の富永先生で、当初病気がちであられた。忘れ難いことは、校旗制定のことである。学窓を離れてまだ日の浅いのに、(どうしよう)躍る心を押さえきれない気持ちだった。六年担任の川崎栄一先生が圖案にとりくまれた。考案なさった圖案は鶴翼城にちなんで、羽ばたいている翼の下に、庄の文字がしっかり抱えられているようだ。畳半分にも相当する真紅の厚地の布(塩瀬羽二重)に、大きな圖案が描かれた。

鶴(頭・目だま・口ばし・羽毛)等区別して、日本刺繡の準備にとりかかる。大きな刺繡わくの台、刺繡糸の見積もり、配色のこと……。

大きな刺繡わくに、ピンと貼りつめた厚地の布に向かって、祈りをくりかえす。正規の授業を終えたあと、正座して一針一針に精根をうちこんだ。着物を縫うように、手先を動かして進

むものでもない。何しろ日本刺繡は、平たい絹糸を同じ回数より合わせて一すじの糸にまとめる。その糸を刺繡針に通して、上から下へ(表)下から上へ(裏)と、一針一針が勝負なのだ。裏、表が出来ないような細かい配慮をしながら……。

一日に(一枚の羽毛の半分でも。)と努力しても無理なこともあった。

「全校生徒に一針でも」という意味で、各学級から級長や日番が級の代表で一針宛を刺してもらった。絹糸をより合わせた手をとって一針一針の相手をしたり、それだけに時間もかかって、校旗の意義を深めることに努めた。

一針一針の刺し方の代表として、経験されて今尚覚えていて下さる、吉川一郎先生である。

相当な月日をかけて表裏のない日本刺繡の校旗が完成した。

校旗制定の記念式は、あの当時広以下の運動場で行われた。

最初の旗手は誰だったのでしよう。真紅の布に真白の鶴が大きく翼をひろげ、より糸の金糸庄の文字が鮮やかに映える校旗は、重々しい縁どりと共に、輝かしくこの日を迎えたのだった。ただ感動……感涙に我を忘れる心持ちだった。こんなすばらしい圖案を考案され、お描きになった川崎先生の笑顔を思い浮かべ

る。染め物よりも刺繍の重みを感じつつ……。

その後、長い歳月に亘り、年間の式日をはじめ、学校を代表しての学童の行動には必ず校旗と共に……。その度にケースからの出し入れ、始末のしかた等々、愛着を覚えるのだった。

平穩なこの頃、校門の西側に丸い大きな柱のある大講堂（当時木造建築では九州随一と評されていた。）について、二階建の教室が並び、理科室、準備室、作法室（立派な床の間のある和室）、家事室（実習室）等が新設された。

当時、児童数千六百近く、職員四十二の大世帯であった。

折角の作法室の活用は多様で、高等科生の利用は女子は勿論、男子にも和室での基礎的な動作を共に学習したことを想い出す。

家事実習室では、先輩の先生と、和菓子（これがし）を作って試食したこともあった。

職員間もそれぞれ持ち味を生かして和気あいあいお互いに信頼し合える楽しい職場であったことを、先輩の方々に感謝している次第だ。

昭和十二年、慮溝橋事変によって、あやしい風雲が起った。

宮崎県でも相川知事の提唱で、祖国振興隊が結成された。

学校では川崎地区にある学校有林の開墾が始まり、広い山林地に、高等科の生徒が動員された。鋏や山鋏・草かき等持ちよって作業に取り組む。広い山野も日数を追う度に、何時の間にか畑に変わり、長い畝には、さつま芋や野稻など農作物も実を結ぶことが出来た。（振興隊旗をひるがえして）

この頃、まだ作業着もなかったもので、いろいろ考えて、古着からモンペに作りかえた。袴の代りにモンペをはき、手拭いを被り鋏を持つ。あの時、黒木先生（西諸出身）から写してもらったモンペ姿、おそらく町内で初めてだったと記憶している。しばらくして義姉の友人がモンペを裁ってほしいと、縞の布地を持ってこられたことも忘れられない。

戦時体制下にあった十四年頃には、隣組が提唱されて、何彼と協力体制が強化された。主食の米、麦をはじめ、塩・砂糖の配給制が規まり、年を追って衣類・日用品一切、マッチに至るまで配給。何も彼も節約だった。

「勝つまでは欲しがりません。」と生活目標をかかげてのお互いの生活ぶり……。

十七年頃、職員の研修は講室内で木刀のおけいこがあり、何

かと緊張緊張の日々を過ごした。

「灯火管制」夜間の電燈は、黒布で覆われ、外部にあかりが洩れないように配慮し、針しごとなどには随分苦慮したことだった。防空頭巾も忘れられない護身用の一つであった。

十九年には、学童疎開と共に、学校の校舎は、○師団の校舎となり、兵站基地として前線と密な関係にあったのである。この時、校長（畑中栄蔵先生）保健（島田屯先生）と、三人は学校警備員として、全校生徒のいない学校に出勤して、非常時を守った。空襲警報が出る度に、奉安殿にかけてガチャガチャ鍵を動かしては、扉を明け、御真影を奉持して、城山の防空壕の安室へ……。幾度、このようなことをくり返したことでしよう。校長先生のご不在の折は、島田先生とどんなにあわてて走ったことか？。でも、学校や城山の要所には、必ず兵士の幾人かが、警備してもらったので、不安な中にも落ちつくのであった。

二十年には、昼夜を問わず空襲警報が鳴り渡り、恐怖におびえる。隣組の人達にも車力に荷物を積んで、人里離れた場所に避難されるようになり、我が家でも老齡の母と二人の男児を西岳村の親類家に疎開させてもらった。

〈八月六日〉 遂に戦火が及んでしまい、黒いグラマン機が低空で乱射しながら、飛び回っていたようすが、今も忘れられない。

「学校が燃えている。」とのするどい叫び声で我を忘れてかけた時は、大講堂をはじめ校長室、職員室、二階建の校舎等、火の海。またたく間に燃えつきってしまった。どうしていいかわからず、ただ号泣するばかりだった。大切な物が燃えてしまった。あちこちに兵士の姿もガックリとわびしそうに。

庄内小は兵站基地として、どの教室にも生活必需品が満ぱいで確保されていたこと。軍服姿の出入りが多かったこと。

また、特攻隊（学徒動員）第一線の基地として待機していた軍服姿の若衆が、民家に間借りしていられたこと等、戦時色の強かったことが遂に戦火を浴びた明らかなる要因だろうと考えるのである。

〈八月十五日〉 静かな午前中だった。

（何故かなー。）と思っていたら、島田先生が、緊張なさって走って近寄られた。

「戦争が終わったんだ。ラジオ放送が——。」二人で信じられない心で、顔色を変え、体を張って、「何で……。」「ただ無

念の涙が、とめどなく頬を伝わった。信じられなかった。どうしてよいか不安で一ぱい。

陛下のお言葉が……。

今後、どうなるのだろうか。語る元気もない。暗やみの中、人心が乱れているいろいろなデマもとんだ。笑顔が消えた。泣いていることで自分自身が慰められた。うつろな気持ちはたとえようもなかった。

敗戦——終戦。やがて外地からの引揚者が帰郷された。勿論、外地に財宝を残して身の周りの軽い荷物のままの苦しい里帰りである。でも家族揃って、元気に帰郷されてホッとした。敗戦の痛手をはじめて体験する私達は、右往左往しながら、戦時中よりか、戦後の処置生活に、大変な試練を受け、克服して、お互いに手をとり合って生きてゆかねばならなかった。

生活を支えるために、農家に向いて、米・麦・芋るい・野菜等買い出しをしたり、又は大切に行っている和服と食料品を交換したり、山に薪とりに行ったり、寸暇を惜しんで努めた戦後であった。

当時の男子の方々は、カーキ色の軍服や、詰衿の上衣がほとんどで、女子は全部ズボンに下駄ばきが多かった。着替える物

も少ないこの頃であった。



平和を誓う

西 区 池 田 シ ヅ

昭和二十年八月六日

広島の原爆の日は、くしくも

庄内の空襲の日でもあった。

八月七日の新聞の切り抜きを見ていて、庄内の空襲のことを自分の体験から書いてみようと思いました。あの日からもう四十余年の歳月は流れ去りました。四歳半と一歳半の一男一女をかかえて、おばあちゃんを中心に主人と五人の家族でした。

連日の如くB 29がきれいに編隊を組んで頭上を飛び交っていました。空襲警報のサイレンが不気味に鳴りひびき夜は燈をもらすことも出来ず、暗がりの中で幼い子供をかかえての生活でした。小学校には兵隊さんがいっぱい入っておられました。そして生徒さん達は各部落に分散しての授業でした。主人は下川崎の横山さん宅の小屋に二階が大きかったのでそこで授業をしておりました。小学校の西方の城山にはたくさんの防空壕が掘

られ、まるで軍需工場のようなでした。御真影も城山の壕の中に納められていました。庄内尋常高等小学校として数多くの生徒さんでとても大きな校舎がいくつも並んでいました。この校舎には軍隊の物資が、そして兵隊さんがいっぱい入っておられました。何時もいつもあんなに空襲があるので庄内小学校も空襲はまぬがれなとのうわさでもちきりでした。近所の方々はあちこち疎開されていて、うちだけが残っていました。学校がやられるときは池田どんが一番先だと語っておられました。学校の当直には先生方が学校には泊まらず、私の家に来て泊まっておられました。私共は、ばあちゃんと城山の壕に泊まりに行ったことも何度かありました。前の畑には防空壕を掘り、竹山の中心にも大きな壕を掘ってもらって家具も全部入れて、サイレンの鳴るたびに壕にかけこみました。葦原に連隊があり、どかんどかんと爆弾が落とされました。本土決戦だと言って私共婦人部は竹槍の訓練も何遍あったかわかりません。南洲神社の通りで、エイヤーと、それこそ真剣でした。(今考えるとアホみたいですが)

不気味にサイレンが鳴るたびに、ばあちゃんと二人の幼な子をかかえてせまい壕に入っていますと、どかんどかんと落ちる爆弾で壕の中は砂がばらばらと崩れ落ちて、もうこれまでと何

遍も思いました。ばあちゃんは壕の中で四、五日は夜を明かされたこともありました。幼児をかかえては、とても壕の中では眠れませんでした。何時もこうして四人、ただ心をひとつにして、何の不平を言うでもなく「欲しがりません、勝つまでは」の標語どおり一生懸命でございました。主人は何時も生徒さんと一緒だったものですから、城山の壕に逃げたり、叔母さんとの壕にかくれたり、隣におられた江口さんのところの壕が、ちょっと離れたところの竹やぶの中の川端にあったので、そこまで行ってかくれたり、もう毎日毎日食事をつくるのがやっとでした。明けても暮れてもこんな日ばかりでした。夏の暑さもどんなだったか覚えていません。家財道具も竹山の中の壕に入れて万全を期したつもりが、長い間には雨がしみとおって、ひとつまたひとつと全部が家の中に納まってしまいました。

そのような八月六日または敵機の爆音がして壕に入りました。ばあちゃんは萩原フミさんところの城山の畑からいもの草取りに行かれた留守のこと、敵機が去って木戸に出て隣の萩原さんのトキさんと「ばあちゃん達、まだ帰ってこないね。」と話しておりましたら、またもや敵機襲来、あわてて壕に入りました。お昼が過ぎても帰らぬばあちゃんを待っていましたが、子供がかわいそうだと思ひ稔昌におこげのごはん（兵隊さんの残

飯をもらったもの）をお茶わんについて食べさせました。ばあちゃんが二時を過ぎても帰ってこられないので、自分も食べずに、どのくらい時間が経ったのか、三時頃だったのでしようか、兵隊さんの声がして（水貫いに来ておられたので）「奥さん、大変、速く壕から出なさい」と叫ばれたのです。壕から出てみますと、もう学校は真赤か真黒か火事の煙が出ていて、ものすごい勢いで顔が火照りました。稔昌の手を引いて昌子をおぶって、畑を通り小林どんの庭に出て逃げました。かねては、リュックサックを大小ふたつ縫っていて大事なものは入れて、まさかに備えていましたのに、その日に限って何にも持たず、夏服一枚着たきり、ただただ子供第一と飛び出したのに、稔昌の手も人におされて離していました。小林カツおばさんが「まあ、まあ、どうしよう」とどきもをぬかれ、うろろうしておられるので「おばさん」と大きな声でどなり、うながして下の町の方に皆どやどや一目散に逃げるだけでした。町下に劇場がありました、今の縄工場あたりだったでしょうか、あそこまで行ったとき、町の人達は小荷物だのフトンを引きずりながら、そして泣きながら逃げられる姿を見て、はっと吾にかえり自分はどうしようよこの時程、むなしく、わびしく、悲しく思えたことはありませんでした。無一物の上、稔昌はおらず、昌子を小林カツ

おばさまにたのんで帰ってくると言い張りました。どこかのおじさんが「今は危ない、お前ん家があるもんか、帰るな、帰ったら危ない、怪我はがっちゃせんが、」と強くおこられました。

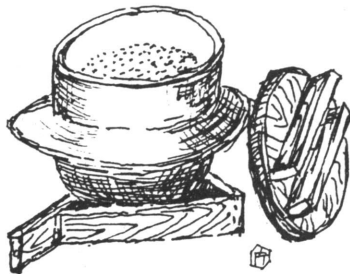
けれど四歳の稔昌がいないのです。これをどうしてじっとしておられましょう。急いで学校むけて帰りましたがどう通ったらいいのかわかりません。もう道路は通れません。学校やあちこち燃えているのです。裏から畑からやっとのこと帰ってみると、驚いたことに家が建っているではありませんか。そして畑の中にタンスの引き出しが幾つも重ねてあり、ばあちゃんのも出してありました。主人が川崎の学校から帰ってきて、道具を出したり、水をかけたりしておりました。「あっお父ちゃん」と叫んで私も一生懸命に水を汲みました。主人が「お前は、子供達はどこに？」と叫びました。稔昌のいない事も言えず「子供はあっき、あっき」と指をさしながら水を汲み続けていました。こんな時兵隊さん方に加勢はしてもらえませんでした。二人で懸命に消火につとめ、畳は焦げ、戸板も焦げていましたが、主人が必死になって守ってくれたおかげで不思議と家は残っていました。どの位時間が過ぎたのかわかりませんが、どうしたのかその行動も覚えていませんが、稔昌も昌子も主人もばあちゃんも家に一緒にいました。ただ稔昌が帰ってきた時は、お茶わ

んとお箸をしっかりと握っていたのを覚えていません。セキおばさん方、ヨシエおばさん方も全部無一物に焼け出されてしまった。たくさんの堀立て小屋が出来るまでしばらくは三世帯一緒に生活しました。何もかもこの三世帯のためにさらけ出し、欲なんてものはありませんでした。浴衣は手ぬぐいに変わりました。はつきりした数はわかりませんが、八十何戸焼けたようです。後の話でおばあちゃんは城山に居てあの三人(子供二人と私)は焼け死んだ、生きてはいない、どうしよう、と泣きに泣いたそうです。部落も数多くの家が焼けましたが、昼間だったので一人の死人もなく助かりました。これがせめてもの救いだったと思います。そして学校は三日三晩も高粱や食糧品が燃え続けました。川崎の木之下のおじさん宅に私共は三晩も泊まりがけに行きました。学校の近くの人達は、高粱や味噌、醤油、塩の焼け残りを拾いに行かれたそうです。私共はそんなことは泊まりに行っていて知りませんでした。あの頃、醤油も固形のもの軍にはありました。

私所の木戸に大きな梅の木がありました。この梅の木は全盛時代には二石も実のついたとおばあちゃんから聞かされていました。この梅の木も焼けました。大きな樅も後で枯れました。木戸の所は雑木の生垣でしたのでこの樅で家は焼けずに助かっ

たのでしよう。木戸に大きな軍のトラックが置いてあって、それが燃えた時はとても気がかりだったと話して下さった方もありました。東区の塚野勇夫おじさんが見えて「ああ怪我もなくて元気でよかった」とおっしゃった顔が今もはっきりと私の心に残っています。西隣の萩原フミさん宅、西俣さん宅から西の方にずーっと焼けていました。うちの氏神様は焼けませんでした。竹山の所に大きな油缶が落ちていました。後で学校の庭に運ばれましたが全部で七本だったと記憶しています。うちの竹山に落ちていた油缶は全く空になっておりましたが、川辺さん宅の後に落ちていた油缶にはまだ残っていたのでしよう。あのあたりずーっと焼け野ヶ原になったのですから。セキおばさん宅と川辺さん宅との間に防空壕がありこの壕にも何度となく逃げかくれたところだったのです。後で思っぴやっとししました。あの広い校舎がどのようにして燃えたのか、ただ一瞬のうちだったように思います。油が撒かれていますので、火が出て顔が火照る位の頃と燃えつきる頃と見ただけ、自分の家を守るのに一生懸命でしたから。庄内空襲から一週間後の二十年八月十五日、終戦となりました。それから皆多忙な日々を過ごし、困惑のうちに二十一年を迎えました。主人は夏にかけて病気がち

校でなく田中医院に行きましたそうで、がっかりして帰り一ヶ月間の休みをとってきました。二十二年の三月三日二男節雄の誕生となりました。それから六ヶ月後の九月二十日主人はすべてを母と私に託して旅立ってゆきました。主人三十三歳の秋でした。



で、夏休みも過ぎ、今日から学校が始まるという日、主人は学

太陽さまに向かって生きた人生

西 区 池 田 シ ヅ

昭和二十二年九月、戦後の荒波の中に七才と四才と生後六ヶ月の幼な子を残して主人は三十三才を以て他界しました。結婚して七年半、まだ若かったので恩給もつかず三人の子供をかかえてしゃにむに働きました。縫物洋裁編物等、子供が幼かったので、唯家庭内の仕事丈をあさりました。お蔭さまで農業するかたわら、日に夜をついでの仕事に子ども達の教育には事たりてゆきました。唯当時は子供が子供と共に生きること懸念でございました。戦後のこととて何にもなく、ミシンほしさに里の母が丹精こめてつくってくれました着物も何枚となく金にかえてミシンを求めました。帯も残らず下駄の緒をつくって売ったものでした。でもつらい生活の中にも姑母が何時もみつめていてくれましたので、どんなに力強かったかしれません。子供が素直に育ってくれますことを祈って子供達の行事は何でもしてやりました。七夕祭りだって色紙さえありませんでした。それなりに子供の手でえのぐで色紙をつくりながら兄弟三人で

器用に切り、私の働くそばでつくっていました。

(1) 兄が弟に妹に、えのぐでつくる色紙を、仲よく眺める笑い顔

(2) 赤黄青と色々に千代紙切って美しく、七夕さまを祭ります

(3) すすすくのびた若竹に子供心の其のままを優しく飾る星祭り
誕生日も赤ん坊の時から今日に至るまで、子供達の誕生日にはかかさず祝ってくれております。遠く離れている時は必ず祝電を打ったり時には送りものをしたりしております。こうして子供達は小学校から中学校へと成長してゆき、それぞれの志望にあわせてのばしてゆきたいと思いました。けれど如何に働いてみたると女の弱さ、悲しくも又寂しくもありました。こうした時自分ながらの歌をよんではなくざみとしておりました。

「天かける君にささげし草花に何か言うたき我が胸の中」

「恋しくも文も通わぬ逝きし夫 世相知らせてうらみたくあり」

「子の為に力の限り尽くせども 及ばぬ業の悲しくもあり」

「昨日今日雪より寒きふところの 雪とける春何時参らせむ」

長男が高校に入学しました時、県の母子福祉資金と町の奨学資金を借り受けましてどんなにか助かりました。私がおう一つ助かった真実の友があったことです。丁度境遇も全く同じの小林さんと慰めあい、語り合ってきたからこそ苦勞も幾らかやわぎ精神的にもプラスになりました。良き友をもつことは幸せで

あります。貧乏ぐらしには慣れていましたけれど、主人が弱かったので子供達の食生活は気を配って衣生活を切りつめて、栄養に気をつけました。今の世代ではちょっと考えられないことでしょうけれど。私は常に夢をもっていましたので、三十年の七月実践部落に指定された時、栄養の知識や環境衛生、生活改善などいろいろの事を学び、家庭経済や栄養面から野菜の自給自足をはかり、ごま・落花生・大豆等の栽培と養鶏を始めました。毎日の忙しい生活に追われて自分の生活をじっとふり返る暇もないうちに十年は過ぎてしまいました。

「苦しくも優しくき祖母はばのある限り、甘えて仕える幸多き日々」何時も祖母が力になってくれました。三十一年の十月、西区の作業所につとめる事になり、はじめて外で働きました。作業所は夕方おそくまででしたが、祖母が私に負けない様に、子供の面倒をみてくれましたので助かりました。三十四年長男の高校卒の日も近づき、就職を心に願っていた私に、まあ、三年だけ頑張ってくれる様に申し、苦学してでも千葉大の工学部にはいりたいと、かたい決心なので、三晩も祖母と考えたあげく、子供のためなら田圃や畑を手離してもよいと祖母が許してくれました。たとえ試験にパスしなくても帰ってはならないと、最初から布団までもたせて上京させました。心の中では泣き乍ら？。

どうか試験にパスして電報がきた折の喜びは大きなものでした。親と子の努力の生活が始まったのです。この時も又、母子福祉資金を引き続き借りられました。三人の子どもが大学と高校と中学と同時に入学して、三年後に同時に卒業しましたが、苦しい生活の中にも子供との文通がどんなにか張り合いのある楽しいものにしたか知れません。祖母は手紙のくる度に懐ふところに入れて私の帰るのを待ちきれず、にこにこしながら仕事場までもってきてくれたものでした。幾度か質屋にも通いました。三年三ヶ月作業所に勤めた私は学校の給食が始まりまして、そちらに転職しました。今までよりずっと時間的にも暇が出て参りましたので、何はなくとも機会をつくり祖母と共に家族連れの遠足または小旅行をして遊びました。外出好きの姑に対してせめて私の親孝行だったかも知れません。それから学校の先生や警察の方など下宿されて、下宿屋のおばさんにもなりました。長男が大学の二年の夏休みに「松戸より都城庄内まで」と旗を立てて、色真黒になって自転車で十八日間かかって帰ってきて、家中の者を驚かせ喜ばせた事もありました。母子五人病氣もせず元気でしたのに、その年、昭和三十五年の十二月十日、祖母はうそみたいに病みついて一ヶ月目皆から見守られ乍ら、いとも安らかに他界いたしました。まるで片腕をおとされたみたい

うつろな気持ちでした。主人と歩いた道は七年半でしたけれど、姑母とは二十一年間でしたので存分に甘えていました。すべてをまかせきって私の生活をじっと見守っていてくれましたことが、どんなに生き甲斐を感じたか知れません。貧しくとも誰も知らない幸せがありました。明けて三月に長女は高校を卒業しまして、長男のすすめで上京してタイピストとして就職しましたので、二男と二人きりになりました。昭和三十七年の六月から日本生命に籍をおくようになり、四十六才になってから、自転車乗りのけいこをしました。子供達もお蔭さまで人並みに素直に育ってくれましたので、小さい乍ら喜びを感じ満足です。子供を育てるのに全精力を尽くし、地味に過ごしてきた未亡人に対して世間の目はつめたくなるさく、一人でに涙することも幾度かありました。でも良くここまで強く生きてこられたと思う時もあります。修学資金の返さいも三十九年三月ようやく終わらせました。こうしたお金が又次の方々に借りられますよう願っております。四十年三月二男も都城工業の電気科を卒業しました。主人なき後二十年、こうして子供達を社会に送り出してゆけたのも、先づは健康、皆それぞれ病気もせず成長したお蔭と深く感謝致します。身は貧しくとも常に心ゆたかでありたいと願っております。

四十二年十一月三日、娘の結婚式でした。

この日まで手しおにかけて嫁ぐ吾子に

ひたすら幸せを祈りてやまぬ。

淋しさも苦しみもみな忘れ去り

強く明るく生きてゆかまし。

嫁ぎゆく娘に母として何にも言えませんでした。唯心の中で呼び続けた丈、ごめんよ。父はなくともりっぱに心やさしく育てくれました。丈夫な体と美しい精神とで二人で力を合わせて、幸せをつかんで頂戴。泉の如く汲んでも汲んでもつきないのですから。長男の結婚、次男の結婚、次々に三人の我が子に今度は孫達が生まれ、四十二年より五十二年までの十年間に誕生祝もたいしたもの。喜びでこの間、私の写真日誌はどんどんふえてゆきました。つらい苦しい保険会社の仕事をしながらよくまあこんなに書けたものだと思います。この間のことははぶきます。

主人逝きて二十九年、今ようやくにして子供達への責任が終わった気がします。苦しい時も又たのしい時も、自分乍らの歌を口ずさんできました。姑母もよくそれを、私の気持ちを聞いてくれました。家庭の和、人との和というものが大事なものだと思います。喜んでいただけるはずの姑母が今更のように

恋しく感じられます。昭和五十三年四月、育ちゆく孫達をたのしみに自分の仕事に精出してゐる矢先、思い掛けない次男の死報に、身も心も転倒致し、この味わいは同じ境遇の人でなければとうていわかつて頂けないことです。十六年六ヶ月、日本生命に勤めた私は、勤める気力をなくしてきれいに仕事をやめさせて頂きました。そして逝きし家族の冥福を祈り、朝な夕なご

先祖さまと語らい一日だつて忘れられず、良子さんを紀子ちゃんを純子ちゃんを、節ちゃん守つてねと心の奥底から祈らない日とはありません。孫達がおばあちゃんおばあちゃんと呼んでくれます時、心安らかな日々でございます。何時かは私の気持ちが誠の愛がわかつてくれる日もあると信じております。私は自分の過去をふり返つてみて自分の生き方に、そして結婚に何等悔いはありません。誠の愛に生きて幸せでした。何にもならないでしょうけれど、自分の過去をふり返つてみて、自分のたのしみとして又、喜びとして写真日誌みたいなものを書き続けております。貧しい女の一生が母なればこそ強かったのです。子供達もそれぞれ人並みに社会人として育つた今、良き友達をもって心と心で接する時、たのしさ一杯です。福祉会だの喜楽会だの十年会だの、花や庭木の相手に、そして子供達に忙しく病みつく暇なんてありません。時々集まつては良く食べ、

たのしく笑い、又は小旅行に年も苦勞も忘れてはしゃぎます。現実のきびしさにこうした日々もあつてこそ良いのではなからうかと思ひます。小さな幸せの中にとしたり。

昨今のテレビの中に様々のおそろしい不良青年、男女出入人などを見受けます時、ゾツと致す思いが頭の中を走ります。人様に迷惑をかけない社会人に育つてくれました事を何よりの喜びと嬉しく思ひます。そして又、テレビ新聞紙上でいたいけない子供を道連れに無理心中などみます時、何故強く生きてゆかれなにかとはがゆくなりません。生きることをむづかしいのに、死を選ぶのは卑怯です。「正しく生きたならばきっと良い日がありますものを、こんな小さな私でさえ、いばらの道を強く強く生きてこられました。今は苦しみも喜びに変わり、思い出は懐かしさで一杯です。これからの若い母子会の皆様に強く生きて下さい、そして自らの幸せをつかんで下さい、明るくにごやかな微笑こそ家庭の幸せのもとだと思います。再婚も又しかり、明日にむかつて悔いのない人生を、と頑張つて下さい、と申し上げたいのです。

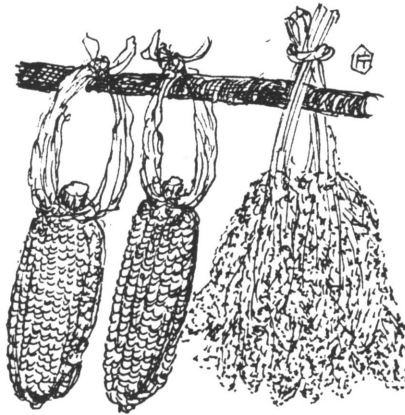
五十五年六月より八月の末まで三ヶ月間、五月二十八日池田家の改増築始まり、先ず車庫を住宅につくつて貰いました。この模様を写真におさめアルバムに五冊、二百四十枚の写真が出

来上がりました。でかした若夫婦、おばあちゃんがおられたら、
どんなに喜んで貰えたらうにと、昔の家は戦火にも焼けず残っ
た家、終戦直後の台風にもびくともしなかった家、どうしても
こわす気になれず、三ツの部屋だけそのまま残しました。良かっ
たと思います。池田家もバトンタッチしました。戦前、戦時中、
戦後、世の余りにもはげしい移り変わりにもこの小さな体でも
うたえてこれたと思います。めったに病気もせず幼ない三人の
子をどうにか人並みに育てられたのは、ご先祖さまのお加護と
感謝致しております。あれもしたい、これもしたい、残り少な
い人生を明るくたのしく精一杯生きてゆきたいと、そして余力
で人様のために奉仕させて頂くべく努力を惜しまない積もりで
す。三才の孫が「おばあちゃん早く早くお月さまが出ていろよ」
と手をひっぱってお月さまを拝みます。何と可愛いこと。長生
きして良かったとつくづく思います。神仏の完き愛につつまれ
ますとき、何という喜ばしいこの世界でしょう。

今は主人逝きて四十二年

ばあちゃん逝きて二十八年

もう写真日誌も五十冊位にふえました



詩
·
短
歌

庄内之乱行うた

瀬戸山 幽 畝

(不依平仄)

平成元年六月末日作

幸侃奸倭懷非心▲
倚附三成窺宗藩▲

幸侃 奸倭にして非心を懷き
三成に倚附して 宗藩を窺う。

忠恒誅戮伏見亭

忠恒は誅戮す 伏見亭

飛脚翔来大河原▲

飛脚はかけ来る 大河原。

軍議直繕十二砦

軍議して直に繕う 十二の砦

抛鶴翼城是永仙▲

鶴翼の城に抛るは 是れ永仙。

忠恒来陣東霧島(山田)

忠恒は来り陣す 東霧島

拙斎直屠朝霧城(新橋元光)

拙斎は直に屠る 朝霧城。

赤白二狐深更(ソウ)匠

赤白の二狐は 深更にめぐり

冢屍五百元町崩(ちやうし)

冢屍の五百は 元町に崩る。

両将合鎗柳川原(志和也)

両将鎗を合す 柳の川原

舜覚進馬竜頭城●

舜覚 馬を進む 竜頭の城。

西栴井楼瞰千里
城中食盡馬為糧●

西栴の井楼は 千里を見下すも
城内の食は尽きて 馬を糧となす。

野美城頭砦間峽

野之三谷の城頭 砦間の峽

力闘刎落三十級●

力闘して刎ね落す 三十級。

猛士疲労求梅干

猛士は疲労して 梅干を求め

戦後恩賞郡元給●

戦後の恩賞に 郡元を給う。

一百首級累埋整

一百の首級は 重なりて谷を埋め

鲜血洋々如川流●

鲜血は洋々として 川の如く流る。

千観骨埋小松丘(千房)●

千観 骨は埋まる 小松が丘

万兵血流积堂頭

万兵 血は流る 积堂の頭

黑烟冲天鹤翼城(庄内)

黒煙 天に冲す 鶴翼の城

忠恒馳馬諏訪山▲

忠恒 馬を馳す 諏訪ん山。

野伏突蹶枳樹谷

野伏は突蹶す 枳樹が谷

傷兵癒創風呂澗▲

傷兵は創を癒す 風呂ん澗。

三面急襲鯨波声

三面 急襲す 鯨波の声

三百来援决死軍▲

三百 来援す 決死の戦。

逞兵骸碎一戦刀

逞兵 骸は碎く一戦の刀

野馬蹄傷巨松根▲

野馬 蹄は傷く巨松の根。

劍戟響駭行人耳

劍戟の響は 行人の耳を駭し

腥風声寒鎧袖肝▲

腥風の声は 鎧袖の肝を寒からしむ。

中有少年貌如花

中に少年あり 貌は花の如し

縦横馳駆斃敵弾▲

縦横に馳駆して敵弾に斃る。

昨日まで誰か手枕に乱れけむ、蓬が許にかかる黒髪。

累日蘭麝香馥郁

累日ふくいくたり蘭麝の香

積年稚児桜爛漫▲

積年らんまんだり稚児の桜。

戦塵漸息旧主復

戦塵漸く止んで 旧主は復し

干戈匣藏平和更

干戈匣に蔵められて平和は返る。

永仙頸刎脇元牢

永仙の頸は刎ねらる 脇元の牢

元凶族滅薩隅州

元凶の族は滅せらる 薩隅の州。

嗚呼一将功成万骨枯

ああ一将の功は成るも万骨は枯れ

蒼生屋焼糧殮空●

蒼生の屋は焼かれて 糧殮は空し。

仰望残月冷秋風

仰いで残月を望めば 秋風冷かに

俯聴虫声悲枯草●

俯して虫声を聴けば 枯草悲しむ。



史跡探訪

町区南崎喜美

晩秋のひと日 つれだち巡り行く

史跡探訪に ころろ満たさる

薩摩迫御殿の 旧跡の吾佇みつ

島津家の歴史 沁じみときく

いにしえに 空しく逝きし 武士ものふの

自害の跡の 碑も古びたり

若武者の 悲話尚残る 高き原の

形見の桜も 幹のみ残れり

しらじらと芒の穂波 ゆれる山路

安永城跡の たどりつきたり

秋の日の 茅原いっせいの 穂を出して

音たてて吹く 風になひけり

史跡めぐる 人なべてが語るとも

なくひそやかに 芝原を行く

しめりたる 草原歩みがたくして

ようやくつきぬ 釣璜院のあと

道なきみち 皆たどりつつ たづね来し

釣璜院の 古跡もあわれ

登りては又 下りゆく 史跡探訪

老も忘れて 師につきて行く

草もみじ 心の残り 遠き世の

史跡巡りの ひと日終えたり

自らの足で古きを 探ねゆく

喜び知りぬ 老いたる今よ

深ねたる 史跡なべて 哀れよて

散りゆく木の葉の 如く寂しき

戦時中に詠みし歌

昭和十五年七月

灯火管制の 夜をしらじらとひそやかに

咲きし夕顔に 心なごむも

昭和十七年九月

戦時下の たつきつましき 中にいて

児等は伸び行く ころ豊かに

日の本の国の よき子になれかしと

母吾今宵も 祈りつづける

工面して 今日も作りぬ 吾子の服

何はなくとも 強く生きなむ

日の本の 勝つため子等の 伸びるため

堪えてゆかまし 大き試練に

昭和十九年十一月

胸のすく この大戦果 もの煮ゆる

間をかけてより ラジオ聞くなり

夫と共に指もて地図を たどりけり

すめらみいくさの 広さ語りつ

昭和二十年三月

おみならば 竹槍もちて いならべり

ただならぬ世の 思い迫り来

竹槍を 持てば吾が身のおのづから

雄心わきて 力みなぎる

昭和二十年四月

川添の 青竹山に壕を掘る

人今日も又 集まりており

裏山の防空壕の 薄暗く

児はひざの上に 眠りいるなり

この戦い 敗けてならじと 泪しぬ

かの硫黄島の つわもの偲びつ

今宵にも 焼ける家かは 知らねども

つぼみの桜 床にさしたり

昭和二十年四月

(熊原理平様宅に宿泊されてきました。よく慰問しました。)

天翔けり きのうも今日も 特攻の

い征くを見れば 泪こぼるる

花吹雪 さかりの春を よそにして

純忠一途の 荒鷲は征く

紺碧の 空を南へ南へと

わが特攻の 天翔けり征く

爆音は 遠くかすかになりけり

還る日のなき 神鷲泣かゆ

大戦果 告ぐるを聞けば 胸せまり

征きて帰らぬ 人の偲ばゆ

昭和二十年五月

朝まだき 神詣でせしこのひと日

心明るく ミシン踏みおり

み民われ恙がもあらず 朝なさな

神のみ前に 拝ろがみまつる

わが心なごみ行くなり みどり濃き

諏訪のやしらの 大前にいつ

昭和二十年八月十五日

(熊原節子様宅にて敗戦をきく)

今日も又 銃後の吾等のつとめとし

野菜集めに 急ぎ廻りぬ

集め来し 野菜を共に 洗わむと

せし時なりき 敗戦をきく

全身の 力も抜けし 思いにて

共に泣きたり 婦人会の役員

こもごもの 思いもちつつ 戦いの

終りし夜を 皆黙しおり

戦時下の きびしきたつきも 戦勝を

夢みつ共に 堪え来しものを

戦後の歌

昭和二十年十一月

(町区婦人会鶴戸神宮に詣ず)

戦いの苦しみ 敗戦の悲しみを

忘れむとして 鶴戸に向うも

トラックに しきりゆられつ 忘れがたし

空しうにおびえし 長き歲月

黄に朱に 彩るもみじ 沁々と

ながめつ平和の 安らぎにあり

戦時中の 歌をうたえば 皆共に

うたい出したり 泪ながしつ

逢う毎に 心も痛む思いなり

戦争未亡人は 余りに多し

よるべなき 母と子のため ひたすらに

支えとならむ 力なければど

子や孫に語り伝える話

宮之原家言い伝えのこと

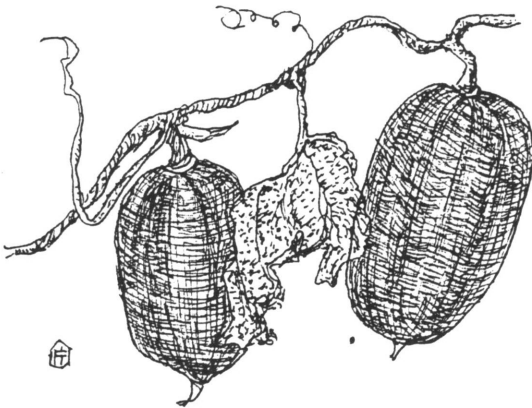
西 区 宮之原 重 忠

島津家の始祖、惟宗忠久（源頼朝の庶長子、後に島津忠久）が文治二年島津御荘の総地頭職に、次いで同三年秋九月には、薩摩・大隅・日向三州の守護職に任ぜられたのですが、それまで忠久を護り育ててきた源氏の武将畠山重忠の娘婿でもある忠久に従って島津の荘へ下向した畠山氏の一族郎党は数多くありました。其の後畠山重忠は北條時政の奸計によって謀叛の汚名をきせられ、北條氏に攻め亡ぼされましたが、当時四歳の三男重俊は家臣石井忠元等数名に守られ紀伊に逃れ成長しました。更に下って重俊の子重弘は二十歳にして飢肥に下向し、宮之原姓を名乗り、北郷（酒谷より都城まで）三百余町を下されました。重弘公から何代か後に、仙溪守（宮之原七左衛門、元禄十四年没）という人がありますが、この人の話として私の家に伝えられていることを述べてみたいと思います。

鹿兒島の島津の殿様が狩の帰りに仙溪守の館に参られたとき、芋を煮て待っていたそうです。殿様が芋を「美味しい、美味しい」と言って食べられたそうです。其の後家来に芋を持たせてくれとの事でしたので持たせて帰りましたが、殿様が前に狩に来たときの芋をくれとのことでしたので、また狩に来てくれと言ったそうです。再び狩に見えたとき芋を出したら「美味しい、美味しい」と食べられたので、「前の芋も、家来に持たせた芋も、同じ芋です。空腹のときは芋でも美味しいのです。」と言ったら、なるほど大変よろこんで帰られたそうです。

また、殿様に招かれて仙溪守がお館に行きましたら、家老より上座に座らせて、ソーメンを出されたそうです。蓋を開けてみると、長い一本のソーメンがツグラをうっていたので蓋を閉めたら、殿様が「食べてくれ」と何度も言われたので、「どんな食べ方をしてもよいのですか？」と言うと「よいから食べてくれ」と言われたので箸でソーメンの端を挟んで立ちながら、ソーメンを回しながら口に入れて食べましたら、殿様が褒美に金一封を下さいましたそうです。

仙溪守から二百数十年、仙溪守の墓は飢肥から移して、今も加治屋（横市町）にあります。



菅原神社（天神様）由来記

東区萩原二郎

天神様の由来

一、一〇五代御奈良天皇御宇天文八年（一五三九年）四月二十九日馬関田（えびの市真幸）の天神を北原氏が志和池宗廟天満宮鎮守（志和池科長―しなが―神社）として移し勧請した。

二、明治六年（一八七三年）庄内地頭三島通庸が来たり大庄内計画を樹て志和池天満宮を庄内に遷し（南天神、鍋倉ユミさん方付近）大庄内の文教の守護神として祀った。その地を天神馬場と言う。（科長神社由来記より転記）

御祭神 菅原道真（すがわらのみちざね）（八四五〜九〇三年）平安前期の学者、政治家代々の学者の家に生れて幼時から学問に励み、官僚としての道を歩むことになり、順調に累進して、八八九年（昌泰二）には醍醐天皇より右大臣に任ぜられた。しかし、ここに及んで道真は、藤原氏のねたみを受け、左大臣時平らの中傷により九〇一年（昌泰四）一月二十五日太宰権帥（だざいのごんのそち）に左遷され太宰府に配流された、配所にいること三年、九〇三年二月二十五日窮乏の中に病死した。

その後、皇室、時平一派の間に異変が相次ぐと迷信深い平安貴族はこれを道真の怨霊（おんりょう）のたたりと恐れるようになり、九二三年（延喜三三）には道真の本官を復し、九八八年（永延二）には北野神社に官幣を奉じて正一位、左大臣を、次いで太政大臣を贈り、一〇〇四年（寛弘一）には一条天皇が北野神社に参拝するに及び天神信仰はその根をおろした。

（一九六二年坂本大郎著「菅原道真」より抜粋）

三、然るにその後、歳を経て志和池に種々の厄病相起り、又藩主島津家にも災厄相続き、これは志和池天満宮の神意に背き遷した故であると祈祷師が告げ、志和池の人々は神威を畏み、天満宮の御神体を奉し、明治十七年（一八八四年）庄内より志和池水流小学校の庭に遷し、明治二十五年（一八九二年）科長神社に合祀し尊崇した。（科長神社由来記より転記）

四、明治二十五年頃（一八九二年）志和池の人々が科長神社に合祀するとともに、庄内天神様も現在地（新天神、野崎兼次さん方付近）に移し、学問の神様として遠近の人々が崇敬したと言う。

付記 本由来記を執筆するにあたって新天神の江口高見さん、野崎兼次さんに援助をうけたことを付言して感謝の意を表したい。

川底の土器

西 区 山 口 耕 三

それは昭和五十二年九月十五日のことでした。庄内川改良工事中、平田橋下流左岸の今屋側十五メートル付近で護岸ブロック基礎の床掘りを重機で作業していました。その時縄文土器と思われる破片数個と、矢じり、石おのと思われるものが床掘土に混じって出てきました。その数年前に菓子野の長岡作業所の下の田圃から土器など出土したと聞いていたので、ここもすぐ近くだし、この付近は昔の集落があったのではないかと思いましたが。

調べてみますと、菓子野町の台地では、人骨や古刀、土器類が出土していますので、この地域でも早くから先人が住まっていたと考えられます。そして地方豪族の墓といわれる円墳が、昭和十四年一月には古墳時代の史跡として県の指定を受けていることが分りました。工事中の出土品もこれらのことと無関係ではないと、大切に保管しています。



東区囀（カクン）馬場の 首なし地蔵さん

東区 福留 ふみ

東区囀（カクン）馬場三差路脇に首なし地蔵さんと言われている首のない一メートル位の石像が建っています。

花の絶えないこの石像を皆不思議そうに眺めて通り過ぎて行きますがこれにはこないきさつがあります。



私の主人福留三男は八年前に亡くなりましたが、この弟に俊光という人がおります。現在妻の実家の高知市に住んでおりますが、この家族に心配事が続き思い余った奥さんが十年くらい前になりました。どうか、祈祷師に占ってもらったところ、「本家（庄内の福留家）の北西の方向に何か大事なものが埋もれている。これを掘り出して祀らなければいけない！」と言われたそうです。

早速、俊光さんが帰って来られて北西の方向を探した所、ここに埋もれていたこの石像を見付けられて掘り出しました。頭はどうとう見付けることが出来ませんでした。丁重に洗いやめてここに安置し、西区の今ヶ倉カトツドン（加持祈祷どん）を頼んでお祭りをしてもらいました。

現在は私が花香のお世話をさせて戴いていますが、毎年四月にはカトツドンを頼んでお祭りをしています。

石像の両脇には次のように文字が刻んであります。

鹿児島住

為二親善提也

前田源（後は欠落）

享保十乙巳七月吉日

片側には

現住

龍恵

と刻んであります。

昔この上には宝蔵坊というお寺があったそうですが、多分明治初年の廃仏毀釈の時に壊されて捨てられた仏像だろうという事です。

しかしまあ、遠く離れた高知市の祈祷師がよくも言い当てたものだとびっくりしています。いつかは高知市から十人ぐらいの方がわざわざお参りに見えました。

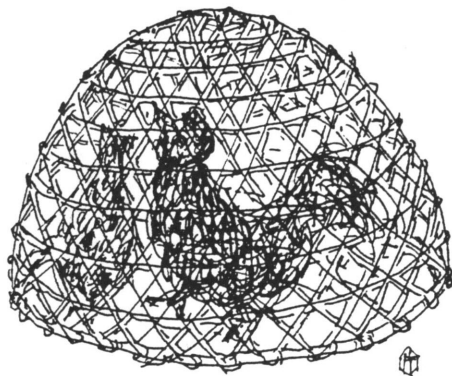
(平成元年七月十六日)

刎ねられた石仏の首どこに凍る

巴旦杏

(註 巴旦杏Ⅱ東区の岩佐道彦氏

庄内俳句会を主宰、多くの門人の指導に当たっておられる)



かくれ念仏洞覚え書き

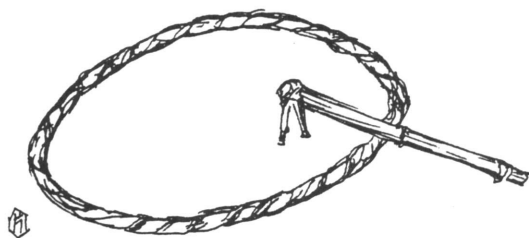
平田和田吉雄

私の祖母ヤソが嫁いできた家から念仏洞までは一五〇メートル位あったらしく、法座の晩はいつもハザゲン（間食）を持って行ったそうです。割に近いのですが、役人の目をぬすんで暗い夜道を一人を通る時の恐ろしさは口であらわせない程でした。この念仏洞は八畳程の広さで、ぶつぼんこう仏飯講の人は北は高崎から南は末吉福山方面にかけて広い範囲の数だったようです。

法座の夜は、取締役人の目をくぐってこっそり集まっておこなわれるのですが、見つかったら極刑を免れ得ませんから役人に対する警戒は厳重でした。当夜は若い青年達が、道の角角に立ち見張ります。役人の姿が見えるとすぐ近所の馬小屋に走り、後にまわって庭箒で馬の尻を二、三回力一ぱいたたきます。驚いた馬は小屋を飛び出し部落中を駆け廻るのです。静かな真夜中馬の蹄の高い音と、青年達の「馬がはなれた、はよつかまえんといかん」の大声とともに部落中大騒ぎの様子です。連絡員からこれを受けた念仏洞の信者たちは一人二人と穴をぬけ出し

姿を消します。自分たちの信心を命がけで守る大衆の知恵でしょう。

命により浄土真宗の位はいは全部焼きすてられ、かわりに渡された一寸五分位の鏡を先祖の霊として祭ることになりました。



先輩から聞いた話

東 区 鎌 田 康 正

オミケン坂の話

豊幡神社前の道を西に向って進みますと、二百メートル位の坂になっていて古江街道に通じています。有田久男さんのお話によりますとこの坂道を「オミケン坂」といい、この坂下周辺を池の上、池の中、坊の下、下の谷と呼んでいます。池の上には大きな池があり、昔この池には片目の魚がいたそうです。近くに妙見様という祠があったそうで、今は乙房に妙見様があり、その祠の下の川の魚も片目だったそうです。坊の下の堀さんあたりにはフゾ坊（宝蔵坊）というお寺があったといわれます。下の谷の西三叉路には首なし地藏さんがあって、今は福留さん、有田さん達が見守りをしています。又西区の上谷の岩切さん宅上の畠あたりには妙覚寺という寺があったとも言われています。安永城とも関係ありそうです。

火の神の話

豊幡神社一の鳥居前右側に石造りの火の神がお祭りしてあります。今村登さんのお話によりますと、昔、北郷通りの家が火事で全焼したので馬場中の人たちの話し合いによって、四、五人の代表の人が四国の金比羅権現に安全をお祈りすることになりました。その時金比羅さんにお願ひして持って帰って祀ったのがこの火の神様だそうです。

昔は毎年秋の祭りを火祈念として盛大におこなっていました。今でも九月二十三日を秋祈念として班で実施していますが、火の神様にお詣りする人は少ないそうです。こないわれのある大事な火の神様ですから、大切に保存してお祭りしたいものだと今村さんは祈っておられます。

石碑には「安永」という字が見られますから、随分古いものらしいことが分ります。



里寺仏壇の話

今屋 鶴島 善市

私の村には起因ははっきりしません、昔から伝わる共同の里寺仏壇があります。

多分、明治の初め頃から始まったのではないかと思います。

私たちの幼い頃（大正の中頃）、よく祖父母に連れられてお寺参りに行ったものです。

その頃は電灯もない家庭が多く、ランプや大きなロソクを何本もつけて薄暗い部屋で布教師の読経や、お説教を聞いたものでした。

それが終ると各自持寄りのにぎり飯や煮しめのご馳走を頂きながら夜遅くまで大人達ののんかた（宴会）が続いたものです。仏様を預かる家では正月を始め、春秋のお彼岸御座廻りとか御色干し（仏壇、仏具などをきれいにする儀式）とか色々な名目で年内には五、六回の集会があり、寺宿としては本当に大変だった事と思います。

また、正月の御座廻りには前の布教地まで師をお迎えに行き

家族総動員で接待、行事がすむと次の布教地まで送って行かねばならず、今のようになりものない時代に遠い道を歩いて苦勞されたと思います。

五月の田植え時には門徒から一人ずつ出て寺宿の田植えに一日奉仕したものでした。

不幸にして家庭に亡くなった方がある時は、寺宿の家から仏様をお借りして葬儀をすませたものです。

昭和の時代に入って各家庭に仏壇が買われ、寺元も必要がなくなり、いつの間にかこの習慣も絶えてしまいました。

今はその当時の面影をとどめる仏様だけが寂しく残っています。

追記、この里寺法座は飯野、加久藤、志和池、森田、今寺、千足寺、霧島方面と幅広く布教されていたことを古老に聞きました。



一門講の話

今屋新地 美德

今屋部落には十五、六戸から成り立つ一門講があります。

年代は解りませんが、大分古い話だろうと想像されます。

その起因は、大川（今の庄内川）の橋掛け工事中にある旅人（伝説では六部らしい人）が橋を渡らしてくれと頼んだのだそうです。

渡さぬ、渡せと押問問答の末、夜中にこっそり渡ろうとして

いる旅人を村人達が見付け無礼打ちにしてしまったようです。

そんなことがあって二、三日後、子供が川におぼれるやら、訳の解らぬ病気がはやるやら、部落には次から次へ禍がふりかかったそうです。

そこで誰言うともなく「これは六部様の祟りだ」ということになり、死んだ霊を慰めるためにこの講が始まったと古老に聞いています。

その当時橋掛け工事に加わっていた十五、六戸の子孫が今でも正月、五月、九月の年三回、廻り順番に集まって霊を慰めて

います。

昔の證據になるものは、ただ順番を入れる竹筒だけですが、これも最近になって新しい竹筒に取り替えられ、今は残っていません。

今後、いつまでも祟りが無い様に今屋部落の幸福を祈ります。

追記、菓子野の前田氏宅の近くに同じ伝説の小さな墓石があります。これは今屋の講と似てはいますが同一のものとは考えられません。要研究。



三体の田の神さあ

今屋 鵜 島 美 鶴

今屋部落には、三体の田の神さあが祭っております。

いつ頃のものか年代ははっきりしませんが、大分古いものだろうと想像されます。

昔は他部落の人によく盗まれていたそうで、今屋では人の目につかない池藪の中や人の寄り付かない場所に隠して置いておりました。

それを近年になって田圃のよく見える場所に移し替えて祀っております。

終戦前までは、田植えが終ると各家庭でまんかんめし（赤飯）や煮しめを神さあにお供えして豊作をお祈りしたものです。

戦後は一部の人がお参りするだけで、若い人達は何処に祭つてあるかも知らない様です。

できる事なら三体を一か所に集めて皆んなにもよくわかる様にしたいものだと考えているところです。

現在は、神さあ祭としては特にやっていませんが、部落とし

ては四月十八日に春祈念、馬頭観音（供養の松）祭と合併して大人も子供も一緒になって祝っています。



田原坂で戦死した

孝之丞のこと

西 区 塚 野 民 衛

私の祖父塚野定には、男子が孝之丞と、私の父にあたる貢、福次の三名と、女子二人ありました。ですから孝之丞は、私の伯父にあたります。父貢は明治元年生まれですから、伯父と三元気で遊んだことなどよく話してくれましたが、四十才で亡くなりました。祖父の方は大正二年、七十四歳で亡くなりました。この祖父が伯父のことなどを話してくれたことを覚えています。元気がよく、きかん坊で、体も大きい方だったので、若いのに喜んでみんなと従軍したのでしょう。

戦死したのは明治十年二月二十二日、肥後の国吉次峠、下沖迫、行年十六歳となっています。祖父の話によると、遺体の引取りには、同郷の大神伊助さんが孝之丞より三才位上だったようですが、戦死した時も一緒だったそうです。それで伊助さんと、別に二人頼んで遺体の一部を持ち帰り、庄内町西区の塚野家墓地に埋葬したそうです。厳しい薩軍糾弾があったことと思

いますので、恐らく西南の役後数年のことでしょうか。

私は三十五、六歳の頃、熊本の松田農場にいきました。その頃田原坂の墓を見に行き、孝之丞の墓がこわれていたので、土地の青年の方々のご協力で、近くに記念碑を建て大臣の書も戴くことになりました。

(註) 同氏は平成元年九月一日、九十三歳で逝去されました。

祈御冥福



▶ 荻迫柿木台場

東野孝之丞戦没之碑

塚野孝之丞の墓詣りのこと

らく往時をしのおことでした。

今屋花盛 林

都城市高齢者クラブ会長会で、昭和五十二年の秋熊本一泊旅行がありました。庄内地区は南崎さんが会長さんでしたが、ご都合があり私が参加しました。西南の役で最も激戦地だった田原坂では、各戦跡、官薩軍墓地とともに、荻迫にある「東野孝之丞戦没碑」にもお詣りしました。ところが、周囲を竹やぶにかこまれ、草かげから僅かに石碑が見えるという状態です。

旅行から帰って、庄内地区の高齢者クラブの集まりでその話をしたところ、何とか我々の手で手入れしたいものだと相談しました。そして翌五十三年の七月、庄内地区の高齢者クラブ会長十三名、市から養護の方もつきそっていただいて熊本へ参りました。塚野民衛さんをご都合で行けませんでした。孝之丞のお話などお聞きし、ご餞別もいただき、掃除用具、お線香と心配りしてもらいました。

暑い夏の日でしたが、皆元気で孝之丞碑のまわりを清掃し終え、線香、焼酎を供え、荒木大将の碑文を語らいながら、しば

所在地 植木町荻迫字四塚

東野孝之丞戦没碑

陸軍大臣荒木貞夫書 花押

君ハ日州庄内ノ人西南役僅十五

才ニシテ薩軍ニ投ジ奮戦此地ニ

没ス時ニ明治十年二月廿八日義軍遂ニ

敗レシモ君カ英靈ハ永ク此地に眠ラン

昭和七年七月盡日再建

海軍大佐丹生猛彦

櫻井青年會

津野田義一郎

松村英記

坂本正一

沢田延音

鹿児島縣揖宿郡指宿村宮ヶ浜石工 春田榮一

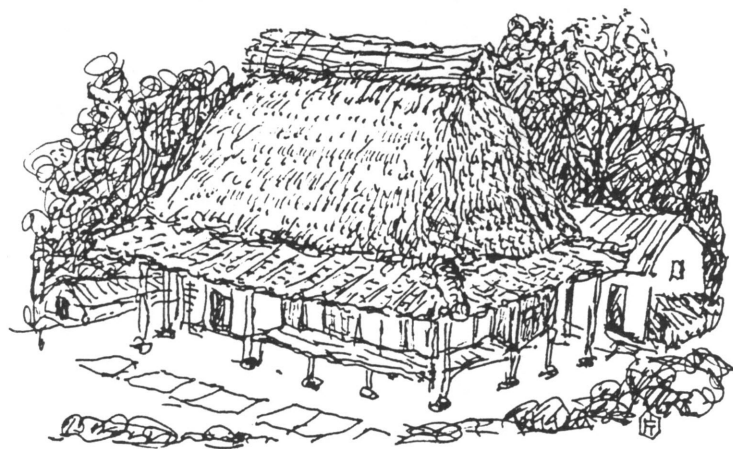
孝之丞の墓詣り

西区山下尚則

私の家は塚野さん宅の隣ですから、親しくおつき合いしています。

花盛林さんと私は同年で、ちょうど西区のクラブ会長をしていましたので、一緒に行きました。民衛さんは都合が悪く行けなくて残念でしたが、嫁の米さんが大変よくしていただきました。折角行かれるのだからと、供物、清掃用具等、いただいたことを覚えています。

民衛さんは、若い頃は青年団の中心であり、篤農家として部落での活躍も盛んでした。年はとってもお元気で、中々しっかりしていて、遺族会の仕事も永いこと責任者として、尽くしていただきました。



塚野孝之丞の墓詣り

関之尾 佐土平 栄 蔵

そうです。この写真が、庄内の高齢者クラブ会長会で、熊本
田原坂の西南の役古戦場に行き、孝之丞碑にお詣りした時の写
真です。（それは、西南役、荻迫柿木台場跡という二米近くの
大きな標柱を中心に、市保健婦の川越さん、会長さん方十五名
と、左側に墓石が見えます。日付は八・七・二七となっています）

この左横に見えるのが孝之丞碑です。細い道路から少しは入
りこんだ小高い丘の下に、倒れてやぶの中に埋もれていました。
私たちは暑い夏の日差しの中でしたが、周りの草を払い、碑石
もこのようにきちんと建て直しました。そして持参した線香を
たき焼酎をそそいで、郷土の勇士をしのぶことでした。



父より聞いた昔の歌

町区重久政雄

私は四才から五才の頃よく父に風呂に入れてもらっていました。いつも一緒に入って洗面器（ブリッキ製）を湯面に浮かべてバルチック艦隊の話等してくれたものでした。東郷平八郎の日本海海戦の話とか、日清日露戦争の話をよくしてくれていましたので、心はずませ乍ら聞いていた事を覚えています。特に第六師団の唄の一節を今もはっきりと記憶しています。

「ここは征旅の第六師団

榴散弾、重砲弾、バリバリ　バリバリ　バリバリ

ピュードン　ピュードン　ガッター　ガッター

満州の果てに」

と言う歌でした。今はもう懐かしい亡き父を想い出すすすがともなっていました。

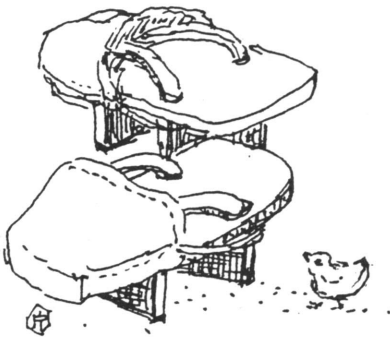


火事場の腰巻き

町区山元芳子

昭和の初期頃迄かと記憶していますが、私の幼い頃、付近に火事がありますと、すぐ親が「オイ早よう赤い腰巻を持って屋根上に登っ、風向くむいて振れ。」と言っていた事を覚えています。今は迷信じみていますが、当時は藁ブキ屋根で火の粉が舞って類焼を防いでいたのではないかと。古伝を見ますと魔除け虫除け火除けは古くから使われ、唐書にもあり、(籠底書)

(春宮図) 春画も又魔除けに「この物よく火災を厭す。」と又春画は家に置くと夫婦の仲むつましく、神経もとがらず過失もなく火事も起らなく道理となる。それが魔除け虫除け火除けの迷信となったのでは。女の腰巻を屋根の棟で旗にして振ると云う俗習ができていたが、これは別に延焼を防ぐてだてにはならないかと思えます。



桜会のこと

馬籠良孝

桜会といえば大正末期から昭和初期の頃、盆地の山手の方からまた曾於郡末吉財部の方から、働く場所のない青年達が出稼で年期奉公に来ていた者の集りであった。

当時乙房地区は農業や養蚕業の振興がめざましく、特に養蚕業は宮崎県でも有数の産地になっていた。乙房の住家は養蚕室兼居間で八畳の間が六つも八つもある大きな家で、周囲の畑地はすべて桑園で埋まっていた。どこの家でも労働力が不足しこの人達の助けなくしては、産業の発展はなかったといってもよかった。

契約は男子が最高米俵十二俵金十二円、女子が七俵七円ときまっており、子守は一俵一円、中には無償の者もいた。地区にあつた業者が居り、年令仕事の上手下手健康の度合などの条件により、正月元日から十二日までに契約を終え、十三日から新年度の仕事が始まった。

仕事の内容は家族と一緒に仕事に従事し、家長の計画に従い

率先して働きその原動力となった。部屋も割当てられ家族の一員として待遇された。

忙しい時には夕方暗くなるまで働き、仕事の区切がよかったり雨となった日などは、仕事を中止し休養や自分の時間を持つことも出来た。夏は養蚕の仕事が多く、冬は農閑期とはいっても、収穫の用意や準備など仕事は多く三十日間は夜なべするきまりになっていた。現在のような労働基準法などは勿論なかったが、正月の年始年末の休み、田植、盆、運動会、村祭りなどおおよそ十日間位のきまった休日はあったが労働の連続であった。傭女の父親が一晚泊りで歩いて来て、大きくなった娘の働く姿を見て安心して帰り、生活に困っている家庭では自分の息子の給金を前借して帰り、本人は契約金の中から差引いてもらって用を足していた。

また傭人男女同志が好きになり、添うこともできずに鉄道自殺をしたり、二人で駆け落ちしたり、ある者は家を逃げ出して炭鉱に行ったり、ある者は仕事に馴れず郷里に帰ったり、身体が弱くて病気になったり、悲しい事件もいくつあった。

国運の隆昌と共に地区の産業も益々発展していった。桜会の人数も多くなり地区青年会を凌ぐ程になった。男子六十数名、女子四十数名（女子は桜会員ではなかった）になり百名を越え

たともいわれた。養蚕の最盛期には財部五十市方面から数十名の季節労働者も入り込んだり、昭和五年には小学校卒業生も五十名を越えていた。賑やかなもので現代の世相とは違い活性化ならざるを得なかった時代であった。

昭和六年の頃、地区有志の宮田敬二氏が桜会結成の労をとられた。規約や会長等の役員もでき地区の行事など青年会と同じく参加するようになり、特に運動会などは活気を呈していた。また修養のためにも例会を開いたり、風紀問題は論議の中心となった。役員には桜会という文字の入った提灯などもわたり夜の見廻りや急用にも応じていた。

かくも活気を呈していた乙房地区も、世の中が次第に厳しくなり、国策として臨戦体制が取られてきた。軍需工場ができて工員として働き、また兵隊として行かなければならなかった。桜会の人達も少なくなりその影をひそめていき老人と婦女子の住む農村へと変っていった。



年寄りの智恵

西 区 西 俣 富 子

私の父は明治十四年の生まれで、七十四才で亡くなりました。学はありませんでしたが、生きることには誠実な人であったと自負しています。いつも私達に言っていたこと、今思い出すまま記してみました。

。自分をよく知れ、人の悪いところは見ないで、良いことだけを見よ。 。盗人は一緒に歩いて、嘘を言う人とは道連れになるな。自分で人の陰口を話しかけて、よそでは相手の人が言ったように言いふらす。 。一寸先は闇だ。自信の無い約束ごとはいけない。 。田畑の仕事から昼食に帰るときは必ず農具を持って帰っていた。午後どんなことがあるか分からないから。

又、天気予報もよく当りました。 。夕方西の空に土手を作ったような黒い雲ができたら明日は風になる。 。魚のうろこ雲なら三日は晴れ。 。筋をひいたような雲なら三日の中に雨。

。関尾谷に雨が見えたら、何をおいても大雨の準備をせよ。

普通、人が狐にだまされるのですが、猟に出ている父は狐をだましていたそうです。鳩を五、六羽ぶら下げて帰る途中、車もめったにない時代、山道を明るく照らした車らしい音が近づいてくるそうです。明るいライトを避けてよけるところで鳩をうばうつもりだったのでしようが、永年の経験で父は狐と知って、銃をかまえ「うつぞ」というと、プーッと光が消えたそうです。きれいな、丸まげの女の人がたくさん乗った汽車が目の前を通ったこと、こんな話を聞くのが楽しみでした。今でも懐かしく話題にしています。



乙房剣友少年団

設立当時の思い出

乙丸虎男

乙房剣友少年団は、明治四十一年正月五日、宮田孝蔵氏が実父孝之助の協力を得て設立された。当時は明治維新以来西洋文明を取り入れ、先進国においつけと富国強兵をめざし、たまたま日清・日露の戦役に大勝利をおさめ、世界強国の仲間入りをし、質実剛健の気風盛んな時代であった。当時我が乙房には先見の明あり、優れた指導者宮田孝之助氏があり、産業・教育各方面に非凡の働きをされた。産業については明治・大正にかけて国策として養蚕業を奨励せらるるに当り氏は巧に之を取り入れたので、部落民は現金収入を得、活気を呈し県下に其の名を轟かすに至った。教育面に於ては、明治五年八月学制が公布され翌六年寺小屋式の学校が誕生し、其の後明治二十一年現在の地に移転し今日に至るかがやかしい歴史が有るのである。

其の頃宮田孝之助は学校教師として生徒の教育に当ると共に、学校建設等にも尽力された功績は偉大なものがある。明治四十

一年には乙房部落民の協力を得て乙房校の北側、現在地永山商店の処に実業補習学校を設立せらる。乙房少年団は精神教育の場として主として剣道を学んだ次第である。以上申し述べたことは乙房少年団の歌がよくこれを示している。

以来旧制中学校（現高校）の上級生が指導者をつとめ毎週土曜日の夜間に開会勉強につとむ。又正月五日には総会を開き盛会であったことを覚えている。時がたつにつれ少年団を卒業した者は青年として剣道をつづけ、近隣町村との親善試合も盛んに行われ、乙房の剣道は他町村を圧倒する実力をそなえていたようである。又社会人としては多数の方々が各方面で実力を発揮し優秀な成果を挙げられた様である。

乙房剣友青少年団が幾多の困難を克服し、今日に至ったことはすばらしいことである。敗戦後の我が国は奇蹟的に経済大國となり物質的には成功したが、精神面では今なお混迷をつづけ、日本伝来の美風までが戦争につながるといふあやまった思想が横行し、教育の荒廢甚だしい現在、乙房の美しい伝統を守る剣友青少年思想は、今後益々さかんならしめることを切望するものである。

神田川堤防決壊のこと

西 区 伊地知 義 夫

庄内橋町下の神田川原横に、安永耕地整理記念碑が建っていますが、これは大正十二年設置されたもので、当時の組合長は堀原氏のようなのです。この耕地整理が行なわれた由来を考えますと、今、私の手許に大正五年三月と記された庄内村神田川原堤防工事記念に撮影された写真があります。それは大正三年か四年の頃、川崎橋下流の神田川原堤防が大雨のため決壊し、今の町下の県道まで浸水し、たくさんのお水田が流失したと聞いています。この写真は恐らく、その新しい堤防工事の折の記念写真だろうと思います。尚水田の流失面積は確かではありませんが、現在でも、水田の地盤は砂利がごろごろしていて、その後、客土したところと、しないところがあるので、一部水利の便の悪いところもあるようです。

記念碑ひとつからも、その由来を探ると、私たちの祖先の生活が自然との苦しめたたかいたたかであったことがしのべられます。



庄内村神田川原堤防工事
記念撮影 大正五年三月
(後方に工事に使われたトロッコが見える)

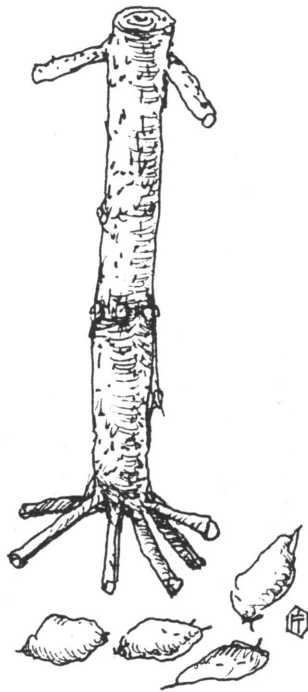
(伊地知義夫氏所有)

旧制女学校時代の思い出

東 区 秋 永 フ ミ

今から六十余年前（大正十四年頃）私は庄内小学校六年から都城高等女学校に入學しましたが、当時は乗物と云ったら木口馬車しかなく寄宿舎に入舎しました。月に一、二回帰庄して居りました。土曜日我家に帰る時は庄内迄徒歩で帰りました。当時は勿論自転車もなく、大部分の人は歩いて都城と庄内を往復して居りました。土曜午後は友達とみの原、牧の原の松並木の下を唱歌をたのしく歌いながら帰ったものです。日曜日午後はお金をもらい馬車に乗って寄宿舎に帰りました。明けて大正十五年の九月庄内に初めて、通学用に朝夕大型自動車が行きながら、庄内の家から通学する様になりました。その車は外廻りも床も全部板張り、車中は硬い腰掛が両脇に付着つり皮付で二十人位が定員でした。ガソリンでなくディーゼルエンジンで馬力も弱く、牧の原坂になると途中でエンストしますので、運転手さんが「皆んなおおりて後を押して下さい」今では想像もできませんでした。それでも当時は毎日文化人気取りで上機嫌で通学

しました。その後、それ迄一日二回位走行していた木口馬車が小型の自動車に変わりました。当時米価一升分が三十銭でした。庄内から都城までの自動車運賃は五十銭でしたので乗客も余りなく、ひる間三回位の運行で充分だった様です。当時の相場では高価な運賃だったようです。年代が変わり昭和の初期自転車が出て来ました。男しか乗らず高価で庄内でも自転車を持っていく家庭は大変すくなかったかと記憶して居ります。都城へ行くにも徒歩が多かったと思います。男子の学生は皆徒歩、女学生も四年間歩き通し通学した人が四、五人位いらっしゃいました。昭和八年頃はマイクロバスが定期に入る様になりましたが、お医者さんは十年頃迄は人力車で往診されていました。戦前は物品を運搬するに馬の背か手押車、荷馬車でしたが、戦後は高価な乗用車、トラックが各家庭に購入される現今であります。昭和三十年頃アメリカに行つて来た人がアメリカは各家庭に二、三台の車を所有し道路はつるつるで（全アスファルト）（全ほそう）されて宮崎あたりからの距離から夜、あそびに来られると聞いて驚きましたが、現実の日本がアメリカの家庭同様です。定期バスは運行して居りますが、乗客の大変少ないのも日本人のマイカー族が増加して居る証明となりましょう。バス、自家用車、公用車と車社会の現象を見聞しながら昔を懐かしく思い



ボランテニア、昔と今

千草 赤崎 哲雄

最近、ボランテニアと称して社会に奉仕する人が多くなった。これは自分の選んだ分野で自分の好きな仕事をして無報酬で社会に奉仕している人達であり、多くの身障者や身寄りのない老人、その他の不幸な人々が援助されており、自分さえよければという利己主義の現代社会に、実に太陽の偉大な恩恵と言っただよい。

私がある昔、帝国海軍のボランテニア (Volunteer、英語の志願兵) を目指したのはただ二十才になって兵隊に引張られるのなら陸軍は嫌いだし若い方がましだと言う単純な考えだけであった。

陸軍が嫌いなのもカーキ色の詰襟服を好まず、反対にジョンベラ (水兵服) 姿がカッコいいと憧れていただけである。そこには、自分を犠牲にするとかいいう悲壮感みたいなものは水兵時代になかった様思う。

しかし、昭和十六年十二月八日、わが国が大東亜戦争に突入

したときからこの考えは変えなければならぬ破目 (運命) に陥ったのである。

戦争の功罪や善悪は別として、滅私奉公、尽忠報国は軍人であれば常に念頭におくべきであり避けては通れないのである。

私の長い海軍軍歴の中でこれが真のボランテニアだと自負できるのは、昭和十七年航空母艦「瑞鶴」の乗組員であったときである。誇りがましくて面映ゆい感じもあるが、ここにその時の感状を披瀝したい。(現文のまま)

感状

第三機動部隊

昭和十七年六月「アリューション」群島方面作戦ニ於テ濃霧ヲ冒シ 悪天候ニ耐ヘ長駆「ダッチハーバー」ヲ反覆攻撃シ所在ノ敵艦船 飛行機ノ大部ヲ撃破シ軍事施設ヲ潰滅シタルハ爾後ノ作戦ニ寄與セル所大ナリ、

仍テ茲ニ感状ヲ授與ス

昭和十八年三月十五日

聯合艦隊司令長官 山本 五十六 ㊦

追記 私は昭和十三年、十八才で海軍志願、佐世保海兵団へ入団、昭和二十年十一月無事復員、

前記の勲功により勲七等瑞宝章を授与される。

ひとつぶの飯

千草 長友 義行

第二次世界大戦の戦中、戦後を通して空腹を経験しなかった人はおそらくいないだろう。

私が学校を卒業したのが昭和十八年三月、そのまま集団就職して航空機工場に勤めた。

あの時代の寮生活の一部を想い出しながら紹介します。

朝五時起床から夜九時消灯就寝までの日課は軍隊生活並とはいなくても、まさに規律正しい生活でした。

まず上半身裸で運動場に集合、乾布まさつ、かけ足、部屋と庭の掃除がすんで朝食となる。

全員がそろって上司の号令で合掌、食事の言葉がある。

「この食物が食膳に運ばれるまでには幾多の人々の労力と神仏の加護によりました事を感謝致します。頂きます。」

どんぶりの蓋を取って、中身と言うと腐れかかったカラ芋がほとんどで飯粒は数える程しかない。

しかし腹ぺこだから決してまずいとは思わなかった。む

しろもう一杯欲しいと腹の虫が要求する毎回の食事だった。

時折り、どんぶりの蓋を取って中身が真白だから「これは今日の飯は豪勢じゃ」と思った瞬間、切干し大根が目に入りがっかりさせられたこともあった。

夏の暑い盛り強行軍があった帰り道、小休止のとき道路わきに大豆の乾してあるのを見つけた。

悪いと思いついながら手が出ていくつかの豆粒をポケットに忍ばせて寮に帰った。消灯前に部屋を抜け出して焼却炉の火でそれを焼いて食べた事がある。

片手にひと握りもないので腹に満す程でもないが、むさぼる様に食った思い出がある。

昭和十九年だったかある日ひょっこり叔父が上京途中に面会に来てくれた。昼飯どきで叔父と一緒に食事をした。

その時、叔父は半分を残して私にくれた。

面会といっても何の土産もない耐乏生活のその頃のことである。叔父はわざと残して私に食わせたのではないかと涙の出る思いだった。

昭和二十年の春頃、都城へ転勤になって千草から通勤の毎日があった。田舎は都会に比べてまだ少しは食糧事情がよかったので毎日持って行く弁当の中身は米と麦の半々だった。

ある夜勤の時、夕食を食べ様としたら私の大事な弁当が無くなってしまった。工員は皆一緒に働いていたのだし多分その時警備に当たっていた兵隊さんが失敬したのだろうと思った。

それにしても中身はまだ我慢できるが、二つとない大事な弁当箱が見付からなかったのが残念だった。

ひもじい思いをして過ごした青春時代の習慣がそのまま残って今でも弁当を食べる時は、蓋の飯粒から先に一粒一粒ていねいに拾って食べるのは私一人ではないのではなからうか。



廟巷鎮の話

千草 永山 武義

爆弾三勇士の話は六十才以上の人ならば記憶にあると思いますので、若い人達にその時の様子をお話しします。

時は昭和七年二月、上海事変（日本ではこう言っています）、これが満州事変となり日中戦争へと発展していったのです。）のことです。

上海に駐留する支那軍（正規軍）は非常に精鋭で堅固な陣地を敷き、頑強な抵抗を続けていたのです。

廟巷鎮と言う所の陣地の鉄条網は特に優れており一部には電流が流してあるとうわさもあつたくらいです。

普通の鉄条網ならば当時の歩兵砲（口径十五糎）で十分破壊できたはずであるが、何故爆薬を仕掛けて破壊しなければならなかったのか。

私も実際見聞したわけではないので、はっきりとは言えないが、支柱がコンクリートで固めてあつたのではなからうか。

歩兵が進撃するためにはどうしてもこの障害物を除去する必

要にせまられ、これが工兵隊の任務となつたわけだ。

そこで工兵隊として竹筒（流布されるが明瞭ではない）に爆

薬をつめ導火線をつけたものを鉄条網に仕掛けて爆破を計った。

決死隊の出発が二月二十二日の午前五時（夜明け前）、その任

務に当たったのが江下、北川、作江の二組以下十二組（三十八名）

であるが、敵陣から撃ち出される機関銃に射ち倒され目的地ま

で無事到着して爆破を成功させたのは二組とも三組とも言われ

る。その中の前記三名は爆破と同時に戦死し、爆弾三勇士とし

て勇名をとどろかしたのです。

これがその戦況のあらましですが、私が感銘深く聞いた話は

決死隊出発時の隊長（松下工兵大尉とか）の訓示です。

「諸兵等のこの度の任務は責任、重大である。しかし死ぬこ

とだけが国に報ゆる道ではない。必ず任務を遂行して帰って来

い。隊長はそれだけを神かけて祈っておる。終り。」

それにしてもその当時私たち重砲聯隊がこれより（二月）早

く戦列にくわわっおればこの尊い生命は失わずにすんだのにと

残念に思ったのは私一人ではなかったのです。

後記 私は昭和五年徴集兵で昭和六年一月十日佐世保要塞重

砲聯隊（攻城重砲）に入営、上海事変に参戦、その功

績により勲七等瑞宝章を授与されました。

支那大陸五千籽を歩く

千草 長友 保

私達、支那派遣軍三七師団二六連隊七中隊（元熊本六師団都城二三聯隊）の果てしない徒歩行軍は北京の南西四百籽の太原（太原）から始まる。

昭和十九年四月中旬、タイハン山脈の山間には小麦畑が散在する。畦の向うから時折小銃を撃ちかける八路军（民間人に変服した便衣隊）、迎撃、進軍、討伐、進軍の昼夜兼行の山地戦を続けながら黄河にさしかかる。

橋の一部は破壊されているが渡河せずにすんだのが幸いである。ここで四、五日間占領地の警備の任務に当る。（行程約六百籽）

第二目的の地は黄河流域を西方へ溯ること八百籽、宝鶏（宝慶）、蒋介石軍最後の據点重慶まで五百籽ともなれば昼間は正規空軍の戦闘機の襲撃が激しく行軍は困難であり、夜間行軍を余儀なくされる。昼夜を問わず襲いかかる蚊の大軍にも悩まされながらの行軍であれば、マラリヤに罹って高熱を発し後方輸送され

る戦友も出始める。ここでは作戦の終局処理（掃討、宣撫など）の任務に当る。（行程約八百籽）

次はいよいよ武漢作戦への参加である。

秦嶺山脈を越えて湖北省に入る行軍は、作戦に間に合わせるために川幅二、三米くらいの小川を下る。砲車は泥にめり込む、馬は足を折る。猛暑に加えて蚊、はえ、シラミに悩まされながら文字通り悪戦苦闘の行軍を続け漢口に着いたのが八月初旬（行程約一千籽）

ここでは八月末まで武昌にかけて占據地点の警備に着く。

息つく間もなく次は長沙作戦への命令である。「岳陽樓の記」で有名なユエヤン（岳州）から長沙へ残敵を掃討しながらコイリン（桂林）、リウチョウ（柳州）までの行軍が私の最も強く印象に残る約千二百籽の行程である（昭和二十年正月）

カメさん（私たち歩兵の愛称）の装備は背のう（食糧、寝具、日用品など）に弾薬、小銃、全重量四十籽、ただ歩くだけでも一日四、五十籽の行程は実に生死をかけた苛酷な重労働である。昼間、残敵掃討のない時は休息をとるが、肌着の縫い目に列をなしている無数のシラミの大軍、とても安眠はできない。

その上引掻くために疥癬になり赤くはれあがり、それにはえがたかり、うじが湧く始末である。

小溝の泥水で炊く飯。ご飯はどす黒く泥くさいが贅沢は言っておれない。センブリでも飲むときのようになだ胃袋に流し込むだけ。衛生管理も何もあったものではないため、体力の比較にならない三、四十才代の補充兵（一般人から召集）はマラリヤに悩まされ日射病に倒れ、赤痢に罹って病死していく者も数多くあった。

夜行軍は疲労困憊の極限であり足を持ち上げるのが精一杯で、歩きながら故郷の山や川、親しい家族の夢をみる。文字通り夢我夢中の強行軍の連続である。

小休止毎にひとり二人と落伍して隊列に戻ってこない戦友、夜の静けさに聞く手榴弾の爆発音（夢の中に聞く心境）は年若い十代の少年志願兵の自殺である。

このような死に直面しながら生き抜いた自分を支えてくれたものは何だったのだろうか。

それは神の力ではない。自分自身があるだけである。

さらに、私達の隊は南下を続けナンニン（南寧）からベトナム共和国（仏印）の国境を越えてハノイに着いたのが昭和二十年八月である（行程約九百軒）

途中ランソンと言う町のアルコール工場警備は長く遠い行程の終りに残る印象深い任務でした。

私は今ここに辛い悲しい思い出の戦記を書きながら死んでいった多くの戦友の顔を思い浮べる。

戦友よ、君達の死は無駄ではなかった。そこには自由独立の運動がみのり、大きな民族解放があったことがせめてもの慰めである。

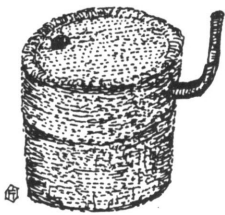
ベトナム、カンボジア、タイ王国の繁栄を祈る。

※地名の（ ）内は旧日本軍の使用したもの

後記 昭和二十年八月十五日、ハノイにて終戦、武装解除、

タイの山奥メコンナヨーク村の英軍捕虜収容所にて翌年

七月まで捕虜生活を送る。



昭和の初め頃の婦人の活動

東 区 黒 木 ツ ミ

昭和七年、今から五〇数年前私の姑は（黒木タイ、昭和五九年百才）お隣りの野崎タカさん（昭和四五年八四才で死亡）とよく誘いあって婦人会に行っていました。当時の婦人会は愛国婦人会で全国にあって天降り式のものでした。皇族の方が見えられます時等、礼服の五紋付きの服装でお出むかえする決まりました。

当時の会長は東区宮路の阿久井マサ様（阿久井憲兵大尉の奥様）でした。副会長が有田ノブ様（故有田三義町長の奥様）、渡司ムメ様（山元虎男様のご母堂）でした。婦人会の構成、内容のあり方は知りません（私は嫁いで間のない事でした。）

当時嫁は使役人としか認められず、我が家の運営も経済も隣り近所との交際も認められず「今日は何しまししょうか」と舅姑にうかがっての生活でした。只、里帰りだけがたのしみと思っていました。当時婦人会の仕事としてお盆用のお菓子作りがなされてきました。それには私に行くように姑が申しつけてまして三

日私は出たものです。場所は宮路の豊幡神社の前に野菜集荷場が阿久井さんの宅地に小屋がありまして、その家でお菓子作りがなされてました。注文により料理は婦人会で一括して購入し、共同作業で三人一組とし二組で世話人が二、三人いての仕事でした。お菓子の種類はもしこ菓子といりこもちでしたが、もしこ菓子は黒砂糖の物といりこもちの四品を作りましたが、中には自家製の米の粉持参で頼まれる人があってこれはむずかしく、切角もしこ菓子に作るはずの物をいりこもちにしなければどうにもならないと言う失敗もありました。当時もお菓子屋さんにはあり、格安で出来ることから沢山の注文があったようです。三日間の作業で先輩の方々の中で仕事をするには気を使いましたけど、教えられることが多くて大変良かったと思えました。お菓子作りのメンバーは八人位でした。阿久井マサ様、有田ノブ様、渡司ムメ様、阿久井フデ様、阿久井ツル様、大神ヤク様、齊藤トシ様、鎌田ナツ様、坂元ユク様、森フミ様、黒木ツミで残念なことに私はほんの下働きだったので結果に対しては何も分りません。第一価格、労賃、純益他参考になると思いますけど書き表すことが出来ず残念に思います。

当時の地域社会の構成は区長、馬場中委員で青年会、消防団が盛んなようでした。地主制度の時代で働こうと思って働く

場所のない頃でした。当時救済事業として有田三義様（東区の区長）のきもいりで東区造林の道路改修が行われました。一日の労賃が男が上と下に四〇銭と三〇銭位で女は三〇銭でした。昼食持ちでそれでも別に仕事がないので何処の家庭でも働けるものは総出で行ったものでした。一日働くと帰りにはお金がもらえるので大よろこびでした。有田様は皆んなと同じように働き、いつもお金を風呂敷に包んで背負っていらした姿が今もはっきりとうかんでいます。婦人会のお菓子作りも三回しか出来ず支那事変が起り、愛国婦人会なるものは、国防婦人会と改称されました。国防婦人会の活動状況に就いては次回に書かせて頂きます。

追記 当時の婦人会長阿久井マサ様について書いてみます。

お若い時は教師で三股出身の方でした。庄内町婦人会長並びに東区婦人会の指導者として、ふさわしい性格の持主で、はっきりと物事はおっしゃるし、非常な先覚者だったと思います。何事も率先してなさる人格者でした。

当時は協同田植が盛んでしたが、阿久井様は農業はさねず、まかないの方をひと手に引受けておられました。

まかないは鶏をつぶして、野菜もきざさんでの料理ですから大変だったと思います。保存食の作り方として、福神

つけや、ビスケット等の講習もなされて、共同田植等には間に合せることを指導されました。阿久井様は以上のような人格者でしたので、東区民の尊敬の的として、皆さまから慕われていました。



朝鮮からの引き揚げ

東 区 原 イ ツ エ

「欲しがりません勝つまでは」の合言葉の下に、物資統制下の不自由さにも耐え、毎日毎日の防空演習、竹槍訓練の日課をこなすことは私達銃後の務めでありました。

戦争で働く兵士の事を思えばこれしきのことにへこたれては申し訳がないと悲壮な気持ちで毎日を耐えぬいて参りました。しかし戦局が長引くに連れて、戦死された方々の話も身近に聞くようになり、だんだんと戦争の悲惨さ惨めさが身に伝わって参りました。しかしそれでもやっぱり私達は勝つことを信じて疑わず一生懸命頑張っていました。

ところが、ある日突然に（八月十五日）全面降伏と言う惨めな負け方を味わう日が来ました。涙ながらに天皇陛下の玉音を聞き戦争が終わったことを知らされました。

主人は出征で野砲隊にいましたが半月後に復員して来ました。内地に引き揚げるまでの二カ月間は朝鮮人の不隠分子が徘徊して外出するのも恐ろしいことでした。

でも何とか七年間住み慣れた京城をあとに出発する日がやって来ました。

食糧事情の悪い中で赤ん坊のミルクだけはどんな手段を講じても確保しておかねばならないと思えば少しばかりのミルクを大事に、生後五カ月の赤ん坊、二才の次女、四才の長男、六才の長女四人と主人、そして私、一家六人の引き揚げでした。五カ月の赤ん坊を背中に負い二才の次女を前にくくりつけ四才の長男の手を引き、一方の手にはもてるだけの荷物を下げて、又長女にははちきれんばかりのリュックを背負わせて歩かせ、主人は体よりも大きい荷物を背中と両手にもって貨物列車に乗り込みました。

殆どお乳の出ない私は、貨車の中でアルコールランプで湯を沸かしミルクを作って授乳しました。二人の子のオムツ取り替えも大変でした。

死ぬ思いでたどり着いた釜山の港でしたが、出帆するはずの引き揚げ船も予定どおり来ず、夜明かする十一月の埠頭は身を切るような寒さでした。凌ぐ物とて無い私達八人は主人がリュックに縛り付けていた蚊帳を寄せあつて夜の明けるのを待ちました。

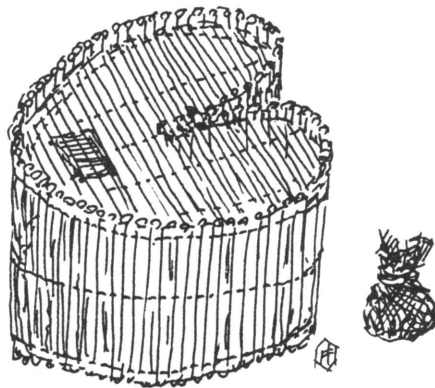
四十四年たった今記憶も薄くなりましたが、内地にたどり着

くまで何日かかった事でしょう。もっていた食糧も無くなり闇
で買い求めたカライモなどで最小限の栄養補給を致しました。

船の上から遙かに故国の山が見えた時は、張り詰めていた気
持ちが足元から崩れるような気持ちでした。そしてとめどもな
く涙が溢れでてきました。主人も溢れる涙を拭おうともせず立
ち尽くしていました。

とにかくここまで生き抜いて参りました。私は生まれて初め
て経験したこの厳しい現実能耐えた力を力として立派に子供達
を育てていきましよう。と心に堅く誓いました。そして又この厳
しさに堪えなければこの子達に申し訳がないと思ったこととし
た。

博多からすし詰め列車に揺られてようやくたどり着いた懐
かしの庄内でしたが、庄内とて衣食住は逼迫しており、本当は
これからは本当の生きる戦いでしたけれども、とにかく私達は
故郷に帰ることが出来ました。そしてけなげな気持ちで第一歩
を踏み出しました。それは終戦の年の十一月の事でした。



とても恐ろしかったこと

東 区 立 山 ト ミ

それは終戦の年でした。

主人は招集されて戦地に行っていました。残されたのは母と私と子供二人そして妹達二人の六人家族でした。勝つことを信じて私も一生懸命働いていました。

その日は八月六日、とても暑い日でした。お昼ご飯を食べに帰っていた時ですから十二時を少し過ぎた頃だったでしょう。空襲のサイレンが鳴り響きましたが、いつもの事で慣れっこになって家の中でジッとしていました。しかし今日はどうも様子がおかしく何やら騒々しいので外を覗いて見てびっくりしました。都城方面は一面黒い煙で覆われているではありませんか。そして何機かの敵の飛行機が入れ代わり立ち代わり無気味な音を響かせてバンバンバンバンバン、低空で機銃掃射を繰り返しています。

私の家は都城がよく見える場所でした。見る見る都城は火の海になっていきました。呆然と立ちすくんでいるうちに今度は

こちらの方目掛けて一直線にやって来るではありませんか。もうどうして防空壕に逃げ込んだか分かりませんでした。外では物凄い音がつづいています。庄内には本土決戦に備えた色々な軍需物資がたくさん集積してありましたので、それを目掛けて攻撃して来たのでしょうか。しばらくして消防の人達や兵隊さん達が、"ここは危ないからあなた達もここから逃げなさい、煙に巻かれないように早く早く"と言われますので外に出てみて驚きました。庄内の町のおそこもここも火の手が上がり黒い煙が濛々と渦巻いていました。その中を敵の飛行機は入れ代わり立ち代わり物凄い音を響かせて突っ込んで来ました。全く生きた心地はしませんでした。それは凄まじいものでした。こんなところでこんな恐ろしい光景を見るとは誰が想像していたでしょう。でも逃げなくてはと母と子供二人、妹二人どこをどうして逃げたか分かりませんが、無我夢中で山のほうに逃げていました。みんな手を取り合って体を寄せあつてうずくまっていました。

私達は戦争というこんな恐ろしいものを目の当たりに見、そして体験しました。もうこんなことは私達だけで十分です。子や孫には絶対体験させたくありません。

あの時の事を思うと今はほんとに幸せです。

終戦前後の思い出

宮田孝行

昭和二十年四月より学徒動員により北九州戸畑駅裏の日立製作所で大砲の先端部分をつくる旋盤工として働いた。

寮の食事はドンブリ御飯。と言ってもおかずは甘藷の蔓と葉の塩煮、御飯は大根に米粒がくっついていただけだった。空襲の時は防空壕に避難した。栄養失調みたいで吹き出ものが出来て今でもその跡が残っている。

二十年六月頃二十才の徴兵検査。現庄内中学校(旧青年学校)の運動場で点呼のみで身体検査もなく全員合格二十名位。

工場に帰る途中列車が夜中熊本駅でB29の大空襲に会った。友達に食べさせようと、シソをませたニギリメシ約三十個を炭火でこんがり焼いてリュックに入れていたが、駅ホームに置いて逃げた。朝来てみるとちゃんとあって嬉しかった。

九月から炭鉱動員ということになり、八月十三日の夜行で都城に向かった。翌昼空襲で延岡の鉄橋が落ち広瀬駅まで不通となり、四十八時間かかって宮崎駅迄歩いた。途中持っていたソ

バ粉を川の水でといて食べた。美々津駅前の食堂で持っていた米二合位をたいて下さいと頼んだら、「都城迄帰るのなら大切にしないさい。ここに海軍さんの食べ残りがあからこれを食べなさい」とのこと。嬉しかった。然し四十年過ぎた今でもその店にお礼に行っていない。心苦しくよく思い手す。途中都農の松並木を歩いている時、子供が人家から出てきて「重大放送があるから聞きませんか」と呼んでくれた。真昼のあつい時、休みをとるつもりで聞いたが全然聞きとれない。終戦の玉音放送とは考えも及ばず歩いていると、陸軍将校が「日本が負けた」と、こわい顔で教えてすぐに行った。十六日夕方宮崎駅から都城に帰りついた。靴はこわれハダシだった。

もう寮に帰らず自宅で農業の加勢をする。

十二月二十七日一人でリュックに米、ハンゴウ等をつめ長崎原爆の跡を見に行った。一面焼野ケ原。長崎駅は小さなバラック建てだった。姉が長崎県神の浦に疎開していたので、長崎港より船で二、三時間かかって行った。丁度義兄が引揚船の機関長で米軍のLSTで長崎港に帰ってきたので、上陸用の舟で湾内を一周した。あの大きな船台が鉛棒のように曲がっていた。

この原爆で叔父一家三人が死亡した(母の弟)。原爆で死んだ「浴衣を着た少女二人」の絵が何回かテレビで放送されたが、

その一人が叔父の娘美那子である。放送のたびに電話がきた。
広島原爆の跡を見たのは十年位後である。三人の冥福を祈る。
現在の日本は皆様の見られる通りである。



編集後記

六月上旬に編集にかかって五か月、十月末に校正の運びとなりました。

この間、原稿を寄せて頂いた会員、地区の有志の皆様にご感謝申し上げますと共に、原稿集めに何かとご足労下さいました地区理事に対し心から厚くお礼申し上げます。

研究、追憶、詩・短歌等、個性にあふれた作品は言うに及ばず、「子や孫に語り伝える話」は他に類を見ないこの会誌の特色と自負しております。

用字用法については、新漢字、新用法を使用しましたが、作者の心意を斟酌し文章を生かすために旧漢字、旧用法も織り込みました。

なお、執筆者の氏名には、すべて敬称を略させて頂きましたので御了承下さい、

末筆ながら、表紙の写真、名所旧跡の写真撮影に献身的に尽力下さいました文昌堂に対し深く敬意を表します。

平成元年十月吉日

編集委員

野海正治	馬籠良孝
白杵徳光	木幡敏正
山元昭平	清水省三
坂元徳郎	和田吉雄
片ノ坂登	池田シヅ

平成元年度 庄内の昔を語る会会員名簿

事務所 庄内地区公民館 Ⅷ 三七〇八八八

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	No.
〃	〃	〃	〃	町区	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	西区	関之尾	地区
東	鎌	南	山	福	藤	宮	西	蒲	奥	伊	津	池	山	藤	野	清	菓子	伊	肥	氏
常	田	崎	元	崎	村	之	俣	生	田	地	曲	田	口	村	海	水	子	地	後	名
次	学	キ	昭	孝	松	原	富	芳	正	修	弘	シ	耕	正	正	省	野	知	重	
三七〇二二一	三七〇〇八六	三七〇一六四	三七〇六七〇	三七〇一〇八	三七一九六七	三七〇三六七	三七二〇六七	三七〇二九三	三七〇三七三	三七一〇九七	三七二四八六	三七二一三二	三七〇三四九	三七〇三〇八	三七一四八四	三七一八一四	三七一八九一	三七二〇九九	三七二〇三五	TEL
40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	No.
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	東区	〃	〃	〃	〃	〃	町区	地区
黒	原	秋	鎌	黒	萩	帖	立	新	黒	椋	坂	木	片	前	山	大	井	大	水	氏
島	イ	永	田	木	原	佐	山	穂	木	田	元	幡	ノ	田	元	田	上	河	谷	名
昭	ツ	フ	康	ツ	忠	ミ	ト	照	聖	徳	徳	敏	坂	ケ	ます	美	将	内	文	
典	エ	ミ	正	ミ	子	ヤ	ミ	子		泉	郎	正	登	イ	子	智	爾	浩	江	TEL
三七〇二〇五	三七〇三九八	三七〇一七四	三七〇二六五	三七二二八二	三七〇一一二	三七〇〇二一	三七〇八五〇	三七〇一〇九	三七一六六〇	三七〇七七六	三七〇三五〇	三七一六五〇	三七〇五二五	三七〇三七五	三七二二二六	三七〇八四三	三七一九〇二	三七〇五六七	三七一四七六	
60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	No.
蓑	庄内地区 公民館	南	蓑	〃	〃	乙	〃	〃	〃	平	宮	〃	〃	〃	千	〃	〃	〃	今	地区
原	館	鷹	原	〃	〃	房	〃	〃	〃	田	島	〃	〃	〃	草	〃	〃	〃	屋	
吉	日	岩	佐	宮	乙	馬	野	西	和	和	坂	白	白	今	白	鶴	花	田	鶴	氏
川	高	佐	藤	田	丸	籠	村	原	田	田	元	杵	杵	吉	杵	島	盛	村	島	名
一	覚	佐	蕃	孝	国	良	君	功	吉	輝	元	徳	ア	エ	京	美	林	誠	善	
郎	助	フ	蕃	行	彦	孝	雄	功	雄	男	庸	光	ヤ	リ	子	鶴	林	誠	市	TEL
二三一一三三七	三七〇八八八	二五一三五三九		三七一七二二	三七一一三三六	三七〇八〇四	三七〇八九二	三七二四七六	三七二七一九	三七〇六三二	三七一七六二	三七一八五六	三七一八五六	三七二四〇九	三七一七〇九	三七〇六五二	三七一六六七	三七二二七八	三七二二六八	

庄内の昔を語る会会則

(名称)

第一条 この会は、庄内の昔を語る会（略称 昔を語る会）と称する。

(事務所)

第二条 この会は、庄内地区公民館に事務所をおく。

(目的)

第三条 この会は、庄内地区およびその周辺地域の歴史、民族、地誌の研究と顕彰につとめることを目的とする。

(事業)

第四条 この会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- 1 郷土資料の所在調査及び収集整理に関すること。
- 2 史跡、文化財の探訪・顕彰及び保存に関すること。
- 3 会員の研究発表及び親睦に関すること。
- 4 講演会、展示会等の開催に関すること。
- 5 会報その他情報伝達に関すること。
- 6 その他目的達成のために有意義なこと。

(会員)

第五条 会員は、この会の趣旨に賛同する者を以て構成し、入退会は自由とする。

- 1 会員は、所定の会費を納入しなければならない。
- 2 会員は、この会の諸事業に参加することができる。

(役員)

第六条 この会に次の役員をおく。

- 会長 一名 副会長 二名 理事 若干名
常任理事 三名 書記 三名（会計一を含む）
監査 二名

(役員の出選と任務)

第七条 1 会長は理事会で推薦し、総会の承認を受け、この会を代表する。

2 副会長は会長が推薦し、理事会及び総会の承認を受け、会長を補佐する。会長事故あるときはその代理を務める。

3 理事は会長が推薦し、総会の承認を受け、会の運営を行う。

4 常任理事は理事の互選により選出し、総会の承認を受け、会務の企画立案を行う。

5 書記は理事の互選により選出し、総会の承認を受け、会の総務、書記、会計事務を行う。

6 監査は理事会で推薦し、総会の承認を受け、会の運営状況を監査する。

(役員任期)

第八条 役員任期は二年とする。但し、再任を妨げない。

(顧問)

第九条 この会は、顧問をおくことができる。顧問は会長が推薦し、総会の承認を受ける。

(会議)

第十条 1 総会は年一回会長が召集し、会則の改廃、予算及び決算その他の重要事項について審議する。会長が必要と認めるときは、臨時総会を召集することができる。

2 理事会は総会に次ぐ審議機関で、会の具体的運営について審議する。

3 常任理事会は会長、副会長、常任理事、書記で構成し、毎月一回会務の企画立案を行う。

4 この会に部会、専門部会をおくことができる。

必要な事項は理事会で審議し定める。

(会計)

第十一条 この会の経費は、会費、補助金、寄付金その他の収入をもって充てる。

1 会費は年額一千円とし、総会時に納入するものとする。

2 この会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わるものとする。

付則

この会則は、昭和六十二年五月三十日より施行する。

庄内 創刊号

平成元年十一月一日 印刷
平成元年十一月十六日 刊行

刊行
編集

庄内の昔を語る会
都城市庄内町庄内地区公民館
電話(〇九八六)三七一〇八八番

印刷
有限公司 文昌堂

都城市東町十八街区一号
電話(〇九八六)二二一一二二番

銅 屋根

(建物の型状・大小・遠近に拘らず御相談下さい。)

営業
品目

社寺仏閣銅板工事・各種雨樋
長尺鉄板屋根葺・長尺カラスバンドレル
折版構造・Wデッキ150・設計施工

宮崎県知事許可(般-62)第7269号



江口板金工業株式会社

代表取締役 江口高見

宮崎県都城市庄内町12340番地口

TEL (0986) 37-0161

FAX (0986) 37-1904

祝 庄内の昔を語る会

内閣総理大臣賞受賞
農林水産大臣賞受賞

都城茶

創業明治二年

南崎常緑園

特定建設業
土木・建築設計施工／一級建築士事務所

 **丸宮建設** 株式会社

代表取締役 宮 竹 繁 美

都 城 市 庄 内 町 8 0 3 1 - 2
電 話 (0986) (代) 37-0382 番
FAX (0986) 37-0371 番

綜 合 写 真

 有限
会社 **ふくざき写真館**

代表取締役 福 崎 孝 臣

上町スタジオ 都城市上町17-18
☎ (0986) 22-5786
庄内スタジオ 都城市庄内町12477
☎ (0986) 37-0108

特定建設業（特62）第101号
土木建築設計施工・一級建築士事務所



丸久建設 有限 会社

代表取締役 久保卓也

都城市庄内町8065
TEL (0986) 37-0116
FAX (0986) 37-3151

医療法人 社 団 田 中 会

内 科
小 児 科

庄 内 田 中 医 院

都城市庄内町12531
TEL (0986) 37-0507

内 科 消化器
呼吸器
循環器

理学診療科・小児科

久保原 田 中 医 院

都城市久保原町13-1
TEL (0986) 22-7700

理 事 長 田 中 昭 彦

